

ISSN 2432-5104

スポーツ科学研究

Journal of Sports Sciences

第7集 令和5年3月



日本大学スポーツ科学部
スポーツ科学研究所

目次

[巻頭言]

小山 裕三…コーチング学による指導法の将来について…………… 3

[専門科目分野]

[原著論文]

原 怜来ほか…オープンウォータースイミング選手の生理学的特性について…………… 7

[研究資料]

山本 大ほか…サッカー指導者養成講習会受講生の意識調査に基づく現状と課題……………15

[総合科目分野]

[総説]

清水 享…博多祇園山笠に関する著作について（前・後）……………35

[原著論文]

桶田 由衣…遊び, 非難, 残忍さ: John Milton の作品における “sport”（前・後）……………47

[事例報告]

日吉 秀松…ピンポン外交と日本の役割についての考察（前・後）……………59

2022年度 組織名簿一覧……………71

2022年度 研究活動実施報告……………73

執筆要領……………84

編集後記

コーチング学による指導法の将来について

小山 裕三^a

Key words: 投てき競技, スポーツ運動学, スポーツ科学

コーチング学は、「スポーツの練習・トレーニングと指導に関する学問」であるが、中でも陸上競技を専門とし、コーチング学に身を置くものとして、動きの構造や技術、戦術に関わる自然科学的な研究は多くみられるものの、自身が専門とする「その運動はどうすればできるようになるのか」という動きの発生に関わるスポーツ運動学的見地からの研究が少ない。そのため、これまでの経験知からその見地に立った指導論について紹介をしたいと思います。

陸上競技において、①強いチームを作るためには、「コーチに責任を持たせること」、「優秀な選手の勧誘」が重要と考える。②その上で選手を育てるということは、家庭環境（場合によっては家庭訪問）の理解が必要とされ、どのような教育・指導環境で育ったのかを知ることが必要です。選手は学生ですから、相手のチャンネル（会話）に合わせ、コミュニケーションを積極的に取ることにより、更なる会話を大切に、それによって相手をよく知ることに繋がります。③専門とする投てき競技は非常に技術を必要とする種目です。技術習得には反復すなわち繰り返しが必要であるが、その習得方法として以下の3点に配慮しています。

一つは、その習得のために基本技術を個性より優先させるが、自身の考え方として、基本がないものに個性を優先させることはただのわがままです。一方で、この基本技術について技術的側面は後述しますが、技術を身につけるためには、選手がその戻る場所として、家庭・家族が必要です。二つ目は、コーチは100%の理論・知識を身につけることに努力する必要があります。そのため選手には100%の技術を求めているが、許容範囲を何%にするかがコーチの度量です。三つ目は選手には同じ過ちを繰り返させないということです。これは、選手にはそのコーチングに対

し、物事への受容性を理解させ、人の話を聞く態度と姿勢を身につけさせます。なぜならばその経験から、自分ではわかっていると思っても、実はその理解があまりに浅いものであることが多く、客観的にはわかっていないことが多いからです。

技術習得の具体的な方法論として、砲丸投げを例にとって説明をします。自分自身に自信をつけさせるには、「やればできる」、「考えればできる」、「願えば叶う」を実践しています。これには投てき後の計測距離を記録以上に伝えたり、ルール上8.26kg（男子）の砲丸を通常と軽いもので投てきさせたりと、そのためにしなければならないことを身につけさせています。こうして技術習得のための繰り返しを一生懸命させます。この技術習得を通して、人の感性を磨き、気配や気づき（気づく力）を身につけさせます。今の時代は欧米的となり、積極性と自己主張をはき違えている感があります。他者との関係性で言えば、第一に受け入れる（受容性）気質を持ち、自己を知り、常に他者への配慮を忘れないことです。指導論として「褒めて育てる」よりも「褒めるより叱って育てる」を理念としています。これは我慢を身につけさせるためです。決して叱るばかりではなく、許すことを前提に愛情をもって叱り、最後は褒めるようにしています。誤解のないように、これは相手が言い訳のできる叱り方をしており、広い意味で「褒め方」の方法の一つです。結果として、友人や他者の感じる幸せを真剣に願えることができ、その成功（競技成績等）に涙を流せる人材の育成を目標にしています。

自身の指導論を総じてまとめるとコーチング学を基盤とし、反省的实践家の養成であると言えます。しかしながら、もっとも指導論として大切なのは、家庭・家族環境であると理解しています。そのために必要な

^a スポーツ科学部 競技スポーツ学科 教授・学部長
日本大学陸上競技部前監督（砲丸投げ元室内日本記録保持者）

ことは、「自己の理解があって、他者への配慮」が生まれること、「褒めるより叱って育てる」こと、そのため「しつけが重要」であり、ありがとうなどの感謝の言葉を口にできるか、箸の持ち方などの所作等が日

常的に身につけているかなどです。本来日本人は、「親孝行」、「恩返し」、「個人を尊重」という心の伝統をもっており、今の時代の人たちはこのことを認識すべきだと思います。

専門科目分野

オープンウォータースイミング選手の生理学的特性について

Physiological characteristics of open water swimmers.

原 怜来^a・馬場 康博^b・上野 広治^a・鈴木 典^a

Reira Hara^a・Yasuhiro Baba^b・Koji Ueno^a・Tsukasa Suzuki^a

Abstract

Open water swimming is the newest swimming event in the Olympic games. After becoming an Olympic event, the physiological characteristics of open water swimmers were unclear. The purpose of this study was to determine VO₂peak, vLT, and vOBLA of Japanese elite open water swimmers and to reveal the correlation of those parameters and OWS results.

As a result, it was found that VO₂peak was 4.62~4.90 L/min for males and 3.07~3.29 L/min for females. vLT was 1.21~1.26 m/s for males and 1.16~1.22 m/s for females. vOBLA was 1.33~1.35 m/s for males and 1.25~1.30 m/s for females. The VO₂peak showed a significant correlation with OWS results in 2019.

To obtain medals in international events, competitive swimmers who have a high VO₂peak are suited to participating in OWS. Coaches need to develop not only OWS athletes but also competitive 1500m swimmers.

Key words: VO₂peak, Blood lactate concentration, swimming

ピーク酸素摂取量, 血中乳酸濃度, 水泳競技

1. はじめに

オープンウォータースイミング (Open water swimming; 以下, OWSと略す) は, 海や川, 湖などの自然環境で泳ぐ速さを競う競技である¹⁾. 2008年の北京オリンピックから10kmが正式種目として採用された. 日本人選手は, 2012年ロンドン大会で初出場を果たし, 2016年リオデジャネイロ大会では, 男子選手が8位に入賞した. しかし, この時点まで日本ではOWS選手に対する科学的データを取得するといったサポートは行っておらず, 主力選手に対する個別強化が主であった.

競技スポーツにおいて選手の最大酸素摂取量や乳酸性作業閾値 (Lactate Threshold; 以下, LTと略す) といった生理学的特性を明らかにすることは, トレーニングを立案する際の一助となる. しかし, OWSは競技としての歴史が浅いことから, 国内外を通して, OWS選手の生理学的特性を明らかにした研究は比較的少ない.

2008年に小林ら²⁾ は, OWSの競技成績と血中乳酸濃度が2mmol/L, 3mmol/L, 4mmol/L時の泳速度との間に相関関係があり, 競技中の泳速度は血中乳酸濃度が2mmol/Lの時と同等の泳速度であることを明らかにした. Vanheest JL, Mahoney CE, Herr L³⁾ は2004年にアメリカ選手を対象に, Zamparoら⁴⁾ は2005年にイタリア選手を対象に, 最大酸素摂取量 (以下, VO₂maxと略す) の測定を行った. しかし, いずれも五輪種目となった2008年より前に行われた研究であり, オリンピック出場経験のあるOWS選手の生理学的特性は明らかとなっていない.

2017年に草薙⁵⁾ は, OWS選手を対象にLTを向上させるトレーニングを行った結果, 国際大会でトップと僅差でゴールすることができたと報告し, LTの泳速度 (以下, vLTと略す) がOWSの主要な代謝的条件となることを示唆した. しかし, トレーニング内容をまとめたのみであり, どの程度のvLTが必要かなど, OWS選手の生理学的特性を明らかにするまでには至っていない.

^a 日本大学スポーツ科学部
College of Sports Sciences, Nihon University

^b 新潟医療福祉大学健康科学部
Department of Health and Sports, Niigata University of Health and Welfare

OWSの10km種目は競技時間が約2時間であることから、選手には、高い持久力が求められるが、青木ら⁶⁾によれば、試合時間が十数分から数時間に及ぶ競技では、VO₂maxよりも、vLTの高さが持久的パフォーマンスに影響すると報告しており、このことはOWSにも同様にあてはまると考えられる。

競泳のトレーニング実践現場では、血中乳酸濃度が4mmol/Lの強度 (Onset of blood lactate accumulation ; 以下、OBLAと記載) が頻繁に使用されている。OBLAはLTと同様に、選手の有酸素能力を評価することができ⁷⁾、OBLAが出現する泳速度でトレーニングを行うことで、持久的能力を効果的に高められると報告されている⁸⁾。世界のOWSトップ選手は、競泳のトレーニングを行いながらOWSに出場していることから、vLTだけでなく、OBLAも評価していくことが重要であると考えられる。また、ピーク酸素摂取量 (以下、VO₂peakと略す)、vLT、OBLA時の泳速度 (以下、vOBLAと略す) と競技成績の関係を明らかにすることは、OWSトップ選手育成のためのトレーニングを立案する際の一助となり、今後の強化施策検討の際の基礎資料となりうると考える。

そこで、本研究ではOWSトップ選手のVO₂peak、vLT、vOBLAを明らかにし、各項目と競技成績との関係を調べることで、どの測定項目が競技成績に影響を与えているかについて示すことを目的とした。

2. 方法

2.1. 被験者

被験者は、2018年度ナショナルチーム男子8名、女子7名と2019年度ナショナルチーム男子10名、女子9名とした。この被験者にはOWS東京五輪代表選手を含む。被験者属性は表1に示した。

研究に先立ち、各被験者に対して研究の目的、及び内容、個人情報と調査結果の匿名化などを口頭で十分に説明し、インフォームドコンセントを行った後、被験者が自主的に参加することの同意を文書で得た。なお、男子選手1名は血中乳酸濃度の測定を拒んだため、vLTおよびvOBLAの測定は実施しなかった。

本研究は日本大学の「人を対象とする研究倫理審査委員会」(承認番号2017-005, 2017-010) の承認を得ている。

2.2. 分析項目、測定方法

測定項目は、競技成績、VO₂peak、vLT、vOBLAとした。

競技成績は第94回、及び第95回日本選手権水泳競技大会OWS競技10kmにおけるレース距離10kmをレース時間で除し平均泳速度を求めた。

VO₂maxの測定は、レベリングオフを確認する必要があるが、今回はレベリングオフを確認できなかった選手が若干名いたため、測定項目はVO₂peakとした。また、VO₂peakは筋肉量に依存することから体重で除することで、示されることが多い。一方で水泳やボート、自転車など、自身の体重を直接運ばないような種目は絶対値で示す方が良くとされている⁹⁾。このことから、絶対値 (L/min) と体重当たりのVO₂peak (ml/kg/min) を求めた。

スポーツ選手のVO₂peakの測定は、競技種目の運動形態で測定するのが望ましいとされている¹⁰⁾。そこで、本研究では流水プール (株式会社ジャパンアクアテック社製) でクロール泳動作中のVO₂peakを測定した。測定前のウォーミングアップは、先行研究³⁾ では10分間を行わせていたが、流水プールに不慣れな被験者であったことから、30分間行わせた。ウォーミ

表1 OWSナショナルチームの被験者属性

	男子		女子	
	2018年 (n = 8)	2019年 (n = 10)	2018年 (n = 7)	2019年 (n = 9)
年齢 (歳)	21.8 ± 3.0	19.4 ± 3.2	23.3 ± 5.3	21.0 ± 4.8
身長 (cm)	177.6 ± 5.5	172.0 ± 5.8	162.4 ± 4.7	162.6 ± 4.5
体重 (kg)	76.3 ± 3.0	70.7 ± 6.4	56.2 ± 2.6	57.2 ± 4.3
体脂肪率 (%)	14.1 ± 3.0	15.5 ± 4.5	18.3 ± 2.2	19.7 ± 3.0

平均値 ± 標準偏差

ングアップは測定の最初の泳速度とした。男子は1.30m/s、女子は1.25m/sの速度で15分間泳動作を行い、それ以外の15分間は自由な泳速度で実施させた。

流水プールの流速を、男子は1.30m/sから、女子は1.25m/sの流速からスタートし、1分ごとに0.05m/sずつ3分まで増速させ、それ以後は1分毎に0.02～0.03m/sずつ増速してオールアウトまで泳がせた。オールアウトの判定は、設定した泳速度を維持できなくなり、測定開始時よりも身体が1m後方に下がった時とした。被験者は呼気ガス採取用シュノーケルを装着し、ダグラスバック法を用いてVO₂peakを測定した。その際、選手の鼻から呼気がでないように、防水テープ（日本光電工業株式会社製：フォームパッド75A）で鼻を塞ぎ、口呼吸のみで行わせた。換気量は乾式ガスメーター（品川製作所社製）で測定し、呼気ガスの分析には自動呼気ガス分析装置（ミナト医科学社製：AE-310S）を用いた。採気は運動開始から30秒ごとに運動終了まで連続して行った。

vLT、vOBLaは、椿本ら¹¹⁾が行った先行研究と同様に、流水プールにおいて、3分間のクロール泳による運動と5分間の休息を挟んだ乳酸カーブテストを実施した。また、開始の流速は、VO₂peak測定時にVO₂peakが出現した速度を100%とした時の60%を1セット目とし、1セットごとに5%ずつ速度を増加させ9セット行った。

血中乳酸濃度は測定前、各セット終了直後の計10回測定した。測定に伴い、穿孔部位をアルコール綿で消毒し、十分に乾かした後に被験者自身で指先を穿孔させた。穿孔後は、少量の血液を出し、その後ガーゼで一度血液をふき取り、再度5 μ l程度の血液を出させ、携帯型簡易血中乳酸濃度測定器（アークレイ社

製：Lactate Pro2）を用いて測定した。

vLTは、先行研究^{2), 3), 12)}と同様に、泳速度と血中乳酸濃度の値を指数変換してから近似直線を用いて、2本の近似曲線の交点をLTとし、その時の泳速度とした。

vOBLaは先行研究^{3), 12)}と同様に、泳速度と血中乳酸濃度の値を指数変換してから近似直線を用いて、血中乳酸濃度が4mmol/Lに相当する泳速度とした。

2.3. 統計処理

各測定項目については、平均値と標準偏差を求めた。競技成績と各測定項目との関係は、正規性の検定を行った後に、Pearsonの積率相関分析を用いて検討した。なお有意水準の判定は5%未満とした。データはSPSS Statistics Ver.24 (IBM社製)を用いて検定を行った。

3. 結果

3.1. 競技成績、および生理学的特性

競技成績、およびVO₂peak、vLT、vOBLaの結果を表2に示す。

男子は、2018年度において、競技成績が1.42 ± 0.03m/s、VO₂peakが4.90 ± 0.51L/min、体重当たりのVO₂peakが64.37 ± 6.21ml/kg/min、vLTが1.26 ± 0.05m/s、vOBLaが1.35 ± 0.05m/sであった。2019年度においては、競技成績が1.35 ± 0.05m/s、VO₂peakが4.62 ± 0.48L/min、体重当たりのVO₂peakが66.17 ± 6.42ml/kg/min、vLTが1.21 ± 0.05m/s、vOBLaが1.33 ± 0.03m/sであった。

女子は、2018年度において、競技成績が1.28 ± 0.02m/s、VO₂peakが3.07 ± 0.42L/min、体重当たりの

表2 OWS選手のVO₂peak, vLT, vOBLa

	男子		女子	
	2018年 (n = 8)	2019年 (n = 10)	2018年 (n = 7)	2019年 (n = 9)
競技成績(m/s)	1.42 ± 0.03	1.35 ± 0.05	1.28 ± 0.02	1.29 ± 0.03
VO ₂ peak(L/min)	4.90 ± 0.51	4.62 ± 0.48	3.07 ± 0.42	3.29 ± 0.60
体重あたりのVO ₂ peak(ml/kg/min)	64.37 ± 6.21	66.17 ± 6.42	54.41 ± 5.74	57.99 ± 6.25
vLT(m/s)	1.26 ± 0.05	1.21 ± 0.05	1.16 ± 0.03	1.22 ± 0.06
vOBLa(m/s)	1.35 ± 0.05	1.33 ± 0.03	1.25 ± 0.05	1.30 ± 0.05

平均値 ± 標準偏差

VO₂peakが 54.41 ± 5.74 ml/kg/min, vLTが 1.16 ± 0.03 m/s, vOBLAが 1.25 ± 0.05 m/sであった。2019年度においては、競技成績が 1.29 ± 0.03 m/s, VO₂peakが 3.29 ± 0.60 L/min, 体重当たりのVO₂peakが 57.99 ± 6.25 ml/kg/min, vLTが 1.22 ± 0.06 m/s, vOBLAが 1.30 ± 0.05 m/sであった。

3.2. 競技成績と各測定項目の関係

競技成績と各測定項目の関係について、2018年度OWSナショナルチームの結果を図1に、2019年度OWSナショナルチームの結果を図2に示す。

2019年度の男子において、VO₂peakの絶対値と競技成績に有意な相関関係が認められた ($r = 0.739$, $p < 0.05$) (図2)。

4. 考察

本研究では、東京五輪日本代表選手も含む2018年度、2019年度OWSナショナルチームに所属していた日本トップOWS選手を対象に、VO₂peak, vLT, vOBLAといった生理学的特性を明らかにし、各測定項目と競技成績の関連を示すことを目的とした。

VO₂peakについて、本研究では長距離種目であるトライアスロンやマラソン選手との比較も行いたかったため、絶対値と体重当たりのVO₂peakを求めた。その結果、日本のOWSトップ選手は、男子で $4.62 \sim 4.90$ L/min, 女子で $3.07 \sim 3.29$ L/min程度のVO₂peakが必要であることが明らかとなった。男子の平均値を、OWS選手を対象とした先行研究^{3), 4)}と比較すると、イタリア選手は 5.2 ± 0.7 L/min, アメリカ選手は 5.51 ± 0.96 L/minであり、日本人選手の方が低い値であった。女子についても、イタリア選手は 3.6 ± 0.71 L/min, アメリカ選手は 5.06 ± 0.57 L/minであり、男子と同様に他国の選手よりVO₂peakが低いことが明らかとなった。イタリアやアメリカはOWS強豪国であり、日本人OWS選手はVO₂peakを向上させる必要が示唆された。実際に、本研究において2019年度の男子選手はOWSの競技成績が良いほど、高いVO₂peakを有しておいた。女子については、絶対値のVO₂peakと競技成績において有意な相関関係が認められなかった。これは、国内大会でも優勝を果たしたロンドン・リオデジャネイロ・東京五輪の3大会で五輪代表と

なった一名の女子選手が、高いVO₂peakを有していなかったことが影響していると考えられる。この選手は、レース経験値が他の選手よりも高く、OWSの戦略・戦術作りに優れている。レースにおけるスパートをかけるタイミング等に長けていると、VO₂peakが低くても国内大会では優勝できたが、国際大会で上位入賞を果たすためには、より高いVO₂peakを有している必要があると考える。

体重当たりのVO₂peakは、男子が $64.37 \sim 66.17$ ml/kg/minで、女子は $54.41 \sim 57.99$ ml/kg/minであった。他種目の選手と比較すると、男子において、マラソン選手は 70 ml/kg/min以上、トライアスロン選手は 84.5 ml/kg/min, 自転車選手は 74 ml/kg/minを示し^{3), 10)}, 女子はマラソン選手で 66 ml/kg/min程度、クロスカントリーの選手で 64 ml/kg/min程度を示す¹⁰⁾ことから、日本人OWS選手は他種目の長距離種目選手と比較しても低いことが明らかとなった。

vLTについて、男子は $1.21 \sim 1.26$ m/s, 女子は $1.16 \sim 1.22$ m/s程度のvLTが必要であることが明らかとなった。Vanheest JL, Mahoney CE, Herr Lら³⁾は、アメリカ選手を対象に測定を行い、男子は 1.34 ± 0.23 m/s, 女子は 1.32 ± 0.21 m/sであることを報告している。このことから、アメリカ選手よりも遅いことが明らかとなった。東京五輪では、アメリカ選手やイタリア選手が日本人選手よりも上位の成績を収めていたことから、日本人選手はvLTやVO₂maxの向上が必要であることが示唆された。

一方で、国内レベルにおいては、vLTと競技成績の関連について、男子は2018年度に、女子は2018年度、2019年度共に逆相関であった。OWSは泳ぐ速さ以外にコース取りやブイ回り等OWS特有の技術も競技成績に影響する。本研究でvLTが低いにも関わらず競技成績が良かった選手は、OWS歴が長かった。一方で、vLTが高かったにも関わらず、競技成績が悪かった選手は、競泳歴は長いものの、OWS歴は浅かった。このようにOWSは、vLTが高いだけでは競技力が優れているとは言えず、OWS指導教本¹⁴⁾においても、競泳で速い選手がOWSで必ず速いわけではないと記されている。OWS10kmレースは競技時間が約2時間であり、競泳の長距離種目の8倍程度の時間を必要とされている。これは、競泳選手にとって経験

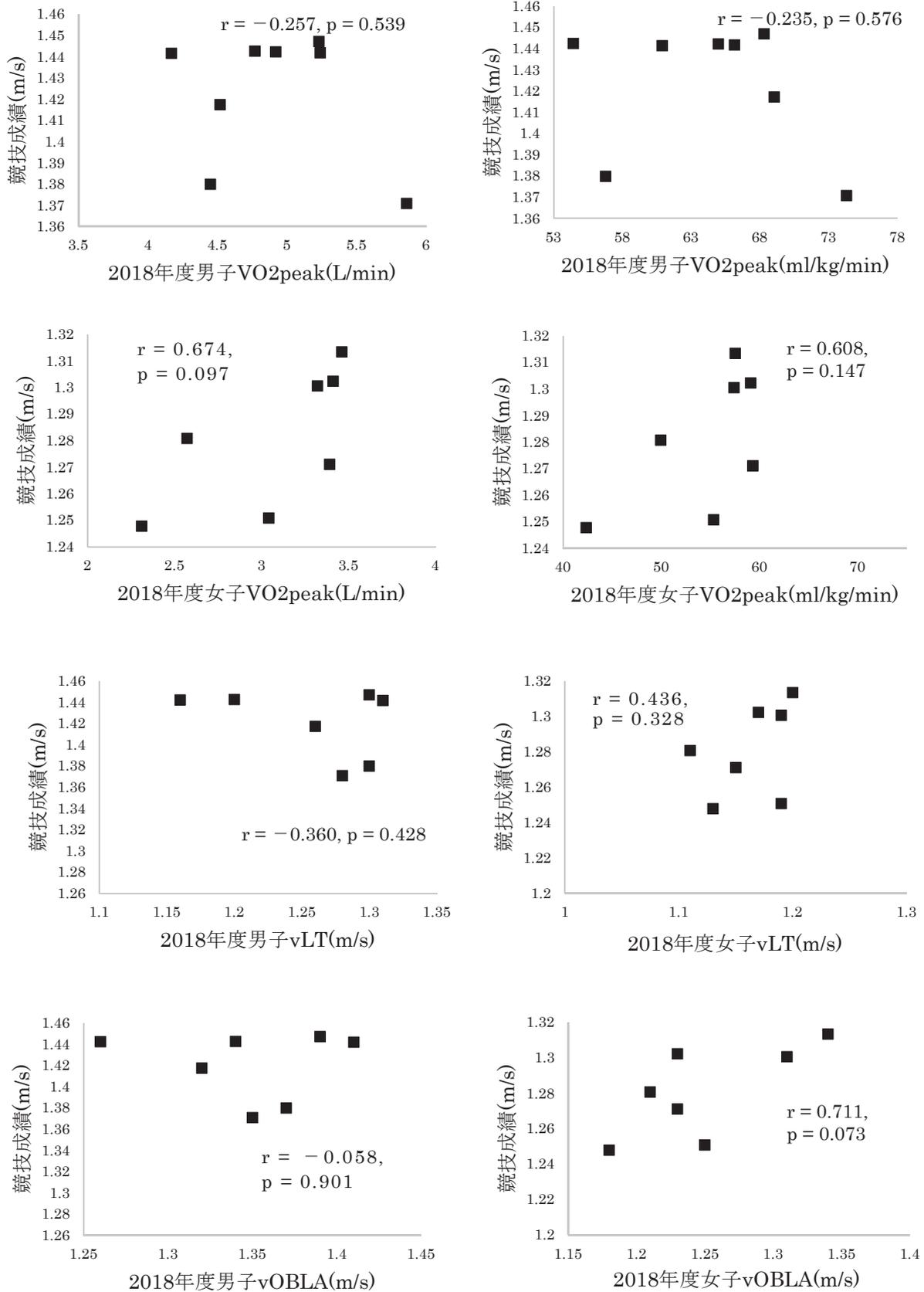
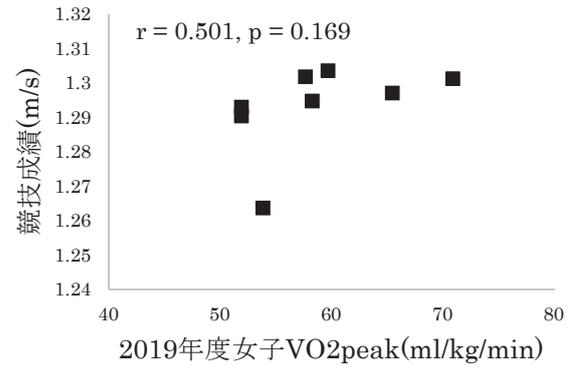
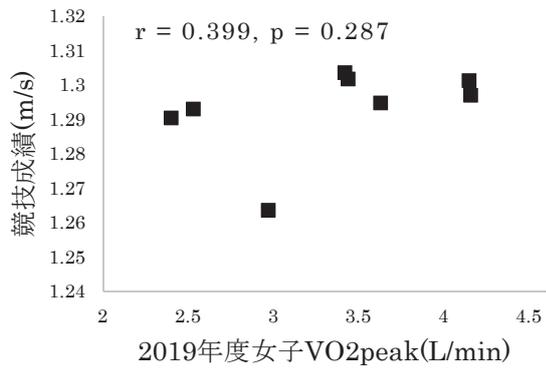
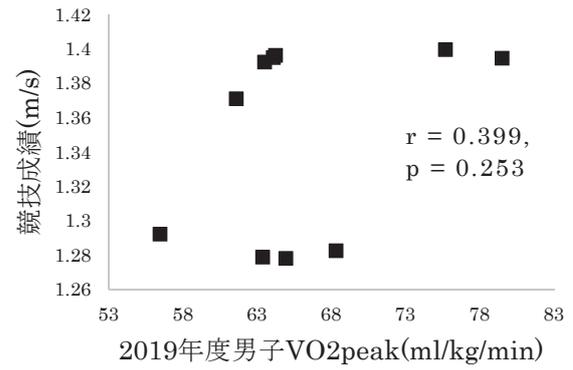
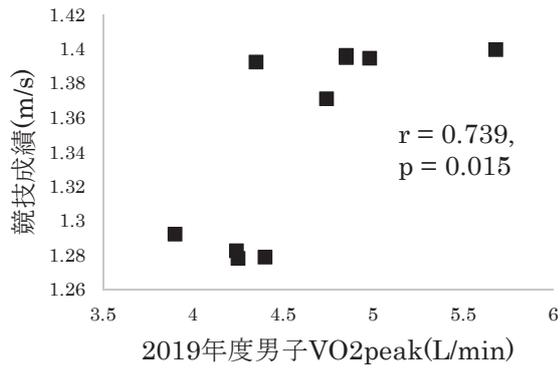


図1 2018年度競技成績とVO2peak, vLT, vOBLAの相関関係について



29

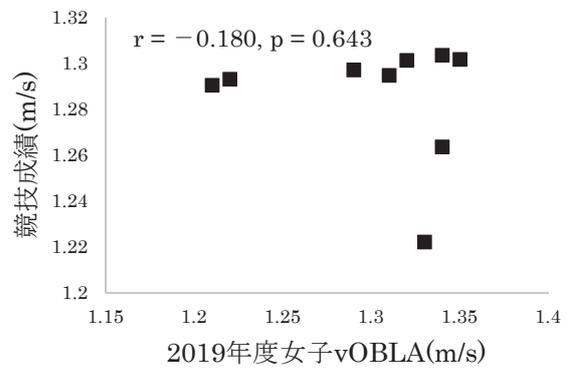
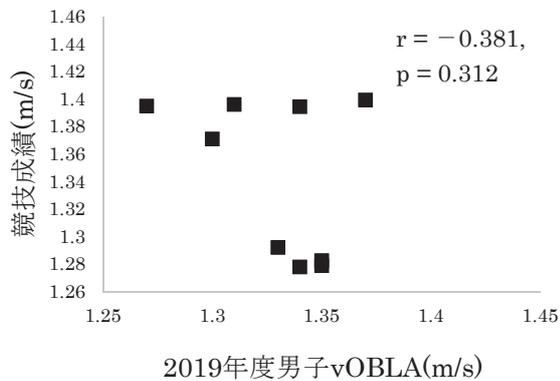
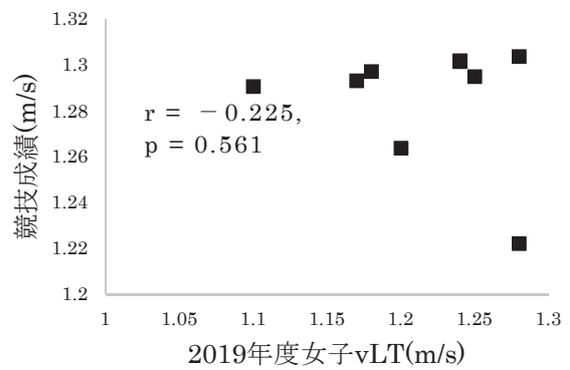
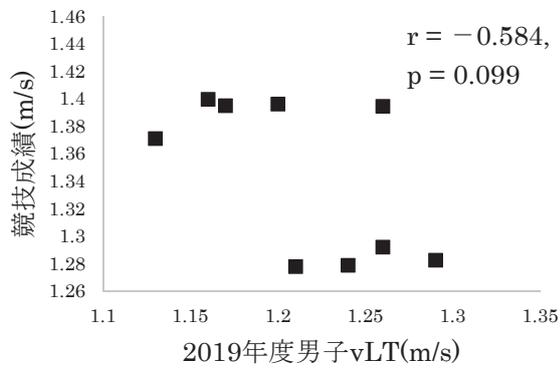


図2 2019年度競技成績とVO₂peak, vLT, vOBLAの相関関係について

したことの無い競技時間であり、レースペースをつかむのが難しい。vLTが高い選手はOWSのレース経験を積み、自身がどのレースペースまで耐えうるかを把握し、的確なコース取りができれば、OWSの競技成績も向上することが示唆された。

vOBLAについて、本研究により、国内レースにおいて上位の成績を収めるためには、男子は1.33~1.35 m/s、女子は1.25~1.30 m/s程度のvOBLAを有していることが望ましいことが明らかとなった。

vOBLAと競技成績の関連では、男女共に逆相関を示したが、これはばらつきが大きかったことが影響していると考えられる。OWSのラストスパートでは血中乳酸濃度が4 mmol/Lを超えると考えられる。また、OWSのリレー種目の導入により1,500 mという短い距離がOWS種目に組み込まれてきたことから、4 mmol/L、もしくはそれ以上の値の時にどの程度の泳速度を出せるかは重要になってくることが推察される。本研究の被験者のうち国際大会において入賞経験がある女子選手2名はvOBLAも高かったことから、国際レースにおいて上位に入るためには、高いvOBLAを有している必要が示唆される。

2008年に小林ら²⁾は、OWS競技中の泳速度は血中乳酸濃度が2 mmol/Lの時と同速度であると報告しているが、現在では2008年よりOWS競技のスピード化が進んでいることも考慮すべきである。実際に本研究で対象とした2019年度のレース泳速度は男子で1.35 m/s、女子で1.29 m/sであり、vOBLAと近似している泳速度となっていた(表2)。OWSは潮流があるため、プールでの速度との比較が妥当かの議論はあるものの、今後はvLTだけでなく、vOBLAも測定していくべきであることが示唆された。

このように、OWSは今後、高スピード化が進む可能性が高く、vLTのみにとらわれず、vOBLA等も引き続き評価し強化していく必要があることが示唆された。また、今回の結果から高いVO2peakを有する競泳選手が、積極的にOWSに出場することで競技力が向上すると考え、すでに海外では競泳とOWS両方でメダルを獲得している選手が増えており、今後はOWSと競泳を分けて強化するよりも、両立できる選手の育成が望ましいと考える。

5. まとめ

本研究は日本トップOWS選手を対象に、VO2peak、vLT、vOBLAを測定し、VO2peakは、男子が4.62~4.90 L/minで、女子は3.07~3.29 L/minであった。また、vLTは男子が1.21~1.26 m/sで、女子が1.16~1.22 m/s、vOBLAは男子が1.33~1.35 m/sで、女子は1.25~1.30 m/sであった。2019年度のナショナルチームに所属している男子選手において、VO2peakと競技成績で有意な強い相関関係が認められた。このことから、高いVO2peakを有する競泳選手が、積極的にOWSに出場することで競技力が向上することが示唆された。

利益相反

本研究に関する開示すべき利益相反状態はない。

文献

- 1) 公益財団法人日本水泳連盟編：オープンウォータースイミング教本改訂版。大修館書店：東京，2-32，2014。
- 2) 小林生海，綾部誠也，鈴木大地，他：オープンウォータ水泳の競技記録と有酸素性作業能の関連性。体力科学，2008，57：443-452。
- 3) Vanheest, JL. Mahoney, CE. Herr L.: Characteristics of Elite Open Water Swimmers. Journal of strength and conditioning research. 2004; 18(2): 302-305.
- 4) Zamparo, P. Bonifazi, M. Faina, M. et al. : Energy cost of swimming of elite long-distance swimmers. European journal of applied physiology. 2005; 94(5-6): 697-704.
- 5) 草薙健太：エリートオープンウォーター選手のコーチング事例—オープンウォータースイミングのコーチングの展望—，コーチング学研究，2017，31(1)：115-125。
- 6) 青木純一郎，佐藤 佑，村岡 功：スポーツ生理学。市村出版：東京，30-39，2001。
- 7) Maglischo, EW. : Swimming fastest. Human Kinetics. In State of Illinois: 541-592.

- 8) 八田秀雄：乳酸をどう活かすかⅡ. 杏林書院：東京, 114-129, 2016.
- 9) Holmer, I. Kundin, A. Eriksson, BO : Maximum oxygen uptake during swimming and running. *Journal of Applied Physiology*. 1974 ; 36(6): 711-714.
- 10) 山地啓司：改訂最大酸素摂取量の科学. 杏林書院, 東京, 74-101, 2001.
- 11) 椿本昇三, 小島勝徳, 下山好充, 他：競泳コーチングにおける持久期トレーニングの評価—乳酸カーブテストを用いて—. *水泳水中運動科学*, 2006, 9 (1) : 1-8.
- 12) 吉田敬義：運動の指標としてのAT, LT, OBLAの持つ意味, *体力科学*, 1993, 42 : 406-414.
- 13) Davis, CT. Thompson, MW. : Aerobic Performance of female marathon and male ultramarathon athletes. *European Journal of Applied Physiology and Occupational Physiology*. 1979; 41(4): 233-245.
- 14) 公益財団法人日本水泳連盟編：水泳競技教本 三訂版. 大修館書店：東京, 184, 20122.

サッカー指導者養成講習会受講生の意識調査に基づく現状と課題

Current situation and issues based on survey of attitude of football coach training course participants

山本 大^a・石崎 聡之^b・新井 優太^c・東海林 毅^d・北村 勝朗^e

Dai Yamamoto^a・Satoshi Ishizaki^b・Yuta Arai^c
Tsuyoshi Tokairin^d・Katuru Kitamura^e

Abstract

In the study, a survey on the content of the JFA C-level coaching course was conducted with 113 participants. The purpose was to provide basic data and to enhance the course. We found the following results. 1) The largest group of course participants are males in their 20s who had been playing soccer for more than 10 years. They had been coaching for less than 5 years or had no experience of coaching. The next largest group consisted of males in their 30s who became a coach when their child started playing soccer. Among the participants there were also those who had never played soccer. 2) The participants were mostly positive about the content of the coaching course. However, several participants found it hard to master the coaching skills. 3) The Internet will turn out to be the main source of reference materials in the future. In addition, inexperienced players and coaches may not have a community where they can discuss opinions about coaching. We would like to suggest two points for improvement of the coaching course.

Key words: コーチング, アンケート, カリキュラム改善

1. 緒言

近年オリンピック本大会や国際サッカー連盟（以下「FIFA」とする）主催のワールドカップ（以下「W杯」とする）に出場するなど、公益財団法人日本サッカー協会（以下「JFA」とする）は継続的に安定した成果を上げている。JFAの強化活動は、代表チームの強化、ユース年代の育成、指導者の養成、これらに普及活動を加えた三位一体+普及の4本柱である。強化活動の1つである指導者の養成では、指導者の年齢やレベルに応じ、10歳以下の子どもに関わるキッズリーダーから始まり、D級→C級→B級→A級と続き、最終的

にプロ選手対象の指導者を養成するS級までの本源的な流れがあり、ゴールキーパーやフットサル等の指導者を対象とする派生的な流れとともに構成されている（図1）。各級の登録者数は、2020年現在、D級が45,950名、C級が27,330名、B級が6,194名、A級が2,286名、S級が498名の合計82,258名である。公益財団法人日本スポーツ協会公認の競技別のスポーツ指導者認定数は、サッカーが1番多く、2番目のバレーボールに比べて約2万人上回っている¹⁾。このことは、日本が1998年以降W杯に連続して出場し、世界的に活躍する選手も出てきていることと深い関連性をもつと考えられ、その点について、JFAは、「指導者の努力の成

^a 日本大学スポーツ科学部

College of Sports Sciences, Nihon University

^b 芝浦工業大学工学部

College of Engineering, Shibaura Institute of Technology

^c 麗澤大学経済学部

The Faculty of Economics and Business Administration, Reitaku University

^d 城西大学経営学部

Faculty of Management, Josai University

^e 日本大学理工学部

College of Science and Technology, Nihon University

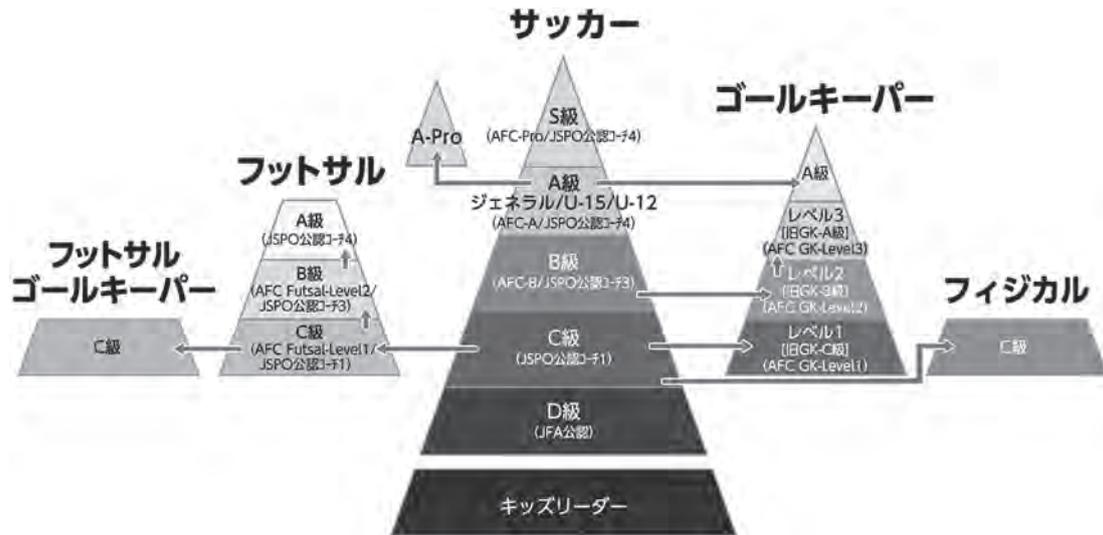


図1 指導者講習会体系図 (参照: <http://www.jfa.jp/coach/official/training.html>)

果である」点を強調している²⁾。選手個人を見ても、日本が初めてW杯に出場した1998年のフランス大会当時、海外クラブに所属する日本代表選手は1人もいなかったが³⁾、近年、ヨーロッパのリーグランキング上位15位までに所属する日本人選手は60名まで増加している⁴⁾。また指導者の国際的な活躍という点においても海外、特にアジアでは1999年にマカオサッカー協会から要請を受けたことを皮切りに、現在では19名がアジア各国に派遣されている⁵⁾。こうしたJFAの指導者養成の取り組みや日本の指導者のレベルが評価され、2018年にはアジアサッカー連盟(以下「AFC」とする)からAFC加盟協会で初めて「PRO Level Membership」を取得し、B級、A級、S級についてはAFC公認のライセンスとして認められた⁶⁾。このようにJFAによる指導者養成の取組は、選手および指導者のパフォーマンス向上という点から、ワールドカップ本大会連続出場の一因となっている。以上のことから指導者養成について考究する意義は高いと思われる。

前述の通り、指導者養成の各級のカリキュラムは、選手の対象年齢やレベルに応じた内容になっている。中でもC級は、JFA指導者ライセンス制度の「基礎I」に位置付けられ、子どもから大人までのアマチュアチーム及びアマチュアレベルの選手を対象に、指導者としての基礎を築こうとする人たちの養成することが目的の講習会である(図2)。C級の受講生は、自分の子どもがサッカーを始めたことをきっかけに、いわ

ゆる「お父さんコーチ」として指導者をはじめた人、さらには将来指導者を目指す若い人たちなど、さまざまな立場や経験の人が受講している⁷⁾。また、元プロサッカー選手や全国大会優勝者など高い競技力を持つ受講生がいる一方で、サッカーの競技経験のない受講生も存在していることが予想される。このような状況にもかかわらず、アセスメントシートなど講習会の問題点を振り返るための施策が行われていないため、受講生の現状を把握し、受講生が具体的にどのような支援を必要としているのか、講習会に何を求めているのかなどの正確な情報を得られていない。

そこで本研究では、C級コーチ養成講習会(以下「講習会」とする)に参加する受講生を対象に、アンケート調査を実施し、受講生の属性および選手歴と指導歴の3つの指標に従って講習会を検証し、講習会の基礎資料およびカリキュラムの充実への一助として改善項目を導き出すことを目的とした。

2. 方法

2.1. 対象

本研究の調査は、20XX年5月・7月・8月・9月・11月と翌年1月にX県で実施された講習会に参加し、研究参加の同意を得た受講生113名を対象とした。調査にあたり、講習会参加者に対して、文章および口頭で本研究の趣旨や内容、プライバシーの保護などについて説明し、調査参加の同意を得たうえで実施した。

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目
午前	ガイダンス <50分>	分析② <50分>	戦術② <50分>	プランニング <50分>	グループワーク <50分>		メディカル <50分>	
	実技 (Game) <90分>	実技 (テクニック②) <90分>	実技 (戦術③) <90分>	実技 (プランニング) <90分>	指導実践 (1組) <60分>	指導実践 (2組) <120分>	指導実践 (1組) <60分>	指導実践 (2組) <120分>
	振り返り <15分>	振り返り <15分>	振り返り <15分>	振り返り <15分>	振り返り <15分>	振り返り <15分>	振り返り <15分>	振り返り <15分>
午後	分析① <50分>	戦術① <50分>	GK <50分>	実践ガイダンス <20分>	指導実践 (3組) <180分>	発育発達と 一貫指導 <50分>	指導実践 (3組) <180分>	筆記試験 <60分>
	実技 (テクニック①) <90分>	実技 (戦術①) <90分>	実技 (GK) <90分>	グループワーク <30分>		サッカーの 競技精神 <50分>		閉講ガイダンス <30分>
	振り返り <15分>	振り返り <15分>	振り返り <15分>	コーチング <50分>		チーム マネジメント <50分>		
			実技 (コーチング) <90分>	振り返り <15分>	振り返り <15分>	グループワーク <50分>	振り返り <15分>	

図2 C級カリキュラム (参照: http://www.jfa.jp/coach/official/license.html#c_license)

2.2. 調査方法

受講生には、講習会開始日(受講前)と終了日(受講後)にGoogleフォームで作成した調査票のQRコードを受講生に配布し、受講生はその場で各自のスマートフォンからアンケートに回答する(別紙1・2)。なお回答率は、受講前が79.2%(113名)で、受講後の回収率は受講の前後で異なるメールアドレスの使用やアドレスの誤入力、または回答忘れや送信ボタンの押し忘れなどから70.1%となった。そのため、属性は受講前の回答結果を、講習会の満足度などは講習後の回答結果を使用した。各項目の差の検定には、Kruskal-Wallis検定を採用し、有意水準を5%に設定した。統計処理には、R(バージョン4.1.2)のkruskal.test関数を用いた。なお、本研究は日本大学スポーツ科学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。

3. 結果と考察

3.1. 属性

本調査に協力した受講生の属性を表1にまとめた。まず、受講生の約9割が男性であった。年齢は20歳~24歳を含む20代が全体の43%で最も多く、次いで30代が32%、40代が18%であった。受講資格となる満

18歳以上の10代は5%で、最も少ない50歳以上(2%)について少なかった。職業は、会社員が最も多く全体の約50%を占め、次いで学生が19%、公務員が15%、自営業が12%、パート・アルバイト、無職・その他と続き、受講生の約8割が社会人だった。選手歴は10年以上が58名と最多層で、続く6年~10年の42名と合わせると約9割の受講生に選手経験がある一方、未経験者も3名いた。指導歴は、指導経験が1年~5年の受講生が46名と最多層で、次いで1年未満が25名、さらに未経験者23名であった。また、受講生うち約7割の77名が指導チーム有りと回答した。

次に選手歴と指導歴のクロス集計でまとめた(表2)。最も多かったのは選手歴10年以上の指導歴1年~5年の受講生(26名)で、次いで選手歴6年~10年の指導歴1年~5年の受講生(14名)、3番目に選手歴10年以上で指導経験1年未満の受講生(13名)であった。選手歴6年以上で指導歴5年以下の受講生が全体の約7割を占めた。

さらに、指導チームがある受講生の指導している選手の年代を表3に示した。選手の年代区分は、未就学児、小学生を低学年(1・2年生)、中学年(3・4年生)、高学年(5・6年生)の発達の段階で分け⁸⁾、さ

表1 受講生の属性 (n = 113)

属性		回答者数	割合
性別	男性	102	90%
	女性	11	10%
年齢	10代	6	5%
	20～24歳	27	24%
	25～29歳	22	19%
	30～34歳	15	13%
	35～39歳	21	19%
	40～44歳	10	9%
	45～49歳	10	9%
	50～54歳	2	2%
職業	会社員	57	50%
	学生	22	19%
	公務員	17	15%
	自営業	13	12%
	パート・アルバイト	2	2%
	無職	1	1%
	その他	1	1%
選手歴	未経験	3	3%
	1年未満	1	1%
	1年～5年	9	8%
	6年～10年	42	37%
	10年以上	58	51%
指導歴	未経験	23	20%
	1年未満	25	22%
	1年～5年	46	41%
	6年～10年	10	9%
	10年以上	9	8%
指導チームの有無	はい	77	68%
	いいえ	36	32%

表2 受講生の選手歴と指導歴の関係

選手歴	指導歴					合計	割合
	未経験	1年未満	1年～5年	6年～10年	10年以上		
未経験	1	0	1	1	0	3	3%
1年未満	0	0	1	0	0	1	1%
1年～5年	4	1	4	0	0	9	8%
6年～10年	12	11	14	5	0	42	37%
10年以上	6	13	26	4	9	58	51%
合計	23	25	46	10	9	113	
割合	20%	22%	41%	9%	8%		

らに中学生，高校生，大学生および社会人を加えた7つの年代とした。受講生の約9割が小学生を中心に複数の年代を掛け持ちしており，もっとも多い年代

は，未就学児・小学校低学年・小学校中学年を受け持つ受講生の30名で，全体の約27%を占めた。

最後に本講習会の参加動機について，表4にある

表3 指導するチームを持つ受講者の指導選手の年代 (n = 113)

	選手年代								人数	割合	
	未就学児	小学生			中学生	高校生	大学生	社会人			その他
		低学年	中学年	高学年							
未就学児含む	○	○	○							30	27%
	○	○	○	○						1	1%
	○	○	○	○	○					9	8%
	○	○	○	○				○		7	6%
	○	○				○		○		1	1%
小学生低学年以上		○								1	1%
		○	○							7	6%
		○	○	○						2	2%
		○	○		○			○		12	11%
		○	○	○	○					1	1%
		○	○	○	○			○		4	4%
小学生中学年以上			○							1	1%
			○	○						7	6%
			○		○					8	7%
			○		○	○				1	1%
小学生高学年以上				○						1	1%
				○				○		5	4%
中学生以上					○					1	1%
高校生以上						○				6	5%
						○	○			4	4%
						○	○	○		1	1%
社会人								○		1	1%
その他									○	2	2%

表4 年代別の参加動機

	①自分の指導知識の向上のため	②指導現場でライセンスが必要なたため	③興味・関心があった	④自分の子どもを教えるため	⑤チームまたはクラブからの命令	⑥知り合いからの誘い	⑦その他
10代	4	3	4	0	1	0	0
20~24歳	24	10	17	2	2	2	2
25~29歳	18	6	11	3	1	0	1
30~34歳	15	5	9	2	0	0	0
35~39歳	19	7	11	8	1	1	2
40~44歳	8	3	4	3	1	0	1
45~49歳	9	0	3	2	0	0	1
50~54歳	1	0	2	0	0	0	1
合計	98	34	61	20	6	3	8

7項目を年代別に調査した。最も回答数が多かったのは [①自分の指導知識の向上のため] で、次いで [③興味・関心があった] となった。この2項目は、どの年代からも回答があった。3番目に回答数が多かったのは20代が中心の [②指導現場でライセンスが必要な

ため] だった。また、4番目に回答数が多かった [④自分の子どもを教えるため] は、35歳から39歳の回答数が他の年代の2倍以上であった。

以上の結果より、C級の主な受講生は、選手として一定の経験があり、指導者を目指すあるいは指導を始

めたばかりの若い人、つまりJFAのいう‘将来指導者を目指す若い人’たちであることがうかがえる。また、年代別の参加動機(表4)で「④自分の子どもを教えるため」と回答した35歳～39歳の年齢層が、他の年齢層に比べ2倍となっており、さらに表3の指導する選手の年代で明らかになったように指導チームのある受講生の約90%が小学生を受け持っていることから、35歳～39歳の受講生の多くは、自身の子どもの小学生になり少年団に入団したことをきっかけに指導者をはじめたと思われる。この点に関しては、JFAが例としてあげているいわゆる‘お父さんコーチ’がコーチングを身近な問題としてとらえ直し、子どもの指導に対する具体的かつ有効な指導方法の習得を志向していることが伺える。

3.2. 講習会に対する受講生の満足度評価について

講習会に対する受講生の満足度評価に関して、[1]コース全体の学習効果、[2]コースの内容、[3]講義の内容、[4]実技の内容の4部門について選手歴と指導歴から調査した。結果は、選手歴・指導歴問わず、4部門とも「強くそう思う」と「そう思う」を合わせた回答が約85%以上と、おおむね受講生の期待に応えた内容であった。しかし、各回答において少数だがいくつか不満のある項目も見られた。そこで、それぞれの部門のいずれかの項目で、「そう思わない」と「全くそう思わない」と回答したものを集計し割合を算出した(表5)。表では全体で回答数が3人未満はグレーアウトとしている。その結果、選手歴が長いと各部門のいずれかの項目に不満があることを示した。特に、1.コース全体の学習効果と4.実技内容については指導歴の長さに関係なく不満があり、とりわけ4.実技内容では指導歴6年～10年で約40%、指導歴10年以上で約30%と指導歴が長い層に不満がある結果となった。

表6は、選手歴を指標に、4部門の中で特に不満の大きかったものの中から抜粋した結果の一覧である。[1]コースの内容の「③コースの学習量は適切か」では選手未経験者以外に不満があり、[2]実技内容の「④実技の時間はちょうど良い長さか」でも選手未経験者以外に不満がみられ、特に6～10年の選手歴のある受講生には「全くそう思わない」との回答もあっ

た。[3]実技の内容の「①実技内容は効果的だった」では、選手歴10年以上で不満が見られ、[4]コース全体の学習効果の「④終了時における指導スキルレベル」でも、すべての選手歴に不満がみられた。最後に[5]コースの内容「④コース受講生全員が十分に参加できる構成か」では、6年以上の選手歴のある受講生に不満が見られた。しかしながら、選手歴によって不満を感じる傾向に有意差があるのかを調べるために、Kruskal-Wallis検定を行ったところ、いずれの項目でも統計的に有意な差はみられなかった。

3.3 年代別・指導歴別の半数以上の人々が難しいと感じた指導内容

講義で学習した指導実践中のコーチング手法や指導のチェックポイントとなる12項目について、年代別と指導歴別に難しいと感じた項目を調査した(表7)。その結果、年代や指導歴に関わらず「フリーズ」と「コート広さの設定」が難しいと半数以上の受講生が回答した(表7)。続いて、年代や指導歴による差異が統計的に有意な差があるかを調べるために、Kruskal-Wallis検定を行ったところ、指導歴におけるオンザボールの技術的な指導のみ、 $\chi^2 = 8.347$, p 値 = 0.015と有意水準5%で有意差が認められた。さらに群間の差異を明らかにするために、Steel-Dwass検定(R:N3M3ライブラリpSDCFI関数)を行った。その結果、未経験1年未満と1年～10年未満の間に有意水準5%(P 値 = 0.0054)で有意な差が見られた(表8)。

以上の結果から、講習会に関して受講生はおおむね満足していることが明らかになったが、それと同時に課題も浮き上がった。特に、選手歴を指標とした調査では実技に関する不満が散見された。そこで、実技に関する回答結果を詳細に調べたところ、大きく分けて「指導実践」と「コーチング」の2つに関する要望が多いことが明らかになった(表6)。まず指導実践に関する要望だが、表6[2]実技の内容「④実技の時間はちょうど良い長さか」の結果と自由回答欄の「指導実践の練習を増やしてほしい。」「指導実践の機会がもっとあると嬉しいと思う。」というコメントより、指導実践の時間が足りないと感じている受講生が少なからず存在していることがわかる。さらに、表6の[5]コースの内容「④コース受講生全員が十分に参加

表5 いずれかの項目で「そう思わない」、「全くそう思わない」と回答した集計

1. コース全体学習効果のいずれかの項目でそう思わない、全くそう思わないと答えた割合							
	人数	指導歴					
		未経験	1年未満	1年～5年	6年～10年	10年以上	
選手歴	未経験	1	100.0%	0.0%	0.0%	-	-
	1年未満	0	-	-	-	-	-
	1年～5年	1	0.0%	-	0.0%	100.0%	-
	6年～10年	2	0.0%	16.7%	10.0%	0.0%	0.0%
	10年以上	9	25.0%	14.3%	20.0%	20.0%	14.3%

2. コース内容のいずれかの項目でそう思わない、全くそう思わないと答えた割合							
	人数	指導歴					
		未経験	1年未満	1年～5年	6年～10年	10年以上	
選手歴	未経験	0	0.0%	0.0%	0.0%	-	-
	1年未満	0	-	-	-	-	-
	1年～5年	1	25.0%	-	0.0%	0.0%	-
	6年～10年	3	14.3%	0.0%	10.0%	33.3%	0.0%
	10年以上	4	12.5%	14.3%	5.0%	0.0%	14.3%

3. 講義内容のいずれかの項目でそう思わない、全くそう思わないと答えた割合							
	人数	指導歴					
		未経験	1年未満	1年～5年	6年～10年	10年以上	
選手歴	未経験	1	100.0%	0.0%	0.0%	-	-
	1年未満	0	-	-	-	-	-
	1年～5年	1	0.0%	-	0.0%	100.0%	-
	6年～10年	5	28.6%	0.0%	20.0%	33.3%	0.0%
	10年以上	5	12.5%	0.0%	15.0%	0.0%	14.3%

4. 実技内容のいずれかの項目でそう思わない、全くそう思わないと答えた割合							
	人数	指導歴					
		未経験	1年未満	1年～5年	6年～10年	10年以上	
選手歴	未経験	0	0.0%	0.0%	0.0%	-	-
	1年未満	0	-	-	-	-	-
	1年～5年	2	25.0%	-	100.0%	0.0%	-
	6年～10年	3	0.0%	0.0%	20.0%	33.3%	0.0%
	10年以上	9	12.5%	14.3%	15.0%	40.0%	28.6%

できる構成か」の結果、および受講生の「指導実践のグループで話す時間を長くにとってほしかった。」というコメントから、指導実践に関する受講生同士の話し合いの時間が少ないことは不満の1つであると思われる。講習会ではグループで話し合うためのグループワークの時間を3回設けているが、多くのグループが講義以外の時間で自主的に話し合いをしている。この自主的な話し合いは受講生の積極的な行動と捉えることもでき、この講習会の効果の1つとも言えよう。

しかし、この実技の不満は課題設定（難易度）の適切性に問題がある可能性も考えられるが、本研究では時間不足と課題設定（難易度）の適切性のどちらが問題となっているかは明らかにすることはできなかった。

次にコーチングに関する要望だが、講習会ではコーチングに関して講義1コマ（50分）と実技1コマ（90分）が設定されている（図2：4日目）。講義ではコーチング方法として、(1) コーチングの目的、(2) 働きかけの考え方、(3) コーチングの手法、(4) コーチン

表6 選手歴からみた不満のあるアンケート調査結果(抜粋)

[1] コースの内容					
③コースの学習量は適切か (χ^2 値=1.608, p 値=0.658)					
選手歴	人数	強くそう思う	そう思う	そう思わない	全くそう思わない
未経験	4	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%
1年~5年	7	42.9%	42.9%	14.3%	0.0%
6年~10年	32	43.8%	50.0%	6.3%	0.0%
10年以上	58	39.7%	58.6%	1.7%	0.0%

[2] 実技の内容					
④実技の時間はちょうど良い長さか (χ^2 値=1.630, p 値=0.653)					
選手歴	人数	強くそう思う	そう思う	そう思わない	全くそう思わない
未経験	4	25.0%	75.0%	0.0%	0.0%
1年~5年	7	28.6%	42.9%	28.6%	0.0%
6年~10年	32	43.8%	46.9%	6.3%	3.1%
10年以上	58	37.9%	46.6%	13.8%	0.0%

[3] 実技の内容					
①実技内容は効果的だった [†] (χ^2 値=6.446, p 値=0.092)					
選手歴	人数	強くそう思う	そう思う	そう思わない	全くそう思わない
未経験	4	25.0%	75.0%	0.0%	0.0%
1年~5年	7	14.3%	85.7%	0.0%	0.0%
6年~10年	32	62.5%	37.5%	0.0%	0.0%
10年以上	58	51.7%	44.8%	3.4%	0.0%

[4] コース全体の学習効果					
④終了時における指導スキルレベル (χ^2 値=0.83, p 値=0.842)					
選手歴	人数	非常に満足	満足	やや不満	不満
未経験	4	25.0%	50.0%	25.0%	0.0%
1年~5年	7	28.6%	57.1%	14.3%	0.0%
6年~10年	32	40.6%	53.1%	6.3%	0.0%
10年以上	58	44.8%	44.8%	10.3%	0.0%

[5] コースの内容					
コース受講生全員が十分に参加できる構成か (χ^2 値=0.560, p 値=0.906)					
選手歴	人数	強くそう思う	そう思う	そう思わない	全くそう思わない
未経験	4	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%
1年~5年	7	71.4%	28.6%	0.0%	0.0%
6年~10年	32	53.1%	40.6%	3.1%	0.0%
10年以上	58	51.7%	43.1%	5.2%	0.0%

†<0.1

グの留意点の4項目について学習する。なかでも(3)コーチングの手法では、シンクロコーチング・ゲームフリーズ・ミーティングの3つの手法を紹介し、実技では、この3つのコーチング手法を受講生は選手役として体験してもらう。その後受講生は、指導実践を通して学習・体験したコーチング手法を実際に利用しながら模擬指導を行う。その結果、表7のとおり、どの年代も指導歴の長さに関係なく、コーチングに関して

は「フリーズ」と「コート広さの設定」が難しいと回答している。フリーズは選手のプレーに何らかの問題があると感じたタイミングで、指導者が選手のプレーをいったん止め、状況を正確に再現し、発問やデモンストレーションを使いながら解決策を導く「見る・聞く・行う」に同時にアプローチするコーチング手法である。しかし、フリーズは受講生にとって多岐にわたって行うことが多く、使い慣れていないコーチ

表7 年代別(上)・指導歴別(下)に半数以上の人が難しいと感じた指導内容

年齢	29歳以下	30代	40歳以上		
回答者数	49	32	20	χ^2 値	p値
ミーティング	8.2%	6.3%	5.0%	0.251	0.882
フリーズ	71.4%	71.9%	80.0%	0.573	0.751
シンクロ	16.3%	25.0%	30.0%	1.825	0.402
ポジティブな声かけ	14.3%	18.8%	25.0%	1.130	0.569
オンザボールの技術的な指導	22.4%	25.0%	20.0%	0.179	0.915
オンザボールの戦術的な指導	20.4%	18.8%	20.0%	0.034	0.983
オフザボールの戦術行動の指導	34.7%	43.8%	60.0%	3.710	0.157
技術の構成要素	38.8%	25.0%	45.0%	2.528	0.283
Quick・Simple・TothePointな声かけ	57.1%	50.0%	30.0%	4.149	0.126
コートの方々の設定	69.4%	62.5%	60.0%	0.713	0.700
ルールの方々の設定	32.7%	31.3%	15.0%	2.287	0.319
プレイヤーの方々の設定	20.4%	15.6%	15.0%	0.434	0.805

指導歴	未経験 1年未満	1年～10年未満	10年以上		
回答者数	41	51	9	χ^2 値	p値
ミーティング	12.2%	2.0%	11.1%	3.919	0.141
フリーズ	80.5%	70.6%	55.6%	2.693	0.260
シンクロ	22.0%	21.6%	22.2%	0.003	0.998
ポジティブな声かけ	22.0%	13.7%	22.2%	1.169	0.557
オンザボールの技術的な指導*	36.6%	9.8%	33.3%	9.798	0.007
オンザボールの戦術的な指導	24.4%	15.7%	22.2%	1.110	0.574
オフザボールの戦術行動の指導	43.9%	39.2%	55.6%	0.876	0.645
技術の構成要素	39.0%	31.4%	44.4%	0.905	0.636
Quick・Simple・TothePointな声かけ	43.9%	54.9%	44.4%	1.189	0.552
コートの方々の設定	58.5%	68.6%	77.8%	1.679	0.432
ルールの方々の設定	31.7%	29.4%	11.1%	1.539	0.463
プレイヤーの方々の設定	17.1%	19.6%	11.1%	0.400	0.819

*<0.05

表8 オンザボールの技術的な指導の指導歴群間の比較

未経験1年未満を1, 1年～10年未満を2, 10年以上を3とした場合

比較対象	1-2*	1-3	2-3
p値	0.0054	0.9415	0.1153

*<0.05

ング手法のため難易度が高い, そのため難しいと感じた受講生が多かったと思われるが, 本調査ではフリーズに関する具体的な設問がなかったため, 難しいと感じる詳細な理由は不明であった。

フリーズ同様に, どの年代でも, また指導歴の長さに関係なく難しいと回答のあった [コートの方々の設定] は, 選手の能力を見極め, 獲得させたいプレーが出現するように設定する必要がある。例えば, 選手の

技術レベルが高くない場合, 広めのコートでプレーさせ, 守備がボールを奪いに来るまでの時間的・空間的余裕を考慮しなければならない。その見極めが難しい点だと思われるが, フリーズ同様, 詳細に関しては不明であった。

また, 難しいと感じた指導内容と, 年代や指導歴の間に統計的な差異は認められなかった。この理由として, 例えば指導歴が10年以上と答えている受講生であっても, コーチングを含め本格的な指導方法に初めて触れたのが講習会であったと予想される。そのため難しいと感じた指導内容は年代や指導歴に依存していないのであろう。ただし, オンザボールの技術的な指導のみ, 未経験者を含む1年未満の指導歴群と1年から10年未満の群とでは有意差が見られた。このことは

未経験者を含む1年未満の指導歴群は、ボールを止める・蹴る・運ぶ・奪うといったオンザボールの技術的な指導は実践したことがないあるいはその機会が少ないことが影響していると思われるが、本調査では詳細について明らかにすることはできなかった。以上のようにより不満のある受講生にとって、本講習会が初めて体験した本格的な指導だったことを踏まえると、表6の[4]コース全体の学習効果の「④終了時における指導スキルレベル」において選手歴に関係なく一定の不満が見られたことや、「コーチングのカリキュラムがもう少しあると良いと思います」、「コーチングをより深く」、「更に分析、コーチングの部分があるとよりわかると思います」とコーチングに関する要望が上がっていることに繋がっていると考えられる。これらの不満を解消するために、既存の講義の中でインストラクターによる具体的なコーチングの実例を示すことが必要であろう。

3.4. 指導時の参考資料の収集方法

指導方法や練習メニューなど指導時の参考資料の収集方法を、表9の6項目を選手歴および指導歴別に調査した。選手歴が未経験～5年以下の受講生以外は、自身のスポーツ経験や他の指導者を参考としている割合が多い。またインターネットの利用は指導歴が1年～5年以外の全ての受講生が3番目に多く利用しており、インターネットの割合が専門書やDVDなどの資料よりも使用率が高かった。さらに選手歴が未経験～5年以下の受講生は「④指導者同士の自主的な勉強会

等」や「⑤専門のビデオやDVD」が少なく、「③専門書や指導参考書等」を用いる傾向がみられた。

以上の結果よりまず「インターネットによる情報収集」は、選手歴・指導歴問わず一定数いることが明らかになった。さらに選手歴が未経験～5年以下の受講生は「専門書や指導参考書等」を用いる傾向がみられた。インターネットによる情報収集だが、2015年の総務省情報通信白書⁹⁾によると、「仕事や研究、勉強について調べたいことがある場合」の「インターネットの検索サイト(GoogleやYahoo!等)で検索する」との回答率が他の手段を抑え、70%超の圧倒的多数を占めた。インターネットを利用した情報発信および収集は、ますます盛んになることが予想される。今回のアンケート調査でも、受講生にスマートフォンの利用を依頼したが、全員が問題なく回答を進めていたことを加味すると、講習会参加時に必要な受講者カードや受講後の課題レポートなど現在の紙業務で行っていることをデジタル化することも検討の余地があると思われる。

次に、選手歴が未経験～5年以下の受講生が、「専門書や指導参考書等」を用いる傾向がみられたことだが、彼らは選手経験がないことで「③他の指導者の実践内容」や「④指導者同士の自主的な勉強会等」のコミュニティがない、あるいは入りにくいことが原因の1つであると思われる。インターネットを利用して未経験者あるいは経験の浅い指導者向けのコミュニティサイトを作ることも主催のJFAや主管する各都道府県協会の役割であろう。

表9 選手歴・指導歴からみた指導時の参考資料

■選手歴からみた指導時の参考資料							
選手歴	回答者数	①スポーツ経験	②専門書	③他の指導者	④勉強会等	⑤専門DVD	⑥インターネット
未経験～5年以下	13	46%	85%	62%	8%	8%	54%
6年～10年	42	71%	43%	71%	21%	14%	45%
10年以上	58	83%	50%	78%	31%	21%	57%

■指導歴からみた指導時の参考資料							
選手歴	回答者数	①スポーツ経験	②専門書	③他の指導者	④勉強会等	⑤専門DVD	⑥インターネット
未経験	23	57%	48%	57%	13%	17%	52%
1年未満	25	76%	40%	96%	20%	24%	48%
1年～5年	46	80%	54%	70%	33%	11%	50%
6年～10年	10	70%	50%	70%	30%	10%	60%
10年以上	9	89%	78%	78%	22%	33%	67%

4. まとめ

本研究では、JFA公認のC級指導者講習会の基礎資料および講習会の充実につなげることを目的に、アンケート調査を実施し、受講生の属性および選手歴と指導歴の3つの指標から検証した。その結果、講習会の改善策として下記2点を提案したい。

1. コーチングの改善行動に結びつく具体的なコーチング事例の提示
2. 選手歴のない受講生のコミュニティの必要性和ITのさらなる活用

しかしながら、本調査はデータ数が少なく一般化するためには調査を継続しデータの蓄積することに加え、他都道府県での調査を行うことも必要であろう。また本調査で明らかになった新たな課題を検証すると共に、D級やB級など違うレベルの講習会および聴講生へのインタビューなど多角的に調査をおこなう必要がある。今後はこれらの課題を踏まえながら、講習会の質的向上になるよう詳細な研究を進めたい。

文献

- 1) 公益財団法人日本スポーツ協会：公認スポーツ指導者認定者数競技資格別一覧。 https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/katsudousuishin/doc/20211001_tourokusha_events.pdf, 2021, 2022.3.31.
- 2) 公益財団法人日本サッカー協会：サッカー指導教本。 11, 2020
- 3) 公益財団法人日本サッカー協会：海外クラブ所属選手の移り変わり。 JFAnews, 12, 2020
- 4) WebSportiva：欧州サッカー日本人選手60名のリスト。誰がどの国でプレーしているのか整理してみた。 <https://sportiva.shueisha.co.jp/clm/football/wfootball/2022/02/21/60/index.php>, 集英社, 2022, 2022.3.31.
- 5) 公益財団法人日本サッカー協会：JFA公認指導者の海外派遣。 https://www.jfa.jp/social_action_programme/international_exchange/dispatch_member/, 2022.3.31.
- 6) 公益財団法人日本サッカー協会：日本サッカー協会が「AFC Coaching Convention PRO Level Membership」を取得。 <http://www.jfa.jp/news/00020156/>, 2022.3.31.
- 7) 公益財団法人日本サッカー協会：C級コーチ養成講習会。 http://www.jfa.jp/coach/official/license.html#c_license, 2022.3.2.
- 8) 文部科学省：第1回小学校部会における主な意見。 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/074/siryu/attach/1366908.html, 2022.3.2.
- 9) 総務省：平成27年版情報通信白書特集テーマ「ICTの過去・現在・未来」, <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/html/nc122310.html>, 2022.3.23.

受講前アンケート

このアンケートは、埼玉県C級指導者養成の現状について調査するために実施するものです。調査データはスタッフのもとで厳密に保管され、統計的に処理されます。個人のプライバシーの保護については十分配慮し、あなたにご迷惑をおかけすることはありません。なおご協力いただきました調査データは、指導者養成事業がより発展できるよう参考資料とし、その成果については学会等で公表することがありますが、個人名などが出ることはありません。上記の趣旨を理解いただき、ご回答ください。
 なお、調査への協力は任意であり、協力しなかったこととあなたが不利益を被ることはありません。
 アンケート調査への距離および帰出によって、本研究への協力について同意したこととみなさせていただきます。

*必須

1. コース*

1つだけマークしてください。

- コース1 (5/8-5/30)
- コース2 (7/4-7/25)
- コース3 (7/31-9/22)
- コース4 (9/4-9/26)
- コース5 (10/2-11/27)
- コース6 (1/8-2/5)

(1) あなたの属性に関する質問

2. ①年齢を教えてください。*

1行につき1つだけマークしてください。

	10代	20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳	40~44歳	45~49歳	50~54歳	55+
年齢	<input type="radio"/>								

5. ④1から10までの言葉があなた自身にどのくらい当てはまるかについて、下の4枠内の「全く違うと思う」から「強くそう思う」まで最も適切なものにチェックを入れてください。文章全体を総合的に見て、自分にどれだけ当てはまるかを評価してください。

1行につき1つだけマークしてください。

	全く違うと思う	おおそ うと思 う	少し違 うと思 う	どちら でもな い	少しそ う思 う	まあま あそう 思う	強くそ う思 う
活発で、外向的だと思う	<input type="radio"/>						
他人に不審を持ち、もめごとを起こしやすと思う	<input type="radio"/>						
しっかりしていて、自分に自信があると思う	<input type="radio"/>						
心配性で、うろたえやすと思う	<input type="radio"/>						
新しいことが好きで、奮った考えをもつと思う	<input type="radio"/>						
ひかえめで、おとなしいと思う	<input type="radio"/>						
人に物をつかう、やさしい人間だと思う	<input type="radio"/>						
だらしなく、うろ	<input type="radio"/>						

3. ②性別を教えてください。*

1行につき1つだけマークしてください。

	男性	女性
性別	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

4. ③ご職業を教えてください。*

1行につき1つだけマークしてください。

	学生	会社員	公務員	自営業	パート・アルバイト	無職	その他
職業	<input type="radio"/>						

かりしていると思う

	<input type="radio"/>						
--	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

発達力に欠けた、平凡な人間だと思う

	<input type="radio"/>						
--	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

(2) 選手歴および指導歴に関する質問

6. ①サッカーの経験年数を教えてください。*

1行につき1つだけマークしてください。

	未経験	1年未満	1年~5年	6年~10年	10年以上
サッカー選手歴	<input type="radio"/>				

7. ②サッカーの選手としてのプレー実績を教えてください。*

1行につき1つだけマークしてください。

	プレー経験なし	市区町村大会レベル	都道府県大会レベル	関東・関西など地域大会レベル	全国大会レベル	世界大会レベル
サッカー選手としての実績	<input type="radio"/>					

8. ③サッカー以外のスポーツ経験年数を教えてください。*

1行につき1つだけマークしてください。

	未経験	1年未満	1年~5年	6年~10年	10年以上
スポーツ経験年数	<input type="radio"/>				

サッカー指導者養成講習会受講生の意識調査に基づく現状と課題

9. ④⑤のスポーツ種目を教えてください。

当てはまるものをすべて選択してください。

- 水泳
- 体操
- 野球・ソフトボール
- 武道（柔道・剣道・空手など）
- 個人ラケット競技（テニス・バドミントン・卓球）
- バスケットボール
- バレーボール
- スノースポーツ（スキー・スケートなど）
- その他: _____

10. ⑥現在、指導しているチーム・クラブがありますか？*

1つだけマークしてください。

- はい
- いいえ

11. ⑦サッカーの指導年数を教えてください。*

1行につき1つだけマークしてください。

- | | 未経験 | 1年未満 | 1年～5年 | 6年～10年 | 10年以上 |
|---------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| サッカー指導歴 | <input type="radio"/> |

12. ⑧サッカーの指導をしている選手の年齢を教えてください。

当てはまるものをすべて選択してください。

- | | 幼児・
園児 | 小学校
低学年 | 小学校
中学年 | 小学校
高学年 | 中学生 | 高校生 | 大学生 | 社会人 |
|-----------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 選手の
年齢 | <input type="checkbox"/> |

16. ⑩サッカーの1回あたりの練習時間を教えてください。練習時間は休憩や飲水時間を含めます。

1つだけマークしてください。

- 60分以下
- 60～90分
- 90～120分
- 120～150分
- 150～180分
- 180分以上

17. ⑪練習時間の中で飲水など休憩の合計時間を教えてください。単位は分（例）10分

18. ⑫サッカーの指導実績を教えてください。*

1つだけマークしてください。

- 未経験
- 市区町村大会参加レベル
- 都道府県大会参加レベル
- 関東・関西など地区大会レベル
- 全国大会レベル
- 世界大会レベル

13. ⑬サッカーの指導をしている選手の性別を教えてください。

1つだけマークしてください。

- 男性
- 女性
- 男女混合（主に男子）
- 男女混合（主に女子）

14. ⑭試合も含むサッカーの平日の指導回数を教えてください。

1つだけマークしてください。

- 平日の指導はない
- 1回
- 2回
- 3回
- 4回
- 5回

15. ⑮試合も含むサッカーの休日の指導回数を教えてください。

1つだけマークしてください。

- 休日の指導はない
- 主に土曜日1回
- 主に日曜日1回
- 土日ともに

19. ⑯サッカーの指導をする際に参考にしている資料を教えてください。*

当てはまるものをすべて選択してください。

- 自分のスポーツ経験
- 専門書や指導参考書等
- 他の指導者の実践内容
- 指導者同士の自主的な勉強会等
- 専門のビデオやDVD
- インターネットによる情報収集
- その他: _____

20. ⑰サッカー以外のスポーツ指導年数を教えてください。*

1行につき1つだけマークしてください。

- | | 未経験 | 1年未満 | 1年～5年 | 6年～10年 | 10年以上 |
|---------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| スポーツ指導歴 | <input type="radio"/> |

21. ⑱⑲で「経験あり」と回答した方のみ、スポーツ種目を教えてください。

当てはまるものをすべて選択してください。

- 水泳
- 体操
- 野球・ソフトボール
- 武道（柔道・剣道・空手など）
- 個人ラケット競技（テニス・バドミントン・卓球）
- バスケットボール
- バレーボール
- スノースポーツ（スキー・スケートなど）
- その他: _____

22. ①あなたが指導する際に、もっとも重要だと思うことはどれでしょうか。次*の6項目のうち重要と思う順番に1位～6位と番号をつけてください。

1行につき1つだけマークしてください。

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
正々堂々とプレイすること (フェアプレイ)	<input type="radio"/>					
技術の向上を目指すこと (スキル)	<input type="radio"/>					
戦術の向上を目指すこと (戦術)	<input type="radio"/>					
自チームを分析すること (分析)	<input type="radio"/>					
相手チームを分析すること (分析)	<input type="radio"/>					
勝つこと (勝利)	<input type="radio"/>					

(3) 講習会に関する質問

23. ①この講習会に参加した理由は何ですか。当てはまるものをすべて回答してください。

当てはまるものをすべて選択してください。

- 自分の指導知識の向上のため
- 指導現場でライセンスが必要のため
- 興味・関心があった
- 自分の子どもを教えるため
- チームまたはクラブからの命令
- 知り合いからの誘い
- その他: _____

25. ②サッカーの知識について、あなた自身にどのくらい当てはまるか、下の枠*内の「全く知らない」から「よく知っている」まで最も適切なものにチェックを入れてください。

1行につき1つだけマークしてください。

	全く知らない	少し知っている	知っている	良く知っている
サッカーの歴史	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
シュートを含むキックの方法 (技術)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
ボールコントロールの方法 (技術)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
フェイントを含むドリブルの方法 (技術)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
ボールの蹴り方 (技術)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
攻撃の戦術	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
守備の戦術	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
戦術的分析方法	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
コーチング方法	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
トレーニングの計画方法	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
ゴールキーパーのトレーニング	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
応急処置などの医学的知識	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
その他	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

24. ②①で「その他」と答えた内容を具体的に教えてください。

26. ④この講習会内容の興味・関心について、あなた自身にどのくらい当てはまるか、下の枠*内の「特に興味がない」から「とても興味がある」まで最も適切なものにチェックを入れてください。

1行につき1つだけマークしてください。

	興味がない	少し興味がある	興味がある	とても興味がある
サッカーの歴史	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
シュートを含むキックの方法 (技術)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
ボールコントロールの方法 (技術)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
フェイントを含むドリブルの方法 (技術)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
ボールの蹴り方 (技術)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
攻撃の戦術	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
守備の戦術	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
戦術的分析方法	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
コーチング方法	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
トレーニングの計画方法	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
ゴールキーパーのトレーニング	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
応急処置などの医学的知識	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
その他	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

27. ②④で「その他」と答えた内容を具体的に教えてください。

28. ⑥C級ライセンス取得後、指導予定はありますか？

1つだけマークしてください。

- すでに指導している
- 指導を希望し、チームが決まっている
- 指導を希望しているが、チームを探している
- 指導の予定はない

29. ⑦C級ライセンスの有効期間1年間です。取得後も来年度以降も更新を続けま
すか？

1つだけマークしてください。

- 更新する予定
- 更新をしない予定
- その他: _____

30. ⑧更新をしない理由を教えてください。

31. ⑨B級やA級など上位ライセンスの取得を予定していますか？

1つだけマークしてください。

- 予定なし
- B級
- A級
- S級
- A-U12級
- A-U15級
- 海外ライセンス
- その他: _____

このコンテンツは Google が作成または承認したものではありません

Google フォーム

受講後アンケート

このアンケートは、埼玉県C級指導者養成の現状について調査するために実施するものです。調査データはスタッフの手中で厳重に保管され、統計的に処理されます。個人のプライバシーの保護については十分配慮し、あなたにご迷惑をおかけすることはありません。なおご協力いただきました調査データは、指導者養成事業がより発展できるよう参考資料とし、その成果については学会等で公表することがありますが、個人名などが出ることはありません。上記の趣旨を理解いただき、寧ろにありのままのお考えをご回答ください。

なお、調査への協力は任意であり、協力しなかったことであなたが不利益を被ることはありません。

アンケート調査への回答および提出によって、本研究への協力について同意したこととみなさせていただきます。

*必須

1. コース*

1つだけマークしてください。

- コース1 (5/8~5/20)
- コース2 (7/4~7/25)
- コース3 (7/31~8/22)
- コース4 (9/4~9/26)
- コース5 (10/2~11/27)
- コース6 (1/8~2/5)

(1) あなたの属性に関する質問

2. ①年齢を教えてください。*

1行につき1つだけマークしてください。

年齢	10代	20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳	40~44歳	45~49歳	50~64歳	55+
	<input type="radio"/>								

7. ②あなたが指導する際に、もっとも重要だと思うことはどれでしょうか。次の6項目のうち重要と思う順番に1位~6位と番号をつけてください。*

1行につき1つだけマークしてください。

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
正々堂々とプレイすること (フェアプレイ)	<input type="radio"/>					
技術の向上を目指すこと (スキル)	<input type="radio"/>					
戦術の向上を目指すこと (戦術)	<input type="radio"/>					
自チームを分析すること (分析)	<input type="radio"/>					
相手チームを分析すること (分析)	<input type="radio"/>					
勝つこと (勝利)	<input type="radio"/>					

(3) 講習会に関する質問

3. ②性別を教えてください。*

1行につき1つだけマークしてください。

	男性	女性
性別	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

4. ③ご職業を教えてください。*

1行につき1つだけマークしてください。

職業	学生	会社員	公務員	自営業	パート・アルバイト	無職	その他
	<input type="radio"/>						

(2) 選手歴および指導歴に関する質問

5. ①サッカーの選手歴を教えてください。*

1行につき1つだけマークしてください。

サッカー選手歴	未経験	1年未満	1年~5年	6年~10年	10年以上
	<input type="radio"/>				

6. ②サッカーの指導歴を教えてください。*

1行につき1つだけマークしてください。

サッカー指導歴	未経験	1年未満	1年~5年	6年~10年	10年以上
	<input type="radio"/>				

8. ①コース全体の学習効果について教えてください。*

1行につき1つだけマークしてください。

	不満足	やや不満足	満足	非常に満足
コースの修了に必要な知識のレベル	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
コースの修了に必要な指導スキルのレベル	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
コース終了時における知識のレベル	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
コース終了時における指導スキルレベル	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
知識に対するコースの効果	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
指導スキルに対するコースの効果	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

9. ②コースの内容について教えてください。

1行につき1つだけマークしてください。

	まったくそう思わない	そう思わない	そう思う	強くそう思う
学習目標が明確に設定されていた	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
コースの内容はよく整理、計画されていた	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
コースの学習量は適切だった	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
コースは受講生全員が十分に参加できる構成になっていた	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

サッカー指導者養成講習会受講生の意識調査に基づく現状と課題

10. ③講義（座学）の内容について教えてください。

1行につき1つだけマークしてください。

	まったくそ う思わ ない	そ う思 わ な い	そ う 思 う	強 く そ う 思 う
講義内容は効果的 だった	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
プレゼンテーシ ョン資料はよく整理 されていてわかり やすかった	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
講義内容は受講生 の興味・関心をか き立てた	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
講義時間はちよ うど良い長さだった	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
講師は質問に丁寧 に対応してくれた	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

11. ④実技（グラウンド）の内容について教えてください。

1行につき1つだけマークしてください。

	まったくそ う思 わ ない	そ う 思 わ な い	そ う 思 う	強 く そ う 思 う
実技内容は効果的 だった	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
実技メニューはよ く整理されていて わかりやすかった	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
実技の内容は受講 生の興味・関心を かき立てた	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
実技の時間はちよ うど良い長さだっ た	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
講師は質問に丁寧 に対応してくれた	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

13. ⑥指導実習で難しいと感じた指導法はどれですか？当てはまるものを全てお
答えください。

当てはまるものをすべて選択してください。

- ミーティング
- フリース
- シンクロ
- ポジティブな声かけ
- オンザボールの技術的な指導
- オンザボールの精神的な指導
- オフザボールの動作行動の指導
- 技術の構成要素
- Quick・Simple・TothePointな声かけ
- コートの広さの設定
- ルールの設定
- プレーヤーの人数の設定
- その他: _____

14. ⑦このコースで、どのような内容があれば良いと思いますか？

15. ⑧C級ライセンスの有効期間1年間です。取得後も来年度以降も更新を続けま
すか？

1つだけマークしてください。

- 更新する予定
- 更新をしない予定
- その他: _____

16. ⑨更新をしない理由を教えてください。

12. ⑩この講習会内容の興味・関心について、あなた自身にどのくらい当てはま
るか。下の枠内の「興味がわかなかった」から「とても興味深かった」まで
最も適切なものにチェックを入れてください。

1行につき1つだけマークしてください。

	興味がわかな かった	少し興味がわ いた	興味深か った	とても興味深 かった
サッカーの歴史	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
シュートを含む キックの方法 (技術)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
ボールコントロール の方法 (技術)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
フェイントを含む ドリブルの方 法 (技術)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
ボールの蹴り方 (技術)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
攻撃の戦術	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
守備の戦術	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
戦術分析方法	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
コーチング方法	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
トレーニングの 計画方法	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
ゴールキーパー のトレーニング	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
応急処置などの 医学的知識	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
その他	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

17. ⑪B級やA級など上位ライセンスの取得を予定していますか？

1つだけマークしてください。

- 予定なし
- B級
- A級
- S級
- A-U12級
- A-U15級
- 海外ライセンス
- その他: _____

このコンテンツは Google が作成または承認したものではありません。

Google フォーム

総合科目分野

博多祇園山笠に関する著作について(前編)

Publications related to Hakata Gion Yamakasa (Vol.1)

清水 享^aToru Shimizu^a

Abstract

Hakata Gion Yamakasa is a festival held every July in the Hakata Ward of Fukuoka City in Fukuoka Prefecture, with a tradition of more than 770 years. People make offerings to Kushida Shrine and other places in the festival. This paper is a collection of works published after World War II on Hakata Gion Yamakasa, with some discussion. The publications include commemorative magazines, commentary books, novels, collections of photographs, paintings, and cartoons. The paper describes them and shows some tendencies in the works on Hakata Gion Yamakasa.

Key words: 博多祇園山笠, 福岡, 著作, 流, 博多祇園山笠振興会

1. はじめに

福岡県福岡市博多区において、博多祇園山笠が夏季に盛大に執り行われる。この博多祇園祇園山笠は2022年現在、およそ770年以上の歴史を有するとされる。世界中に蔓延した新型コロナウイルス流行の影響を受け、2020年度は全面的に中止となり、2021年度は「飾り山」ⁱが設置されたものの、「昇き山」ⁱⁱなどの行事は中止となった。そして2022年度は3年ぶりに再開された。

本稿はこの長い歴史を有する博多祇園山笠について、戦後どのような著作があったのかを検討し、それらがどのように発信されたのかを概観する。博多祇園山笠がどのような方向性で記録され、語られ、紹介され、考察されたのか、検討するものである。すなわち博多祇園山笠についてスポーツ、文化、宗教、歴史、社会、文学、芸術などの各方面から、どのように綴られ、まとめられたのかを整理分析を行なうものであ

る。著作そのものが博多祇園山笠を中心のテーマとしているものと、博多についての著作の中の一部として博多祇園山笠を取り上げているものの両者があるが、本稿では可能なかぎり、その両者について取り上げる。誌幅の関係で学術論文や雑誌記事などを基本的に言及せず、著作のみに限定する。

2. 博多祇園山笠

博多祇園山笠は7月1日から15日にかけて執り行われる祭事である。本祭事は博多の総鎮守である櫛田神社の素戔鳴尊^{スサノノミコト}への奉納神事である。7月1日に「注連(しめ)下ろし」ⁱⁱⁱ、「御神入れ」が行われ、また「飾り山」^{iv}が設置される。7月9日に全ての「流(ながれ)」^vが箱崎浜へ「お汐井」と呼ばれる清めの「真砂(まさご)」を取りに行き、7月10日から「昇き山」が実際に動き出す。7月10日は「流昇き」、11日には「朝山」、「他流昇き」、12日には「追い山ならし」、13日には「集団山見せ」、14日に再び「流昇き」が行わ

『スポーツ科学研究』執筆要領の規定により、前後編に分割して掲載する。

^a 日本大学スポーツ科学部

College of Sports Sciences, Nihon University

i 山笠のことを「山」とも呼ぶ。「飾り山」は高さが10mにも及び、その山に飾られている博多人形などの装飾を鑑賞する。上川端通の飾り山以外、その場に設置するのみで昇く、すなわち担ぐことはない。

ii 「昇き山」は櫛田神社や博多区内を実際に昇いて回る。

iii 「注連(しめ)下ろし」は流を清め、その結界を示す。

iv 2022年度は博多区以外の新天町商店街やPaypayドームなども含め、13基が設置された。

v 「流」は山笠を行なう町内の連合体の単位であり、現在、「土居流」、「恵比須流」、「大黒流」、「東流」、「中洲流」、「西流」の「七流」が昇き山行事を行なっている。

れ、15日早朝にクライマックスである「追い山」を迎えるのである。

昇き山は重さ1トンあり、これを26人あるいは28人の昇き手で昇く^{vi}。そして「追い山ならし」や「追い山」などでは櫛田神社内の「清道」に入る「櫛田入り」を行なう。この「櫛田入り」の距離は112mしかないが、ここは交代せずに30秒あまりで走り抜ける。その後博多区内のおよそ5kmのコースを30分あまりの時間で昇いて回る。距離が長いので、多くの人々が交代をして、動きを止めず「山」を進める。「山」には車輪などなく「台脚」には「銅がね」と呼ばれる鉄の台座があるのみであり、水で濡れた路面を引きずり進むのである。明治以降、「櫛田入り」と「追い山」はコースタイムを計測する。ただ奉納神事のため、基本的には順位はつけない。

ちなみに博多祇園山笠は2016年に他の32件の「山・鉦・屋台行事」とともにユネスコ無形文化遺産に登録された。博多祇園山笠はその名称に祇園とあるように、京都の祇園祭の山鉦と同一の意義があるものとされる^{vii}。祇園祭は京都祇園祭をはじめ各地で行われており、疫病の流行が牛頭天王の祟りであるとして、これを祀る祭礼である。「山笠」自体は北部九州に分布し、廃れたものを含めて百数十にのぼり、その形態、使用人形、人形師から整理すると博多系、津屋崎系、直方系、浜崎系、日田系の5系統に分類できるとされる^{viii}。

3. 博多祇園山笠小史

櫛田神社が鎮座されたのが757年であり、941年(天慶四年)に小野好古が京都より祇園神^{ix}を勧進しており³⁾、これを博多祇園山笠の起源とする説もある。ただ起源として広く支持されているのは1241年(仁治二年)説である。これはこの年の夏に博多で疫病が流行したため、承天寺開祖である聖一国師弁円^xが疫病退散の祈禱を行ない、施餓鬼棚から祈禱水を撒き、疫病を鎮めたことが始まりとされる⁴⁾。この他に1432年(永享四年)説もあり、これは1609年(慶長十二年)に

成立した『九州軍記』にこの年の櫛田神社の祭礼に関しての具体的な記述があることから起源とするものである⁵⁾。

豊臣秀吉が九州平定後の1587年(天正十五年)に博多に滞陣して博多町割りを命じ、これにより自治組織の「流」が生まれ、博多祇園山笠もこの「流」を基礎に運営されるようになった⁶⁾。

江戸時代になり、1687年(貞享四年)に町同士の些細な争いから、前を行く山笠を追う「追い山」が始まったとされる。順番に「櫛田入り」をして順路に沿って走らなくなったのは1974年(寛保三年)のことだった⁷⁾。

明治時代に入ると福岡県によって1875年(明治五年)に山笠禁止令が出され、年中行事の「松囃子」も同じく禁止された。また1875年(明治八年)には「ゆかた山笠」という山笠が建ち⁸⁾、その後も許可を得ずに山笠を昇いた流れもあった⁹⁾。1883年(明治十六年)に山笠はようやく復活した¹⁰⁾。禁止令以前の山笠は「五十二、三尺」すなわち約16mの高さがあったが、電信線架設のため、この高さの山笠は不可能となった¹¹⁾。1989年(明治三十一年)に福岡県知事による山笠中止論が出され論争となり、その結果「昇き山」と「飾り山」の分離した様式で存続となった¹²⁾。

第二次世界大戦中も博多祇園山笠は存続したが、戦争末期の1945年(昭和二十年)6月に「福岡大空襲」があり、この年の山笠は中止せざるを得なかった¹³⁾。戦後となり1946年(昭和二十一年)に「第一次博多復興祭」で絵を載せた「中子供山笠」が復活し、翌年も「子供山笠」が作られ、1948年(昭和二十三年)に博多祇園山笠は復活し、「櫛田入り」を行なった¹⁴⁾。

1949年(昭和24年)に「博多祇園山笠振興期成会」が発足し、この会は1955年(昭和三十年)に、博多祇園山笠の恒久的な存続を目指す「博多祇園山笠振興会」へと発展した¹⁵⁾。1965年(昭和四十年)から1974年(昭和四十九年)にかけて町界町名整理が博多地区で実施され、「町」を単位とする「流」も再編成を余儀なくされ、解散をした「流」もあった¹⁶⁾。

vi 昇き手以外に「あと押し」が「山」を動かす推進力となる。

vii 祇園神は牛頭天王、素戔鳴尊などによる神仏習合の神として信仰された。

viii 円爾という名もある。

4. 博多祇園山笠に関する著作

博多祇園山笠に関する著作や雑誌記事は非常に多く、それを全て網羅することは難しい。ここでは現状で可能な限り、20世紀半ば、すなわち戦後以降に発表刊行されたもので収集することができた著作について言及する。

4.1. 1950年代の著作と落石栄吉

1950年代に刊行された博多祇園山笠に関する著作として落石栄吉著『博多祇園山笠今昔物語』(1952.6, 博多祇園山笠振興期成会)^{ix}がある。博多祇園山笠に関する起源、祭事の担い手と進め方、山笠の構造、山笠の昇き方など多方面にわたり詳述しつつ、また博多祇園山笠に関する歴史もまとめている。1680年(延宝八年)から1868年(慶応四年)までの山笠の飾りつけの表題を記録した『山笠歳代記』^xなど江戸時代やそれ以前の史料も紹介し、博多祇園山笠の年代記をまとめている。その他に博多の年中行事である松囃子やどんたくについても付記している。落石栄吉はさらに1961年(昭和三十六年)に『博多祇園山笠史談』(1961.6, 博多祇園山笠振興会)も著し、前著より詳細に博多祇園山笠の全貌と1961年(昭和三十六年)当時までの歴史をまとめている。さらに1967年に刊行した『戦後博多復興史』(1976.11, 戦後博多復興史刊行会)には「博多祇園山笠(続, 博多祇園山笠史談)」という章を設けて1961年(昭和三十六年)以降の状況をまとめている。

落石栄吉は他に『博多山笠はかくして復興せり』(1955.1, 博多祇園山笠振興期成会)という18ページの小冊子も編集、刊行している。本書は博多祇園山笠振興期成会結成5周年及び「博多山笠」が福岡県の「重要文化財」に指定されたことを記念して刊行された¹⁷⁾。1944年から1954年までの「博多祇園山笠振興史」の年表と1948年(昭和三十二年)から1954年(昭和三十九年)までの「振興普及の事蹟年表」をまとめたもの

だった。

落石栄吉は博多祇園山笠振興会の前身である博多祇園山笠振興期成会の会長であり、博多祇園山笠振興会発足当時の会長も務めた人物である。いわば戦後における博多祇園山笠振興の立役者である。この落石栄吉が博多祇園山笠について残した資料が現在福岡市総合図書館に所蔵されている。そしてそれらは新聞記事から各種書付け、書状、メモまで多岐にわたり、戦後の博多祇園山笠史を研究する上で第一級の史料であるといえよう。

1950年代には他に三宅酒壺洞が編纂した『博多山笠年表』(1954, 刊行元不明)がある。1243年(寛元元年)の承天寺の記録から1954年(昭和三十九年)に博多祇園山笠が重要文化財に選定されたことまでが年表の形式で折本の小冊子としてまとめられている。

また1955年(昭和三十年)には田中善徳の詩集である『夏すがた博多山笠』(1955.9, 夕刊フクニチ新聞社)が刊行された。「後記」に夕刊フクニチの企画で連載した詩をまとめたものであると述べられている。本書は数名が跋文を書いており、その中には落石栄吉のものもある。また1953年(昭和三十八年)以前に『山笠早わかり』、『山笠しおり』^{xi}といった冊子も刊行されたようである¹⁸⁾。

4.2. 博多祇園山笠振興会による記念誌

1975年(昭和五十年)に博多祇園山笠振興会は『博多山笠記録』(1975.3, 博多祇園山笠振興会)を編纂した。博多祇園山笠に関する文献、絵画、器物、古写真および現況などの多くの写真を掲載し、これらは全体の半分を占める。後半は文化財保護委員会(現文化庁)の依頼を受けてまとめた「博多津中年令階梯制」および「博多年代記」が掲載されている。「博多津中年令階梯制」では、博多祇園山笠を運営する組織の中核をなす年齢階梯制の歴史的経緯と現況についてまとめられている。「博多年代記」は、797年(延暦十六年)に成立した『続日本紀』に「博多大津」の記載があっ

ix 本稿で言及する著作は紙幅の制限により、書誌情報は本文に示し、引用参考文献には示さない。以下全ての著作の書誌情報は同じように示す。

x 江戸時代後期に書かれた『山笠歳代記』および『山笠歳代記事項抜萃：祇園祭礼』は成立年不詳であるが、その手抄本は福岡市総合図書館に所蔵されている。

xi 『山笠早わかり』、『山笠しおり』については福岡市総合図書館、福岡県立図書館、九州大学附属図書館にも所蔵されておらず、未見。

た759年(天平宝字三年)の事項から1964年(昭和三十九年)までの事項をまとめた年代記である。特に江戸時代の事項などは多くの文献の記載を引用し、これをまとめている。

博多祇園山笠振興会が発足し、1985年(昭和六十年)で30周年を迎えたことにより、博多祇園山笠振興会は『博多山笠:博多祇園山笠振興会30周年記念誌』(1986.1, 博多祇園山笠振興会)を編纂し、刊行した。本書では戦後の博多祇園山笠の復興と博多祇園山笠振興期成会の発足、そしてこの期成会から博多祇園山笠振興会へと発展した1955年(昭和三十年)とその後の1984年(昭和五十九年)までの30年間の年代記がまとめられている。1980年(昭和五十五年)には、ハワイ遠征をし、「ハワイのアロハ・ウィーク・フェスティバル」へ参加した時の状況が述べられている。またこの記念誌には「資料編」もあり、1955年(昭和三十年)から1984年(昭和五十九年)における「追い山 追い山ならし全記録」と題して「櫛田入り」および「全コース」のタイムの記録と「山笠標題」ⁱⁱと題して「昇き山笠」、「飾り山笠」の表題がまとめられている。博多祇園山笠の海外遠征はその後も行なわれ、1988年(昭和六十三年)5月にはオーストラリアのブリスベン、ニュージーランドのオークランドでも昇き山が現地で昇かれた。この遠征に関して博多祇園山笠振興会は、保坂晃孝編著による『ブリスベン・オークランド博多祇園山笠親善使節団記念:昭和63年5月』(1989.1, 博多祇園山笠振興会)といった記念小冊子を刊行した。

博多祇園山笠振興会は発足40周年を迎えた1995年(平成七年)に、戦後50年であったことも記念し、博多祇園山笠振興会編による『戦後五十年博多祇園山笠史:博多祇園山笠振興会創立四十周年記念』(1995.6, 博多祇園山笠振興会)を刊行した。本書は『博多山笠:多祇園山笠振興会30周年記念誌』の年代記に、さらにその後の10年間の年代記を追加したものだ。また1958年(昭和三十三年)から発行された「博多祇園山笠しおり」という広報紙を付録で掲載していることは注目される。

博多祇園山笠振興会は発足50周年に際しても、博

多祇園山笠振興会五十年史編纂委員会編集『博多祇園山笠五十年史』(2004.6, 博多祇園山笠振興会)を刊行した。こちらもそれまでの記念誌同様、その後10年間の年代記を追加したものだ。

2014年(平成二十六年)には博多祇園山笠振興会六十年史編纂委員会編『博多祇園山笠六十年史』(2004.6, 博多祇園山笠振興会)が刊行された。こちらもそれまでの記念誌同様、その後10年間の年代記が追記された。また「博多町屋」ふるさと館学芸員である山田弘明による「特集 明治の新聞記事に見る博多祇園山笠」という章が設けられ、明治時代の博多祇園山笠の様子を新聞記事から詳述している。

博多祇園山笠振興会は発足後、30周年、40周年、50周年、60周年と10年ごとに記念の年代記を刊行しており、これらは基本的にはそれまでに刊行した年代記を踏襲し、それぞれ新たな年代を加えた内容であった。

4.3. 各流による記念誌

1990年(平成二年)に松井喜久雄著『東流のあゆみ:戦後の世相』(1990.11, まつい工務店)が刊行された。著者は東流の「総務」まで務めた人物である。彼は後述する『博多のうた』(1980.9初版, 1991再版, 1998.10再々版, 松井喜久雄), 『雑学富貞月亭』(1993.9, 松井喜久雄), 『川柳博多歳時記』(1994.9, 松井喜久雄), 『博多方言』(1997.4, 松井喜久雄), 『はかた博学帖』(2002.10, 松井喜久雄)などの編著がある。本書は博多祇園山笠の実働する町内の単位である流のうちの一つである「東流」の歴史を振り返る内容であった。

以降、特に50周年などを記念した各流の年代記などが刊行されるようになった。1999年(平成十一年)に中洲流50周年実行委員会編『中洲流:五十年の軌跡』(1999.6, 中洲流)と博多祇園山笠千代流運営委員会編『博多祇園山笠千代流五十周年記念誌』(1999.7, 千代流)が刊行された。いずれも写真を多く掲載した50周年の年代記であった。

その後、2015年(平成二十七年)以降、各流などで、改めて年代記が刊行された。2015年(平成二十七年)には八番山笠上川端通五十周年記念誌編纂委員会編

xii 博多祇園山笠には人形飾りが載せられ、この飾りにはそれぞれテーマとなる標題が毎年つけられる。

『五十年を走り抜けた 八番山笠上川端通50周年記念誌』(2015.6, 上川端通)^{xiii}、翌2016年(平成二十八年)には博多祇園山笠西流五十周年史編纂員会編『博多祇園山笠西流五十周年史:1966-2015』(2016.7, 西流)が刊行された。いずれもこの50年の歴史を振り返る内容であった。その翌年2017年(平成二十九年)には東流50周年記念誌実行委員会編『東流のあゆみ 博多祇園山笠東流50周年記念誌』(2017.1, 東流)と土居流記録簿編集委員会編『土居流記録簿』(2017.2, 土居流)が刊行された。いずれも50年の歴史や記録が整理され掲載されたものであった。後者については名称に「記録簿」とあるように1950年代から1960年代に筆記された原資料の「記録」の一部を掲載しており、注目に値する。

2018年(平成三十年)には古ノ一50周年記念誌発行委員会編『古ノ一五十年:大黒流古ノ一五十年周年記念誌』(2018, 大黒流古ノ一)が刊行された。先述したいくつかの記念誌は流の歴史的経緯を綴ったものだが、本書は大黒流の「古ノ一」、すなわち「古門戸町一区」の町内の50周年記念誌であり、非常に珍しい。1966年(昭和四十一年)に実施された「町界町名整理事業」によって生まれたこの町内の歴史をまとめている。またこの町内に属した旧町内の解説と町内の当番町の記録なども収められている。

2015年(平成二十七年)から2018年(平成三十年)の間に刊行された上記の記念誌はいずれも1966年(昭和四十一年)に行なわれた「町界町名整理事業」の影響を受け、流の再編等を余儀なくされ、その後の50年の歴史を振り返ったものだった。

参考文献

- 1) 落石栄吉, 博多祇園山笠史談, 初版, 博多祇園山笠振興会, 福岡, 1961.6, 41.
- 2) 福岡裕爾, 山笠の分布とハカタ文化圏, HUKUOKA STYLE, 1994, Vol.9 ([総力特集] 博多祇園山笠: 祇園祭の系譜), 94-107.
- 3) 西日本新聞社・福岡市博物館 [編], 博多祇園山笠大全, 初版, 西日本新聞社, 福岡, 2013.11, 40.
- 4) 西日本新聞社・福岡市博物館 [編], 博多祇園山笠大全, 初版, 西日本新聞社, 福岡, 2013.11, 26.
- 5) 西日本新聞社・福岡市博物館 [編], 博多祇園山笠大全, 初版, 西日本新聞社, 福岡, 2013.11, 26.
- 6) 西日本新聞社・福岡市博物館 [編], 博多祇園山笠大全, 初版, 西日本新聞社, 福岡, 2013.11, 29.
- 7) 西日本新聞社・福岡市博物館 [編], 博多祇園山笠大全, 初版, 西日本新聞社, 福岡, 2013.11, 31.
- 8) FUKUOKA STYLE編集部, 山笠年表, HUKUOKA STYLE, 1994, Vol.9 ([総力特集] 博多祇園山笠: 祇園祭の系譜), 51.
- 9) 西日本新聞社・福岡市博物館 [編], 博多祇園山笠大全, 初版, 西日本新聞社, 福岡, 2013.11, 32-34.
- 10) 西日本新聞社・福岡市博物館 [編], 博多祇園山笠大全, 初版, 西日本新聞社, 福岡, 2013.11, 32-34.
- 11) FUKUOKA STYLE編集部, 山笠年表, HUKUOKA STYLE, 1994, Vol.9 ([総力特集] 博多祇園山笠: 祇園祭の系譜), 51.
- 12) FUKUOKA STYLE編集部, 山笠年表, HUKUOKA STYLE, 1994, Vol.9 ([総力特集] 博多祇園山笠: 祇園祭の系譜), 51.
- 13) 博多祇園山笠振興会五十年史編纂委員会 [編], 博多祇園山笠五十年史, 初版, 博多祇園山笠振興会, 福岡, 2004.6, 18.
- 14) 博多祇園山笠振興会五十年史編纂委員会 [編], 博多祇園山笠五十年史, 初版, 博多祇園山笠振興会, 福岡, 2004.6, 18-19.
- 15) 博多祇園山笠振興会五十年史編纂委員会 [編], 博多祇園山笠五十年史, 初版, 博多祇園山笠振興会, 福岡, 2004.6, 19, 38.
- 16) 博多祇園山笠振興会五十年史編纂委員会 [編], 博多祇園山笠五十年史, 初版, 博多祇園山笠振興会, 福岡, 2004.6, 53.
- 17) 博多祇園山笠振興期成会 [編], 博多山笠はかくして復興せり, 初版, 博多祇園山笠振興期成会, 福岡, 1955.1, 1-3.
- 18) 博多祇園山笠振興期成会 [編], 博多山笠はかく

xiii 上川端通は流ではないが、毎年八番山笠として追い山に参加している。

して復興せり，初版，博多祇園山笠振興期成会，
福岡，1955.1，2.

博多祇園山笠に関する著作について（後編）

Publications related to Hakata Gion Yamakasa (Vol.2)

清水 享^aToru Shimizu^a

博多祇園山笠に関する著作について（後編）
（前編より続く）

4.4. 博多祇園山笠についての概説，論考およびガイドブック

1970年代に福岡県夏の三大祭り推進協議会が『九州福岡県夏の三大祭り』（1976.5, 福岡県夏の三大祭り推進協議会）ⁱと銘打ち，小倉祇園太鼓，戸畑祇園大山笠とともに博多祇園山笠を写真とともに紹介した。三大祭り推進協議会には博多祇園山笠振興会や福岡県，福岡市も参画しており，本書は観光推進のパンフレットであった。

1990年代に博多祇園山笠を解説したガイドブックや特集を組んだムックが刊行された。ふくおか文庫編集部による『博多山笠げなげな読本：ぐんぐんわかる博多祇園山笠ガイドブック』（1994.6, プランニング秀巧社）は図を多用し，山笠の形態や道具などの詳細を解説している。さらに起源，歴史，日程，各流の特徴などにも触れている。この他に「大検証！山笠の科学」の章では，山笠の組織や山笠に魅せられる人々の理由などの分析も行っており，興味深い。FUKUOKA STYLE編集部による『HUKUOKA STYLE Vol. 9 [総力特集] 博多祇園山笠：祇園祭の系譜』（1994.6, 星雲社）はムックであるが，多方面から博多祇園山笠について詳述している。京都の祇園祭，祇園祭の系譜，博多祇園山笠の起源や歴史，「ごりょんさん」ⁱⁱや人形師について解説し，さらに九州北部各地のそれぞれの山笠も詳細に解説している。また本書には英文による解説も付記されている。

2000年（平成十二年）に中西正則編著による『博多山笠記録巻之壹 博多祇園山笠七百五十九年の傳統 大正元年より平成十二年までの八十九年の記録綴』が刊行された。これは大著であるが，私家版のもので現在福岡市総合図書館に所蔵されている。本書は大正初期から2000年（平成十二年）までの山笠に関連する資料を収集したものである。恵比須流の内容が中心であり，山笠の表題などの説明も見られる。また江戸期の古地図，絵図および明治期の街並みや山笠の写真，古地図も収録している。

2010年代において，注目される著作として西日本新聞社，福岡市博物館編『博多祇園山笠大全』（2013.11, 西日本新聞社）がある。本書は「大全」と書名にあるように博多祇園山笠について網羅的にまとめた概説書である。その歴史的経緯と行事日程，用語，京都祇園祭や各地の山笠との関係などが詳しく述べられている。また江戸時代の山笠の絵図や明治時代の写真なども多く掲載されている。

さらにアクロス福岡文化誌編纂委員会が編纂した『福岡の祭り』（2010.3, 海鳥社「アクロス文化誌4」）では，「夏：魂の躍動 祇園・山笠 豪華なヤマが街を彩る」，「豊前の祇園祭 各地に伝わる多彩なヤマ」として，博多祇園山笠をはじめ福岡県内の山笠や祇園祭についての概要を述べている。

この他に佐々木哲哉著による『福岡祭事考説』（2017.2, 鳥海社）では「筑前博多の松囃子と祇園山笠」という章を設け，博多の祭として松囃子と山笠についてその歴史的経緯を考察している。

^a 日本大学スポーツ科学部
College of Sports Sciences, Nihon University

i 本稿で言及する著作は紙幅の制限により，書誌情報は本文に示し，引用参考文献には示さない。以下全ての著作の書誌情報は同じように示す。

ii 「ごりょんさん」は山笠に出る男性の妻のことをいう。

4.5. 博多の町と博多祇園山笠の関係に言及する著作

1974年(昭和四十九年)に博多を語る会が編纂した『大正の博多記(第1部)』(1974.12, 博多を語る会)が刊行された。このなかに追い山の全コースのタイムを計った由来が述べられている。本書は大正期などの博多の様子について記憶をたどって書きまとめたものであり、1975年(昭和五十年)には第2部が、1979年(昭和五十四年)には第3部が刊行された。「博多を語る会」は波多江五兵衛が中心となって、博多の歴史、方言、民俗および山笠以外の松囃子、どんたくについても談義した会であった。

1980年代には井上精三が『福岡町名散歩』(1983.10, 葦書房)や『どんたく・山笠・放生会』(1984.4, 葦書房)を著した。前者では流と町内との関係を簡潔に解説し、後者では山笠について述べている個所で、その歴史を解説しており、特に江戸時代などの様相を比較的詳しく説明している。

1984年(昭和五十九年)には福岡市博多市民センター編『博多の歴史的遺産と現代の課題 市民大学講座 シリーズ「博多を考える」:1』(1984.10, 福岡市立博多市民センター)という市民大学講座の小冊子が刊行された。本書には講座で取り上げた博多の歴史や文化についての内容がまとめられている。博多の伝統の保護育成を目指す博多町人文化連盟の事務局長であった帯谷瑛之介が講師となり、「博多の自治とまつり」の講座が開かれ、その中で博多祇園山笠について言及している。ここでは山笠に関わる人々の関係性を端的に述べており、興味深い。また本書の「博多のごりょんさん」の講座は波多江五兵衛が担当した。

この波多江五兵衛の著作には『博多物語』(1988.3, 松井喜久雄)もある。内容は東流の有志が「博多を語る会」の波多江五兵衛を招いて行なった学習会の資料であり、これを整理したものであった¹⁾。特に町名の由来などについて詳述している。「博多を語る会」は博多に関する「うた」も収集していた。収集した「うた」は波多江五兵衛解説、松井喜久雄編纂『博多のうた』(1980.9, 松井喜久雄)としてまとめられ、刊行された。博多祇園山笠の追い山の一番山が清道入りをしたときに歌う「博多祝い唄」をはじめ、博多祇園山笠を歌う「うた」もいくつか見られる。本書は1991年(平成三年)に再版が刊行され、1998年(平成十年)10

月に改めて増補した再々版が刊行された。この再々版には「うた」の数字譜も掲載され、「博多の知識」といった項目も加えられた。その中には「山笠の八文字」、「山笠の酒に梅干を出すわけ」など山笠に関する事項も掲載された。

松井喜久雄は他に『雑学富貞月亭』(1993.9, 松井喜久雄)を著し、博多の言葉、哲学、雑学などについて述べ、中には博多祇園山笠についても言及している部分もある。彼は他に泉敦夫による私家版川柳句集について、改めて編集し、自らの文も書き添えた句集を刊行した。それが泉敦夫・松井喜久雄著『川柳博多歳時記』(1994.9, 松井喜久雄)である。本書には泉敦夫による「年寄りの目に棒締めにある手順」、「當番町の氣持が重い取締り」などの山笠の句が収められている。さらに松井喜久雄は『博多方言』(1997.4, 松井喜久雄)も著した。本書は博多の方言をあいうえお順にまとめたものであるが、博多祇園山笠を含め、博多についての随筆も収められている。彼はまた『はかた博学帖』(2002.10, 松井喜久雄)も著した。本書には博多に関わるさまざまなエピソードが収められているが、博多祇園山笠については複数の写真が掲載されているのみで、エピソードは収録されていない。これら松井喜久雄が刊行した著作はいずれも商業出版ではなかった。

2000年代以降、いくつか博多祇園山笠に言及する著作が刊行された。岩波新書からは武野要子著『博多：町人が育てた国際都市』(2000.12, 岩波書店)が刊行された。本書は、博多の歴史と文化についてまとめているが、博多祇園山笠についての説明は少ない。

新貝行生著による『中洲物語』(2002.6, 海鳥社)は、九州一の歓楽街と呼ばれる中洲地区についての新聞連載記事をまとめたものである。中洲に関わる人々に直接インタビューをして、中洲の歴史と実情を詳細に語っており、中洲と山笠の関係も詳しく述べられている。

宮崎克則、福岡アーカイブ研究会編による『古地図の中の福岡・博多』(2005.12, 鳥海社)では博多祇園山笠の活動単位である流の町割りについて、江戸時代などの古地図より説明を加えており、博多祇園山笠の歴史地理を知る上で非常に参考となる。

1997年(平成九年)から西日本新聞に連載された企画「博学博多 ふくおか深発見」が再構成され、西

日本新聞社編『博多博学 ふくおか深発見』(2007.6, 西日本新聞社)として刊行された。本書は福岡や博多に関する歴史、文化、人物などについて述べており、博多祇園山笠についても概要が記されている。本書は調福男、渕浩子著『博多博学200 増補改訂版』(2014.3, 西日本新聞社)として、増補版として改めて刊行された。

2014年(平成二十六年)に日高三朗、保坂晃孝著による『博多旧町名歴史散歩』(2014.2, 西日本新聞社)が刊行された。1966年(昭和四十一年)に行なわれた「町界町名整理事業」は博多の133か町が24か町に整理され²⁾、博多祇園山笠にも大きな影響を及ぼした。本書は事業前の旧町名と町内について詳述し、さらに博多祇園山笠やどんたく、松囃子との関係などを詳しくまとめている。

4.6. 博多祇園山笠に関するエッセイ及びノンフィクション

1992年(平成十四年)には大庭宗一著『博多んもんの詩「山笠生命の男たち」』(1992.4, 酒房やす)が刊行された。大庭宗一は「土居流」の「取締」ⁱⁱⁱを務めた人物であり、本書は博多祇園山笠についてのエッセイ集である。山笠に自ら参加し、深く関わっている人物の随筆はこの時代の山笠の状況を端的に表しており、非常に興味深い。大庭宗一は2000年(平成十二年)に『山笠の風：博多の風を追いかけて』(2000.5, プランニング秀巧社)を著した。本書には山笠についての随筆と詩が収められている。また7つの流の概要と特徴について、それぞれの流の関係者がまとめている部分もあり、これは注目される。

2007年(平成十九年)に西日本新聞社から保坂晃孝、石橋清助による『おっしょい山笠』(2007.7, 西日本新聞社)が刊行された。本書は西日本新聞の保坂晃孝が石橋清助博多祇園山笠振興会会長から聞き取りをして、まとめたものである。いわば博多祇園山笠のオーソリティーによるオーラルヒストリーであり、戦中から平成の時代までの博多祇園山笠および博多の状況について当事者の立場から語られており、史的な価値

があるといえよう。

4.7. 博多祇園山笠についての写真集、絵画集

1977年(昭和五十二年)には石橋源一郎、波多江五兵衛編による『思い出のアルバム・博多あの頃：明治・大正・昭和を綴る』(1977.5, 葦書房)が刊行された。本書は明治から昭和までの博多の様々な写真を収集したものであり、博多祇園山笠の写真も掲載されている。また本書には写真ではないが、当番法被^{iv}の一覧も付録している。

1980年代になると写真集として菅洋志が撮影し、長谷川法世が文章を書いた『博多祇園山笠』(1983.6, 講談社)が刊行された。菅洋志も長谷川法世も博多出身であり、長谷川法世は後述する漫画『博多っ子純情』の著者として知られている。この写真集が博多祇園山笠の写真集としては嚆矢であろう。本書にはさらに博多祇園山笠の解説、江戸期の山笠図、明治期の写真、当番法被の解説、山笠の縁起などもまとめられている。菅洋志は1995年(平成七年)に改めて写真集『博多祇園山笠』(1995.6, 海鳥社)を刊行している。こちらは撮影だけでなく文章も自ら綴っている。

1993年(平成五年)には日高裕行が著した『写真が語る大黒流』(1993, 日高裕行)が刊行された。著者は大黒流で取締を務めた人物であり、本書は取締退任後、撮りためた写真をまとめたものだった。写真集のなかには山笠のみならず松囃子の写真も掲載されている。

2004年(平成十六年)にはこにしかずよし著『博多祇園山笠きり絵』(2004.6, 海鳥社)が刊行された。これは切り絵アーティストのこにしかずよし(小西一珠喜)が博多祇園山笠を題材に制作した切り絵集であり、モノトーンの切り絵だけでなく、カラーの切り絵も収められている。また各流の人々の切り絵とともに各流の解説が簡単に述べられている。こにしかずよし(小西一珠喜)は、2010年(平成二十二年)に改めて『博多祇園山笠 全流当番法被きりえ図鑑 水法被・長法被』(2010.12, 博多きりえ)といった切り絵集も刊行している。こちらは切り取ってポストカードとして使

iii 「取締」は山笠の実働部隊である「若手」を取りまとめる責任者。

iv 「当番法被」は「長法被」とも呼ばれ、山笠期間中の正装となる。各流、各町内でその図柄が異なる。

えるようになっている。

2004年(平成十六年)には、さらに進藤祐光が撮影した写真集『1242/2004 写真集 博多祇園山笠』(2004.7, 進藤祐光写真事務所)も刊行された。本書は白黒写真が多く掲載され、非常にスタイリッシュな写真が大半を占め、非常にアーティステックな写真集である。

2006年(平成十八年)に刊行された「博多山笠」刊行委員会編『博多山笠』(2006.7, H・Y・K「博多山笠」刊行委員会)は、写真家の藤本健八が撮影した山笠の写真を中心に博多と山笠についての歴史や由来をまとめている。

2017年(平成二十九年)には八田公子による『博多祇園山笠 夏の風：八田公子写真集』(2017.6, 日本写真企画)が刊行された。写真を撮影したのは博多出身の女性写真家であり、あとがきで「山笠への憧れ」によって、博多祇園山笠を撮り続けている心情を述べている³⁾。

4.8. 博多祇園山笠を題材とした小説、漫画、伝記

1977年(昭和五十二年)に長谷川法世著による『博多っ子純情』(全34巻)(1977.1~1984.9, 双葉社)の第1巻が刊行された。これは『漫画アクション』(双葉社)に掲載された漫画であり、博多を舞台として主人公が中学時代から博多の人形師としての道のりを歩む青年時代までを描いている。そして博多祇園山笠は随所で重要な舞台となり、物語が進められる。

福岡の名産品である明太子は中洲に店舗を構えた「ふくや」がそのパイオニアであり、その創業者である川原俊夫は戦後の博多祇園山笠復興に、中洲流から大いに貢献した。その「ふくや」が創業50周年を記念して、株式会社ふくや50周年記念実行委員会による『博多明太子物語 [ふくやの50年]』(1997.1, 株式会社ふくや)を刊行した。本書には戦後の中洲流の創設についての背景や経緯も述べられている。なお本書には別冊として川原俊夫の生涯と明太子の物語の漫画も付されている。

2009年(平成二十一年)に刊行された山本十夢著『もう一つの山笠：まぼろしの福神流』(2009.4, 梓書院)は、明治時代に解散した福神流についての小説である。博多祇園山笠が舞台背景となる小説や漫画はい

くつか見られるが、山笠そのものを取り上げ、さらに歴史的な小説としてまとめられているものは珍しい。

先述した明太子の「ふくや」の創業者である川原俊夫について、その生涯の業績について子息の川原健が『明太子をつくった男：ふくや創業者・川原俊夫の人生と経営』(2013.1, 海鳥社)が著した。これは川原俊夫生誕100周年を記念して刊行されたものだった。本書には博多祇園山笠について述べられている部分があり、特に中洲流創設とハワイ遠征についてその経緯が記されている。またこの「ふくや」の創業者である川原俊夫をモデルとした小説が、東憲司著『めんたいびりり』(2018.3, 集英社)として2018年(平成三十年)に刊行された。「めんたいびりり」はもともとテレビドラマで放送され、舞台化、映画化もされており、本書はそのドラマを小説化したものだった。中洲で創業し、発展した店舗と創業者のストーリーであり、博多祇園山笠に関わるエピソードも数多く含まれる。

博多祇園山笠の起源に関わる人物である聖一国師と博多祇園山笠について、漫画でまとめられたのが井上政典ほか著『博多の恩人・聖一国師と博多祇園山笠』(2018.6, 集広舎)である。本書は聖一国師についての人物伝であるが、博多祇園山笠の概要にも触れている。

福岡出身の作家である辻仁成が、『真夜中の子供』(2018年, 河出書房新社)を著わした。本書は中洲を舞台として、中洲生まれの戸籍のない少年が山笠に関わるなかで成長するストーリーであり、随所に山笠に関わりのあるシーンがある。

5. 小結：博多祇園山笠に関する著作の特徴

博多祇園山笠の著作を整理するといくつかの特徴がある。

まず落石栄吉が博多祇園山笠史をまとめ、さらに戦後博多山笠史の史料を多く残したことである。博多祇園山笠は終戦後からこの祭を牽引した博多祇園山笠振興期成会とその継続組織である博多祇園山笠振興会によってその歴史が紡がれてきた。そうしたなかで期成会、振興会の会長を務めた落石栄吉が『博多祇園山笠今昔物語』(1952.6, 博多祇園山笠振興期成会)に博多祇園山笠の歴史をまとめたことは、とても意義深い。その後の博多祇園山笠に関する著作や論考は、その多くが著書の基礎の上に成り立っていると言っても過言

ではなかろう。また落石栄吉は博多祇園山笠について多くの資料を残し、博多祇園山笠史を研究する上で欠くことのできないものとなっている。

次に博多祇園山笠振興会発足30周年以降、10年ごとに記念誌が刊行されたことは注目される。博多祇園山笠振興会発足30周年記念誌である『博多山笠：博多祇園山笠振興会30周年記念誌』(1986.1, 博多祇園山笠振興会)が年代記の形式でまとめ、それに10年ごとの出来事が各周年記念誌に追加されていった。もともとこうした年代記の形式は落石栄吉による『博多祇園山笠史談』(1961.6, 博多祇園山笠振興会)から始まる形式であった。

1999年(平成十一年)および2015年(平成二十七年)から2018年(平成三十年)ごろに50周年を記念する記念誌の刊行も特徴的である。1990年代以降、各流が記念誌をまとめ、刊行したもので、そのはじまりは松井喜久雄著『東流のあゆみ：戦後の世相』(1990.11, まつい工務店)であった。そして1999年(平成十一年)に50周年を迎えた中洲流、千代流が記念誌を刊行した。これらは戦後に発足した流が歴史を振り返ったものだった。2015年(平成二十七年)から2017年(平成二十九年)にかけて上川端通、西流、東流が50周年の記念誌を刊行した。これらは1966年(昭和四十一年)の「町界町名整理事業」の影響を受けて町内が整理されて以降、新たにまとまった流であり、その歴史を振り返ったものだった。2017年(平成二十九年)には土居流も記念誌を刊行したが、こちらも「町界町名整理事業」による流の解散の危機があり、それを乗り越えた歴史をまとめたものだった。また2018年(平成三十年)には大黒流古ノ一の町内の歴史をまとめた記念誌が刊行されたが、こちらも「町界町名整理事業」の影響を受けての再編によるものであるが、一町内で記念誌を刊行するの非常に珍しい。

博多祇園山笠についての概説も複数刊行されたが、

西日本新聞社、福岡市博物館編『博多祇園山笠大全』(2013.11, 西日本新聞社)はそうした概説の集大成であるといえよう。

博多祇園山笠は写真集、絵画集や小説、漫画などの題材や舞台ともなっている。本稿の執筆以前、こうした著作は非常に多くのもが刊行されていたと予想したが、収集分析し、本稿を執筆してみた結果、意外にもやや少ない傾向があるように見受けられた。

本稿ではできうる限り、戦後博多祇園山笠に関する著作を整理分析したが、遺漏がある可能性がある。そのため今後も博多祇園山笠に関する著作について、広く収集し、整理する作業を継続し、そして諸賢のご指摘も広く仰ぎ、より詳細な分析も進めなければいけない。さらに本稿では博多祇園山笠についての学術論文、雑誌記事に関しての整理分析は進めておらず、今後改めてこれらを整理分析し、博多祇園山笠研究の基礎的なデータの蓄積をすることが重要であろう。山笠行事は歴史学や民俗学の分野からの研究のみならず、その形態、組織、動作などを分析するスポーツ人類学からの視点による研究もあり、博多祇園山笠を総合的に研究する上で、このスポーツ人類学からの視点はひとつの鍵となるであろう。そのため、博多祇園山笠についての学術論文、雑誌記事に関して整理分析を行なう基礎的研究の論考は今後改めてまとめる予定である。

参考文献

-
- 1) 波多江五兵衛, 博多物語, 初版, 松井喜久雄, 福岡, 1988.3, 3, 190.
 - 2) 日高三朗・保坂晃孝, 博多旧町名歴史散歩, 初版, 西日本新聞, 福岡, 2014.2, 西日本新聞社, 1.
 - 3) 八田公子, 博多祇園山笠 夏の風: 八田公子写真集, 初版, 2017.6, 日本写真企画, 東京, 127.

遊び、非難、残忍さ

— John Miltonの作品における“sport”（前編）—

“Play”, “Criticism”, and “Inhumanity”:

The Usage of “Sport” in the Works of John Milton

桶田 由衣^aYui Oketa^a

Abstract

This paper addresses the usage of “sport” in John Milton’s English works. In 17th century England, “sport” primarily meant “play” or “pastime.” At that time, sports or pastimes were controversial among Puritans, who believed that such things encouraged immorality. In 1633, Charles I reissued the *Book of Sports*, which prescribed recreation approved for the Sabbath and, consequently, offended Puritans like Milton. Given Milton’s criticism of excessive sports, the word “sport” almost certainly had an unfavorable or negative connotation. Although researchers have clarified Milton’s stance on sports or pastimes, few if any studies have focused on his usage of “sport” in his works. Milton used “sport” 17 times as a noun in his English works, consistently using it to criticize specific people. However, his usage of “sport” gradually changed over time. Whereas he used “sport” to denounce his opponents in his early works, he used it to condemn the immorality of people more indirectly in his works after the Restoration because of censorship. The usage of “sport” in the works of Milton will be helpful to understand the history of the meaning “sport”.

Key words: sport, pastime, recreation, play, Puritan

遊び、娯楽、ピューリタン

はじめに

“sport”という語は、19世紀まで「遊び」の意味が主流だった¹⁾。“sport”の語源や意味の変遷に関する研究は多々あるが²⁾、文学作品を用いた“sport”の使用例の研究は多くない。文学作品はその時代の思想を写し出す鏡だと言われるように³⁾、文学作品はその時代の思想を検証するためのツールとなる。例えば、稲垣⁴⁾は、イギリス文学13作品におけるスポーツ文化について論じる際、「スポーツ」の語義が定着しつつある18世紀以降の作品を検証しているが、17世紀以前の作品を含めていない。¹17世紀頃の英国において、“sport”は「遊び」を指し、「スポーツ」とは別物

だと指摘されるが⁵⁾、近代スポーツの成り立ちを理解するためには、17世紀における“sport”を知る必要がある。

17世紀英国で娯楽を非難したのは、厳格な規律を求めたピューリタンであった⁶⁾。共和制を率いた Oliver Cromwell (1599-1658) のもとで外国語秘書官を務めたピューリタン作家 John Milton (1608-74) は、ピューリタンの娯楽に対する姿勢に賛同しつつも、娯楽全てを厳格に取り締まることに懐疑的だったと McGuire⁷⁾ は指摘している。⁸また Currell¹⁰⁾ は Milton の代表作 *Paradise Lost* (1667) において、墮落した者が好戦的である様を“sport”の使用場面で表現されているという。従来の研究は、単語“sport”の有無に関わらず娯楽に

本稿は、2019年7月20日、令和元年度日本大学学部連携ポスターセッションにおけるポスター発表「ジョン・ミルトンの作品の言葉の分析」に大幅な加筆修正を施したものである。

^a 日本大学スポーツ科学部

College of Sports Sciences, Nihon University

i 稲垣が検証した一部の作品を列挙する。Henry Fielding (1707-54) 作 *The History of Tom Jones* (1749), Thomas Hughes (1822-96) 作 *Tom Brown’s School Days* (1857), Alan Sillitoe (1929-2010) 作 *The Loneliness of the Long-Distance Runner* (1959).

ii Miltonの娯楽批判の例として、仮面劇 *A Mask* (1634) における悪役 Comus の酒宴に対する批判がある⁸⁾。中房は、William Shakespeare (1564-1616) が“sport”を「遊び」「愉しみ」として使用していたと指摘するが⁹⁾、Miltonへの言及はない⁹⁾。

関する場面の検証や、1つの作品に特化した研究であり、Miltonの作品全体を通した単語“sport”の検証ではない。本論は、Miltonの英語作品における名詞“sport”の使用場面を検証し、Miltonが“sport”をどのように使用していたかを明らかにする。ⁱⁱⁱ

1. 信仰の墮落そして娯楽の政治利用—

ピューリタンが“sport”を批判した理由

まず“sport”の語源とピューリタンが“sport”「娯楽」、「遊び」を批判した理由を簡潔に説明したい。単語の語源や意味の変遷が記載された*The Oxford English Dictionary* (以下OED)¹²⁾ iv)によると、“sport”はラテン語“dēportāre”[～を運ぶ]から派生し、それが古フランス語に取り入れられ、後に英語“disport”の頭音が消失し、“sport”として用いられるようになった。^v

1633年にCharles I (1600-49, 在位1625-49)は容認できる“sport”を規定した*Book of Sports*を發布し、ダンス、跳躍、アーチェリーといったスポーツなどが含まれた¹⁷⁾。vi)ピューリタンが、上記のような現在も馴染みがある当時のスポーツも非難した理由として、Brailsford¹⁸⁾は17世紀の最初の50年間、“sport”や“game”が、健康のための運動をあまり指さず、身体運動に「遊び」の要素が入り込んだためであり、このような状況に激怒したピューリタンは、不信を募らせ、娯楽に厳しい目を向けざるを得なくなったという。

娯楽への非難の理由の1つに、Charles Iが安息日すなわち日曜日の娯楽活動を許容したことが挙げられる¹⁹⁾。*Book of Sports*は、日曜日に行える娯楽を規定しているのだが、ピューリタンは日曜日に遊びに心を移すことこそ、神への奉仕を怠るものとして非難した²⁰⁾。そして別の理由として、娯楽を政治利用したことが挙げられる。Charles Iが、娯楽である仮面劇を自分たち

の威厳を示すためのプロパガンダとして用いたために、ピューリタンは反対した²¹⁾。結果、Charles Iは処刑され、1649年から1660年の約10年間共和制が敷かれた。こうした背景のもとに、Miltonの英語作品における“sport”の使用例を検証する。

2. Miltonの作品と“sport”の使用例

Miltonの英語作品の中で、韻文は9箇所、散文は8箇所、計17箇所認められた。検証した結果、“sport”は多くの作品において「遊び」や「娯楽」として使用されているため、“sport”の語義での分類では、有意な差は生まれなかった。そこでMiltonの創作年代に基づいて、文脈から検証した結果、大きく3つの区分B, C, Eに分けられ、その中でも特異な用法であるAとDを別にし、表1のように分類した。

BはMiltonが主に共和制府に關与するまでの作品で、「娯楽」を規定するような文脈で使用されている。AもBに含まれるが、擬人化という特異な例であるため分けた。Cも共和制府に關与するまでの作品だが、主に散文作品が多く、人を非難する文脈で用いた例である。DはCやEに含まれるが、他の区分にはない「もてあそばされるもの」の意味で、かつ*Paradise Lost*のみに見られた使用例のため、1つの区分と見なした。EはMiltonが共和制の崩壊、失明といった逆境の中で執筆、出版した作品が主で、Bとは違って残忍な場面での“sport”の使用例が認められた。しかも1650年代中頃からMiltonの倫理観に変化が生じたという新井²²⁾の指摘に従い、Bと区別した。この区分のもとに、“sport”の各創作年代における使用頻度、使用率そして使用例を表2と表3のようにまとめた。なお、表2のパーセンテージは表1の使用頻度における割合を示している。

iii 紙幅の関係で、本論は前後編に分けることとする。また、Miltonの作品からの引用は、全て*The Works of John Milton*¹¹⁾から用いた。今後韻文作品は引用文の後の括弧に行数を、散文作品は引用文の後の括弧にページ数を記載する。Miltonはラテン語作品も創作しているが、訳者がラテン語を「スポーツ」の意味で英訳している例もあるため、ラテン語作品は検証に含めない。また、名詞“sport”に限定した理由として、次の2点を挙げる。1つ目に、今後「遊び」に関する名詞の類語について検証するため、2つ目に「遊び」の類語として、“sport”と同じく名詞、動詞同形の“play”だけでなく、“recreation”等の名詞も含むため、本稿は名詞のみの検証とした。なお、Miltonの英語作品において動詞“sport”は6例確認しており、1例を挙げる。“Sporting the Lion rampd, and in his paw/Dandl'd the Kid;” (*Paradise Lost* 4.343-4)

iv OEDは、「英語の歴史を最も包括的にそして一般語を最も完全な形で記録した辞書」と称されている¹³⁾。OEDの特徴は、各単語の廃義も含めた語義を掲載し、その語義が使用された文献の引用例を記載している¹⁴⁾。その例のうち、初出例はその語義が使用された始めた時期の目安となる。

v “sport”の語源については、阿部¹⁵⁾と中房¹⁶⁾も参照されたい。

vi James I (1566-1625, 在位1603-25)が1617年に*Declaration of Sports*を發布したのが発端である。

表1 創作年代に基づいた文脈による区分とその使用頻度

創作年代	創作年代に基づいた文脈による区分	使用頻度
前期: 共和政府樹立前 (主に1640年代以前)	A: 擬人化の例	1
	B: 「遊び」「娯楽」「楽しみ」の例	4
中期: 共和政府樹立前 (主に1640年代)	C: 「非難」「嘲り」の例	5
後期: 王政復古後 (主に1660年以降)	D: 墮落したものへの制裁の例	2
	E: 残忍な場面と関連づけられる「娯楽」「遊び」の例	5

表2 表1の区分の各年代ごとの使用頻度および使用率の変遷

	A	B	C	D	E
前期: 共和政府樹立前 (主に1640年代以前)	1 (100%)	2 (50%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
中期: 共和政府樹立前 (主に1640年代)	0 (0%)	2 (50%)	3 (60%)	0 (0%)	0 (0%)
後期: 王政復古後 (主に1660年以降)	0 (0%)	0 (0%)	2 (40%)	2 (100%)	5 (100%)

表3 英語作品での使用例

No.	作品名 (創作年)	韻文/ 散文	使用例 (一部抜粋)	区分
(a)	<i>L'Allegro</i> (c.1632)	韻文	Sport that wrinkled Care derides	A
(b)	<i>A Mask</i> (1634)	韻文	Hail Goddess of Nocturnal sport	B
(c)		韻文	We shall catch them at their sport	B
(d)	<i>Animadversions</i> (1641)	散文	to thinke of the sport	C
(e)	<i>Church-government</i> (1642)	散文	our publick sports	B
(f)	<i>An Apology</i> (1642)	散文	they made sport, and I laught	C
(g)	<i>Of Education</i> (1644)	散文	That having in sport, ... serv'd out the rudiments of their Souldiership	B
(h)	<i>Colasterion</i> (1645)	散文	Since my fate extorts from mee a talent of sport ...	C
(i)	<i>Paradise Lost</i> (1667)	韻文	the sport and prey Of racking whirlwinds	D
(j)		韻文	The sport of Winds	D
(k)	<i>History of Britain</i> (1670)	散文	thir Wives also came in Waggons to sit and behold the sport	E
(l)		散文	they took part of it and burnt it, committing all sorts of massacher as a sport	E
(m)		散文	<i>Godwin</i> and his Sons ... oftentimes making sport with his simplicity	C
(n)	<i>Paradise Regain'd</i> (1671)	韻文	Then cruel, by thir sports to blood enur'd	E
(o)	<i>Samson Agonistes</i> (1671)	韻文	I deluded her, and turn'd to sport Her importunity	C
(p)		韻文	When to thir sports they turn'd.	E
(q)		韻文	They only set on sport and play	E

“sport”は、初期の頃から晩年にかけて使用されているものの、“sport”の使い方が年々変化しているのは明らかである。^{vii}上記の区分を元に検証し、最後に全体の考察を行う。

3. 擬人化の“sport”

歓喜がテーマの (a) *L'Allegro* (c.1632) においては、“sport”が次のように擬人化されている。“Haste thee nymph, and bring with thee / Jest and youthful Jollity, / ... / Sport that wrinkled Care derides,” (*L'Allegro* 25-6, 31) 本作品の語り手が仙女 nymph に呼びかけ、擬人化された“Jest”や“Jollity”といった戯れ、饗宴に関連するものと共に“sport”「気晴らし」も女神“Mirth”のもとに連れて行くようにと言う。該当箇所を見ると、Miltonが「遊び」を肯定的に見ていたと考えられるが、本作品の対の作品で、歓喜を排除し、“melancholy”沈黙をテーマとする *Il Penseroso* (c.1632) も念頭に入らなければMiltonの意図を理解できないことは、先行研究でも指摘されていることから、*L'Allegro*のみでMiltonの娯楽に関する思想を判断することはできない²³⁾。なお、(a)の引用文は、*OED*の“Pleasant, pastime; entertainment or amusement; recreation, diversion”²⁴⁾の語義の使用例として引用されており、特に擬人化の例としては、Edmund Spenser (c.1552-99)の作品と本作品を含めて2例しかない。“sport”の擬人化の例として極めて貴重な例であると言える。

4. 「遊び」「娯楽」「楽しみ」の例

仮面劇 *A Mask* (1634) の (b) は、次の神的存在の描写に用いられている。“Hail Goddess of Nocturnal sport / Dark veil'd Cotytto, ...” (*A Mask* 128-9) 本作品の悪役で快楽に浸る魔神 Comus が、夜の酒盛りを始める際に“sport”「戯れ」の女神 Cotytto に向かって呼びかけ、悪役の助力となるものが“sport”を司る神的存在であることから、Milton が乱痴気騒ぎに値する娯楽に否定的であったといえる。

一方、同作品の (c) は、Comus の宴会の場面とは正反対の場面である。終盤、Comus の誘惑から解放

された主人公 the Lady は、弟たちと共に案内役の守護天使の導きで、父親の Wales 総督就任の祝賀会場に向かう。その会場の様子を守る天使が次のように語る。“All the Swains that there abide, / With Jiggs, and rural dance resort, / We shall catch them at their sport,” (*A Mask* 950-2) 自分たちが到着した時には、牧夫らが楽しげに踊りながら会場に向かう様子を見るだろうと言うが、奇しくも盛儀に関連する場面で“sport”が用いられている。同じ言葉でも、乱痴気騒ぎの酒宴と統治者の祝宴の性質の違いを示している。とはいえ、Milton の仮面劇は、他の仮面劇よりもダンスの場面が少ないという指摘もあること²⁵⁾、また先述した *Book of Sports* で容認された娯楽にダンスも含んでいたと考え、祝宴やダンスの場面を縮小したいという Milton の意図があったと考えられる。^{viii}

(e) *Church-government* (1642) は、教会の正しい統治方法について論じたものである。Milton は、為政者に対し、次のことを考慮に入れるよう要望する。“... it were happy for the Common wealth, if our Magistrates, ... would take into their care, ... the managing of our publick sports, and festival pastimes, that they might be, not such as were authoriz'd a while since, the provocations of drunkenness and lust, but such as may inure and harden our bodies by martial exercises to all warlike skil and performance...” (*Church-government* 239-40) 為政者には、我々の肉体を訓練する軍事訓練に値する“our publick sports”公共の「楽しみ」について検討するよう述べており、“the provocations of drunkenness and lust”「酔態と淫蕩を挑発するもの」であるべきではないと Milton はいう。「酔態と淫蕩を挑発するもの」は、*Book of Sports* を指すと Haug²⁶⁾ や新井・田中²⁷⁾ の指摘があるように、それは Milton にとって人を墮落させるものであったのは明らかである。

(g) *Of Education* (1644) は、英国における教育についてまとめた作品である。本作品には、体育に関する言及があり、Milton が体育教育を重視していたことが窺える。“sport”も体育への言及の中で使用されている。

vii 1650年代の作品がない理由として、Miltonが当時共和政府で外国語秘書官として活躍しており、基本的に当時の国際的公用語ラテン語を駆使した政治論文を執筆することが多かったためだと考えられる。

viii *A Mask* の全1022行の内、終盤の祝宴の場面は20行ほどしかない。

... they are by a sudden alarum or watch word, to be call'd out to their military motions,... ; That having in sport, but with much exactness, and daily muster, serv'd out the rudiments of their Souldiership in all the skill of Embattelling, Marching, Encamping, Fortifying, Besieging and Battering, with all the helps of ancient and modern stratagems, *Tacticks* and warlike maxims, they may as it were out of a long War come forth renowned and perfect Commanders in the service of their Country. (*Of Education* 289)

体育は“military motion”軍事教練を指し、それを“in sport”「楽しみながら」行うことをMiltonは否定していない、つまり教育的効果が認められる“sport”な状況であれば、容認するのである。上記4例より、Miltonは、軍事教練として身体を鍛える場合と、限られた状況で適度な場合のみに“sport”を認めることがわかる。

5. 「非難」「嘲り」の例

(d) の *Animadversions upon the Remonstrants Defence against Smectymnuus* (1641, 以下, *Animadversions*) は、主教 Joseph Hall に対するキリスト教の主教制度批判の論文である。Milton が Hall の著作の一節を引用し、それに Milton が返答する形式で書かれており、“sport”は、Hall の *A Humble Remonstrance* (1640) からの引用文にある。聖職者の醜聞がペリシテ人^{ix}の支配地で公になることを禁ずるべきという Hall を Milton は非難し、Hall の一節を引用する。“What a death it is to thinke of the sport and advantage these watchfull enemies, these opposite spectators will be sure to make of our sinne and shame?” (*Animadversions* 169)^x 楽しみ事を考えて、敵の利益になるのは、恐ろしいことであり、これこそ我々の罪になるのだろうかと問いている。これに Milton は “This is but to fling and struggle under the inevitable net of God, that now begins to inviron you round.” (*Animadversions* 170) と返答し、神の元で悪あがきしているに過ぎず、いずれ Hall 自身にも

降りかかることだと非難する。Milton が言及している訳ではないが、宗教的に対峙する者と“sport”を関連した箇所を Milton が意図的に引用したと言える。

(f) の *An Apology for Smectymnuus* (1642) も主教制度批判の内容である。若き聖職者や聖職者を志す者たちが、舞台上で道化などを演じる様を宮廷の廷臣らの目にとまることが、恥晒しであると言い、自分たちを堂々とした人間だと思っている聖職者の舞台上の姿についてこう述べる。“...; they thought themselves gallant men, and I thought them fools, they made sport, and I laught, ...” (*An Apology* 300) 聖職者は観客を“make sport”楽しませようとするが、Milton はその姿を面白がると皮肉を述べている。

(h) *Colasterion* (1645) は、Milton の離婚論に批判した人物への反駁の論文である。Milton は、馬鹿げた論敵には相応しい呼び名をつけようと皮肉をこめて次のように述べる。“Since my fate extorts from mee a talent of sport, which I had thought to hide in a napkin, hee shall bee my *Batrachomuomachia*, my *Bavius*, my *Calandrino*, the common adagy of ignorance and overweening.” (*Colasterion* 272) 使わずにいた自分の「遊び」の才能が奪われたため、自分の論敵を“*Batrachomuomachia*”擬叙事詩のタイトルで表現したり、“*Bavius*”三文詩人や“*Calandrino*”無礼な愚か者と表現しようと述べている。^{xi} 当該箇所においては、論敵を貶める際に“sport”を用いている。

次の例は、英国の歴史を記した (m) *History of Britain* (1670) である。告解王 King Edward (c.1003-66) の義父 Earl of the West Saxons の Godwin (?-c.1053) による King Edward への行為について次のように語られる。“...*Godwin* and his Sons bore themselves arrogantly and proudly towards the King, usurping to themselves equall share in the Government; oft times making sport with his simplicity, ...” (*History of Britain* 306) 傲慢な Godwin 父子が、King Edward の無知さを物笑いの種にしていたという。Milton が “make sport with” や “make sport” のようなイディオムとして “sport” を使用するのは上記 2 例だけであったが、人を嘲る場面で使用し

ix 『キリスト教大事典』²⁸⁾ と『岩波キリスト教辞典』²⁹⁾ によると、キリスト教において、イスラエルの敵とされる民を指す。

x Hall の原文は、句読点の位置が若干異なり、“these opposite spectators” は当該引用箇所の前文にある³⁰⁾。

xi “*Batrachomuomachia*”, “*Bavius*”, “*Calandrino*” については、*Complete Prose Works of John Milton, vol. II*³¹⁾ 内の注釈を参考にした。

ている。^{xii}

Miltonの最後の韻文作品で、旧約聖書「士師記」第13章から第16章までを土台とした (o) *Samson Agonistes* (1671) において、主人公Samsonは、妻Dalilaにだまされ、敵のペリシテ人に自身の力の在処である頭髪を削ぎ落とされ、投獄される。Dalilaは、ペリシテ人にSamsonの力の在処を問いただすよう言われ、Samsonに再三尋ねていた。SamsonはDalilaに対し、“Thrice I deluded her, and turn’d to sport / Her importunity, …” (*Samson Agonistes* 396-7) という様に、Dalilaの質問に茶化して答えずにいた。当該箇所はDalilaをからかうという意味で、相手を小馬鹿にしたような意味で用いている。なお、当該箇所の“sport”は、*OED*の2nd.ed.の“Jest, jesting; mirth or merriment”³²⁾の語義の初出例であり、この語義での代表例の1つとも言える。上記の引用例から、Miltonは人を嘲り、非難する場合に“sport”を用いることがあったと言える。(後編に続く)

引証資料

- 1) 岸野雄三：スポーツ科学とは何か，スポーツの科学的原理，大修館書店，東京，81，1978。友添秀則他編：21世紀スポーツ大事典。大修館書店，東京，4-5，2015。
- 2) 岸野雄三：スポーツ科学とは何か，スポーツの科学的原理，大修館書店，東京，80-1，1978。友添秀則他編：21世紀スポーツ大事典，大修館書店，東京，4-5，2015。
- 3) Taine, H. A. Translated by H. Van Laun: *History of English Literature, vol. 1*, New York: Holt & Williams; 1, 1871.
- 4) 稲垣正浩：イギリス文学のなかにスポーツ文化を読む。叢文社，東京，7-251，2006。
- 5) 水野忠文：スポーツとは何か，スポーツの科学的原理，大修館書店，東京，23，1978。
- 6) Brailsford, Dennis: *Sport and Society: Elizabeth to Anne*. London: Routledge & Kegan Paul; 127, 1969.
- 7) McGuire, Maryann Cale: *Milton’s Puritan Masque*. Athens: U of Georgia P; 9-59, 1983.
- 8) Dougal, Alistair: *The Devil’s Book: Charles I, the Book of Sports and Puritanism in Tudor and Early Stuart England*. Exeter: U of Exeter Press; 145-6, 2011.
- 9) 中房敏朗：中世から近代へー「ルードゥス」から「スポーツ」への道のり，スポーツの世界史，一色出版，東京，28-9，2018。
- 10) Currell, David: Milton’s Epic Games: War and Recreation in *Paradise Lost*. *Games and War in Early Modern English Literature: From Shakespeare to Swift*. Amsterdam: Amsterdam University Press; 73-93, 2019.
- 11) Milton, John: *The Works of John Milton*. General editor, Frank Allen Patterson, 23 vols, Tokyo: Hon-no-tomoshia; 1993.
- 12) “deport”, “disport”. *The Oxford English Dictionary*, 2nd. ed., vol. IV, Oxford UP, Oxford; 1991. “sport”. *The Oxford English Dictionary*, 2nd. ed., vol. XVI, Oxford UP, Oxford; 1991.
- 13) 南出康世：OED覚え書き，女子大文学，2005，6：5。http://doi.org/10.24729/00011020. November 1. 2019.
- 14) 寺澤盾：英単語の世界。中央公論新社，東京，4，2016。
- 15) 阿部生雄他編：21世紀スポーツ大事典。大修館書店，東京，5-7，2015。
- 16) 中房敏朗：中世から近代へー「ルードゥス」から「スポーツ」への道のり，スポーツの世界史，一色出版，東京，23-52，2018。
- 17) Dougal, Alistair: *The Devil’s Book: Charles I, the Book of Sports and Puritanism in Tudor and Early Stuart England*. Exeter: U of Exeter Press; 167, 2011.
- 18) Brailsford, Dennis: *Sport and Society: Elizabeth to Anne*. London: Routledge & Kegan Paul; 133, 1969.
- 19) Brailsford, Dennis: *Sport and Society: Elizabeth to*

xii イディオム内の“sport”は名詞ではあるが、動詞句として用いられていることから、当該箇所のネガティブな意味が、動詞句から生じる意味であるのかについて、今後検証する必要がある。

- Anne*. London: Routledge & Kegan Paul; 127-33, 1969.
- 20) Brailsford, Dennis: *Sport and Society: Elizabeth to Anne*. London: Routledge & Kegan Paul; 127-33, 1969.
- 21) McGuire, Maryann Cale: *Milton's Puritan Masque*. Athens: U of Georgia P; 10-5, 1983.
- 22) 新井明 : ミルトンの世界－叙事詩性の軌跡, 研究社, 東京, 270-1, 1980.
- 23) Nicolson, Marjorie Hope: *A Reader's Guide to John Milton*. New York: Syracuse UP; 53, 1998. 新井明 : ミルトンの世界－叙事詩性の軌跡, 研究社, 東京, 60, 1980. Teskey, Gordon: *The Oxford Handbook of Milton*. Oxford: Oxford UP; 75-86, 2009.
- 24) “sport”. *The Oxford English Dictionary*, 2nd. ed., vol. XVI, Oxford UP, Oxford; 1991.
- 25) Welsford, Enid: *The Court Masque: A Study in the Relationship between Poetry & the Revels*. Cambridge: Cambridge UP; 317, 2015.
- 26) Milton, John: *Reason of Church-government. Complete Prose Works of John Milton, vol. I*, edited by Ralph A. Haug, New Haven: Yale UP; 819, 1953.
- 27) ミルトン, ジョン : 教会統治の理由. 新井明・田中浩訳, 未来社, 東京, 150, 1986.
- 28) 「ペリシテ」 : キリスト教大事典. 教文館, 東京, 1983.
- 29) 「ペリシテ人」 : 岩波 キリスト教辞典. 岩波書店, 東京, 2008.
- 30) Hall, Joseph: *An Humble Remonstrance to the High Court of Parliament*. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum Ltd.; 37-8, 1970.
- 31) Milton, John: *Colasterion. Complete Prose Works of John Milton, vol. II*, edited by Lowell W. Coolidge, New Haven: Yale UP; 757, 1959.
- 32) “sport”. *The Oxford English Dictionary*, 2nd. ed., vol. XVI, Oxford UP, Oxford; 1991.

遊び, 非難, 残忍さ

— John Miltonの作品における“sport” (後編) —

“Play”, “Criticism”, and “Inhumanity”:

The Usage of “Sport” in the Works of John Milton

桶田 由衣^aYui Oketa^a

6. 墮落したものへの制裁の例

本節では, “the sport of winds” 「風に弄ばれるもの」
として使用された *Paradise Lost* の 2 例に注目する。
Paradise Lost は第12巻から成り, 旧約聖書「創世記」
第3章をもとにした作品で, 天界でのSatanを筆頭と
した墮天使たちによる反逆, 神の天地創造, Satanに
よる復讐, AdamとEveの墮落そして楽園追放がテー
マである。(i) は, 第2巻からの例で, 神に反旗を翻
して地獄に落とされた墮天使たちが, 再び神に対して
戦いを挑むかという議論の中で認められる。

… while we perhaps

Designing or exhorting glorious warr,
Caught in a fierie Tempest shall be hurl'd
Each on his rock transfixt, the sport and prey
Of racking whirlwinds, or for ever sunk
Under yon boyling Ocean, wrapt in Chains:

(*Paradise Lost* 2.178-83)

墮天使Belialが, 神に挑んだ結果, 灼熱の嵐に巻き込
まれ, 過酷な風に“sport” 「もてあそばれる」 だろう
と消極的な意見を述べている。“the sport ... Of rack-
ing whirlwinds” は, 神による墮天使たちへの制裁であ
ると考えられる。なお, 上記の“sport” は, *OED* の
2nd ed.における “That with which one plays or sports;
that which forms the sport of some thing or person.

That which is driven or whirled about by the wind or
waves as in sport.¹⁾ の語義の初出例であり, この語義
の先駆的な例の1つであると言える。

(j) もローマ・カトリック教の墮落した側面をMilton
は非難している。Satanが神への復讐のために地球へ向
かう途中, 次のような風が巻き起こるのを目にする。

…; then might ye see

Cowles, Hoods and Habits with thir wearers tost
And flutterd into Raggs, then Reliques, Beads,
Indulgences, Dispenses, Pardons, Bulls,
The sport of Winds: (*Paradise Lost* 3.489-93)

風に吹き飛ばされているものは, “Indulgences” 「免罪
符」といったローマ・カトリック教に関するもので,
当該箇所はローマ・カトリック教への風刺だと言われ
ている²⁾。これらが風に飛ばされている様子を“sport”
「もてあそばれる」というのである。

上記2例から, “sport” が墮落したものへの制裁の
描写で用いられていることがわかる。Currell³⁾ も上記
2例を挙げて, “sport” を好むものが墮落と関連づけ
られ, それらが神による風に吹き飛ばされるという皮
肉を描いていると述べているが, “wind” と “sport” を
合わせた表現が, *Paradise Lost* 以外の作品にはない点
を指摘しておらず, 本作における特異な例であることを
追記したい。

本稿は, 2019年7月20日, 令和元年度日本大学学部連携ポスターセッションにおけるポスター発表「ジョン・ミルトンの作品の言葉の分析」に大幅な加筆修正を施したものである。

^a 日本大学スポーツ科学部
College of Sports Sciences, Nihon University

7. 残忍な場面と関連づけられる「娯楽」「遊び」の例

本節で扱う“sport”は、政権交代の最中、逮捕状が出され、著書の焼きすて命令も出されたMiltonにとって苦難だった王政復古後に出版された作品が中心となっている。(k)の*History of Britain*は、古代ローマ人とブリトン人の争いに関連した場面である。“The Britans in Companies and Squadrons were every where shouting and swarming, such a multitude as at other time never; no less reckon’d then 200 and 30 thousand, so feirce and confident of Victorie, that thir Wives also came in Waggons to sit and behold the sport, as they made full account, of killing *Romans*.” (*History of Britain* 67) ブリトン人がローマ人を殺害したことで歓喜に沸く様子をブリトン人の女性が“sport”「娯楽」として見ているのである。こうした殺戮という残酷な行為によって生じた歓喜の場面で“sport”が用いられている。

同作品の(l)は、1000年頃のデー人への襲来の場面である。“..., they took part of it and burnt it [=Canterbury], committing all sorts of massacher as a sport;” (*History of Britain* 263) デー人は、カンタベリーに向かい、大虐殺を「娯楽」のごとく起こしていたという。*History of Britain*の上記2例は、流血沙汰の争いに関連した場面で“sport”を使用しているといえる。

次の(n)は、ChristとSatanとの論争がテーマの*Paradise Regain’d* (1671)のSatanがChristを誘惑する場面である。SatanはChristに国を授けようと誘惑するものの、その国民の墮落ぶりをChristに指摘される。“Then cruel, by thir sports to blood enur’d / Of fighting beasts, and men to beasts expos’d, / Luxurious by thir wealth, greedier still, / And from the daily Scene effeminate.” (*Paradise Regain’d* 4.139-42) 獣同士や獣と人を争わせることを“sport”として、人々が流血沙汰を見慣れるほど墮落しているとChristはいう。Christが磔刑に処される前であることを考えると、

*History of Britain*同様、1000年頃までの人間が血生臭い行為を娯楽としていたことは明らかである。

(k), (l), (n)は、流血の伴う争いに関連する場面で“sport”を用いられている。いずれの作品も1000年頃の話であり、当時の残虐な争いと娯楽は表裏一体の関係であったと言える。Huizinga⁴⁾は流血沙汰であったとしても、かつて争いと遊びは区別し難い関係であったと指摘しており、特に(l)と(n)は両方とも取れる描写である。ⁱ

(p)の*Samson Agonistes*は、投獄されたSamsonが、敵のペリシテ人の異教神Dagonの祝祭日に余興をするよう強要される場面での使用例である。ⁱⁱ “The Feast and noon grew high, and Sacrifice / Had fill’d thir hearts with mirth, high chear, & wine, / When to thir sports they turn’d.” (*Samson Agonistes* 1612-4) 人々が娯楽や酒に満足していた時に、Samsonが力技を見せる余興を始めるのだが、これから始まるSamsonによる演技や試合などの一連の見世物を“sport”と表現している。当該箇所は、広義では「娯楽」ではあるが、文脈から考えると“sport”は「見世物」を指すといえる。

最後に*Samson Agonistes*からの(q)に注目したい。Samsonがその力技を見せるために、2本の柱を倒した結果、観客の祭司や淑女などの頭上に柱が落ち、Samsonもそこにいた全ての者も命を落とした。その惨状は次のように語られる。“They only set on sport and play / Unweetingly importun’d / Thir own destruction to come speedy upon them.” (*Samson Agonistes* 1679-81) 観客は、“sport and play”「娯楽」や「遊び」に気をとられている間に命を落としたと述べており、自分たちが招いた行為で死を招くことになったという。当該箇所の“sport”は、(p)で言及したSamsonによる力技を示す余興を含めた一連の見世物などを指し、こうした娯楽に興じてばかりでは、身を亡ぼすことを示していると考えられる。(p), (q)は、奴隷のような人間を見て楽しむ様子を“sport”を使って表現しており、血は流さずとも人が苦しめられ、貶められるような場面でMiltonは“sport”を用いている。

i Huizinga⁵⁾は、ドイツ語原文で「遊び」の英訳を“play”としているが、特に(l)はHuizingaの「遊び」の理論に通ずるものである。

ii Dagonの祝祭日には、見世物、試合などが繰り広げられるという⁶⁾。ピューリタンが、娯楽に興じる人々のモラルの破綻する様子を非難していたように、*Samson Agonistes*のペリシテ人らの祝祭の場面は、当時のこうしたモラルの破綻した様子を描写しているとMcGuire⁷⁾は指摘する。

8. 考察

Miltonの“sport”の使用例の特徴は、次のように結論づけられる。Miltonは墮落した状況や人々を非難する時に“sport”を使用することが多い。しかし、その使い方も以下のように時代と共に変化していった。

・前期（主に1640年代以前）：A, B

Miltonが共和政府に関与する以前の作品の内、主に初期の韻文作品と散文作品の使用例であるAとBにおいては、限定的な状況下での適切な娯楽に関する言及が多く読みとれた。

・中期（主に1640年代）：C

A, Bと同様に、CもMiltonが共和政府に関与する以前の作品ではあるが、主に韻文作品の中で、望ましくない娯楽や特定の人物を直接非難する場合に、Miltonは“sport”を使用していた。

・後期（主に1660年以降）：D, E

主に王政復古後の作品が多くみられたD, Eにおいては、“sport”が残虐な場面で用いられるという王政復古前の作品にはあまり見られない特徴が見られた。Miltonは特定の人物の直接的な非難を避けつつ、残忍さと娯楽が表裏一体の描写の際に“sport”を使用した。それは王政復古後に出版する書物に全て検閲が入ったため、直接的な非難を避ける傾向にあったと考えられる⁸⁾。その代わりに、聖書を題材とした作品を用いて、再び娯楽を容認した君主制とそれに興じる者に間接的に非難するように執筆したと考えられる。

また、検証した全17例の中で、*OED*の2nd ed.の“sport”の語義の使用例として、Miltonの作品が3例列挙されており、“sport”の語義やその変遷を見る上で、Miltonの作品を検証する意義があるといえる。本論は、“sport”に限定した検証を行ったが、類語として“pastime”, “diversion”, “recreation”, “game”, “play”などがあり、類語も含めた検証も今後必要である。1例を挙げると、現状の考察によれば、“recreation”は、適切な娯楽を議論する際にMiltonが使用し

ており、Miltonが単語を使い分けていた可能性がある。

おわりに

Miltonが「遊び」や「娯楽」に批判的であったことは、従来の研究と同様であった。しかしながら、本研究で得られた知見は、「スポーツ」よりも多義的な“sport”の語義や意味の変遷を理解するために、Miltonの作品は有益であること、自身の論敵や墮落した状況を批判する場面で“sport”を使用していること、そして王政復古後の作品においては、Huizingaの指摘のように、争いと娯楽の区別できない時代の人間の残虐な行いをMiltonは“sport”を用いて表現していたことが挙げられる。Miltonの作品研究を始めとして、文学作品研究は、“sport”の意味を知る上で一助となりえるだろう。

引証資料

- 1) “sport”. *The Oxford English Dictionary*, 2nd. ed., vol. XVI, Oxford UP, Oxford; 1991.
- 2) ミルトン, ジョン: 楽園の喪失, 新井明訳, 大修館書店, 東京, 79, 1983.
- 3) Currell, David: Milton’s Epic Games: War and Recreation in *Paradise Lost*. *Games and War in Early Modern English Literature: From Shakespeare to Swift*. Amsterdam: Amsterdam University Press; 82, 2019.
- 4) Huizinga, Johan: *Homo Ludens: A Study of the Play-Element in Culture*, translated by R.F.G. Hull, London: Routledge; 40-1, 1999.
- 5) Huizinga, Johan: *Homo Ludens: Vom Ursprung der Kultur in Spiel*, Hamburg: Rowohlt; 44, 1956.
- 6) Milton, John: *Samson Agonistes*. *The Works of John Milton*. General editor, Frank Allen Patterson, vol 1, part II, Tokyo: Hon-no-tomosha; 1993: 1311-2.
- 7) McGuire, Maryann Cale: *Milton’s Puritan Masque*. Athens: U of Georgia P; 57, 1983.
- 8) Wilson, Hugh: The Publication of *Paradise Lost*, The Occasion of the First Edition: Censorship and Resistance. *Milton Studies*. 1999; 37: 18-41.

ピンポン外交と日本の役割についての考察(前編)

A Study of Ping Pong Diplomacy and Japan's Role

日吉 秀松^a

Hidematsu Hiyoshi^a

Abstract

This paper is a study of the relationship between the realization of ping pong diplomacy between China and the United States and the efforts of various circles on the Japanese side. In March 1971, the 31st World Table Tennis Championships were held in Nagoya, Aichi, Japan. There, the contact between U.S. and Chinese table tennis players and the subsequent visit of U.S. players to China had a significant impact on the improvement of U.S.-China relations.

The improvement in U.S.-China relations can be attributed to the efforts of various parties, but without the ping pong diplomacy between Japan and China, which was the result of efforts by Japanese parties, the Chinese table tennis team would not have participated in the Nagoya tournament and there would have been no ping pong diplomacy between the U.S. and China. Therefore, it is important to understand that the U.S. and China have a long history of playing ping pong. Subsequently, it is no exaggeration to say that the ping pong diplomacy between the U.S. and China was brought about by the ping pong diplomacy between Japan and China.

Key words: Ping-pong diplomacy, Japan, Goto Koji, Zhou Enlai, Richard Nixon

ピンポン外交, 日本, 後藤鉦二, 周恩来, アメリカ卓球選手

はじめに

スポーツと政治は無関係であると言われる。しかし、実際には人間社会の諸現象が常に政治と結びつけられ、スポーツもその影響を強く受けていることは明白である。これまでもスポーツが政治に利用されるといったことがしばしば見られてる。例えば、1956年にメルボルンで開かれたオリンピック大会開会式の2週間前に、エジプトがイスラエルに侵攻され、スエズ運河が英仏軍によって占領されたが、このことに対してエジプト、イラク、それにレバノンの3カ国が抗議をしてこの大会への不参加を表明している。その後続いて起こったハンガリー事件に対しても抗議するため、スペイン、オランダ、スイスの3カ国がこの大会をボイコットしている¹⁾。このように政治的な理由から重要なスポーツイベントへの参加が拒否されているのである。しかし、こうした参加拒否がなされた一方で、同じ政治的な理由でスポーツイベントに参加して

いる例もあった。50年前に、ピンポンが仲立ちして行われた外交がその1例として挙げられよう。

50年前の1972年2月21日に、リチャード・ニクソンが中国を訪問しているが、この訪問によって資本主義の総本山であるアメリカとアジアの共産主義大国である中国の緊張関係を改善することに大きな一歩を踏み出し、その後の米中両国の国交樹立に向けて貴重な条件と和解の環境を提供したと考えられる。当時アメリカはベトナム戦争の泥沼から一早くも抜け出したいと考えており、中国も同様に共産主義の総本山だったソ連の脅威をから逃れたいと考えていた。こうした状況下で、ソ連という共通の敵に直面していた本来の敵国同士が手を固く握りあい、歴史的な和解が図られた。この歴史的な和解をもたらしたのが後に「ピンポン外交」といわれている外交の動きであった。

プロレタリア文化大革命(以下文革)という政治の嵐が吹き荒れ、第29回、第30回の世界選手権大会を欠場した中国卓球チームだったが、1971年3月28日

『スポーツ科学研究』投稿規定の文字数制限により、本報告は(前編)、(後編)に分割する。

^a 日本大学スポーツ科学部
College of Sports Sciences, Nihon University

から4月7日にかけて名古屋市の愛知県体育館で開かれた第31回世界卓球選手権大会（以下名古屋大会）に参加した。中国卓球チームがこうして2大会ぶりに参加できたのは、米中両国の接近と日本側の努力によるものであった。

1. ピンポン外交に関する先行研究としての回顧録

ピンポン外交については世界中でよく知られてはいるが、そのことに関する研究はそれほど多くはない。現在、当時を窺い知る資料では回顧録がある。例えば、森武氏の著作『ピンポン外交の軌跡—東京、北京、そして名古屋』では、中国の卓球チームを名古屋大会に招待しようとした日本側の絶え間ない努力について語られている²⁾。このほかに通訳を通じて日中交流現場の状況を語ってくれたのが周斌と江培柱であった。周斌が著した『私は中国の指導者の通訳だった：日中外交 最後の証言』では、周恩来とスター選手である松崎キミ代との交流や名古屋大会の参加に関する日中間の動きについて詳しく紹介されており、その様子が伺える³⁾。中国卓球チームに同行した江培柱が著した『江培柱文存：対日外交台前幕後の思考』では、中国卓球チームとアメリカ卓球チームが接触する様子やアメリカ卓球チームが訪中をどのように受け入れられたかを回顧するなど、名古屋大会に出場した際に中国側から出された指示や連絡方法が比較的詳しく語られている⁴⁾。銭江の『米中外交秘録：ピンポン外交始末記』では、名古屋大会に参加した中国側の決定プロセスやピンポン外交の経緯について詳しく述べられている⁵⁾。唐灝の著した『乒乓外交高層内幕（ピンポン外交における上層部の決定内幕）』とすべきでは、アメリカチームの訪中要請を受け入れる決定プロセスに触れている⁶⁾。こうした森、周、江、銭、唐の5氏による回顧録や著作は、ピンポン外交の研究に貴重な歴史的資料を提供してくれたといえる。

そのほか、ニコラス・グリフィン著の『ピンポン外交の陰にいたスパイ』では、イギリスの貴族出身で、元国際卓球連盟会長であるアイヴァー・モンタギューが卓球選手のみならず、ソ連のスパイでもあったと指摘しているが、卓球の元中国代表選手へのインタビューを通じてピンポン外交を詳しく検証している点では、学術的な価値ある貴重な書物の一冊であるといえよう⁷⁾。

そして、鄭躍慶の論文「ピンポン外交と後藤鉦二」では、名古屋大会に中国チームを招待するに当たって、「台湾問題」という難題に直面し、当時日本卓球連盟の会長であった後藤鉦二がいかにして日本と国交のなかった中国政府を説得したかについて論じている⁸⁾。以上の書物や論文はそれぞれの角度や視点からピンポン外交を回想し、ピンポン外交を歴史的観点から検証した数少ない貴重な資料であるといえよう。本稿は、こうした回顧録や論文、それに日本で報道された当時の新聞記事などを基にして、スポーツと政治の関係、およびピンポン外交における日本が果たした役割について考察を試みたものである。

2. ピンポン外交の背景

中国とソ連は共に共産主義国家であるが、50年代後半になるとその関係が急速に悪化した。その原因は、フルシチョフがスターリン批判をし始め、外交政策の転換を図ったことと、毛沢東が世界共産主義のリーダーになろうとする意欲を見せたことにあった。このことについては、元北朝鮮の高官である黄長燁は回顧録のなかで次のように語っている⁹⁾。

中国は1956年、ハンガリーで反政府暴動が起こった理由を、フルシチョフがスターリンの個人崇拜を批判し、無産階級独裁を弱める修正主義路線を強要した結果だと断定し、反修正主義の方針を強く打ち出した。こうして国際共産主義の指導権が、ソ連から中国に移りそうな印象を与えた。

また、中国の冷戦研究家である華東師範大学の沈志華教授も次のように指摘している¹⁰⁾。

1950年代中期以後、…（中略）…ソ連共産党が第20回党大会で「自己批判」を行ったことは、疑いなくモスクワの威信を大きく低下させ、同盟国におけるソ連の地位を動揺させたのに対し、中国共産党は日増しに台頭し、特に第一次5か年計画の順調な完成とポーランド・ハンガリー事件の処理に参与し成功を収めたことは、人類の未来に対する発展にさらに大きな責任を引き受けるべきだと、毛沢東に感じさせた。

毛沢東は共産主義世界の領袖になろうとしている意図をもって、フルシチョフのスターリン批判に異議を唱え、その権威に挑んだ。1956年3月23日夜、毛沢東は中南海にある邸宅で開いた中共中央書記処拡大会議の主宰を務め、フルシチョフの秘密報告や中共の対策について議論させた¹¹⁾が、この議論の中で、毛沢東は「スターリンは重大な過ちを犯しはしたが、その一方、偉大な功績も残している。一部マルクス主義の原則に違反はしているものの、依然として偉大なマルクス主義者であったといえよう。彼の著作は過ちも見られるが、我々にとって依然として学ぶ価値がある。… (中略) …フルシチョフの秘密報告の過ちについては、我々ができるだけ補完していくべきである」¹²⁾とスターリンを擁護し、フルシチョフを批判している。

この後、中ソ間の関係は悪化の一途を辿ることになったことで、中国は北朝鮮を含む他の社会主義国家に敬遠されるようになり、孤立した。1968年チェコスロバキアで「プラハの春」と呼ばれた改革運動が起こったが、これはソ連のブレジネフの社会主義国家「制限主権論」によって軍事介入がなされて挫折した。このことによって中国はブレジネフの制限主権論に警戒心を抱くようになった。1969年3月2日にはソ連との国境にある珍宝島へのソ連軍の侵入事件があり、さらに「8月に新疆ウイグル自治区に侵入して、国境警備兵40人くらいを殺してしまう事件があった」¹³⁾。こうして中ソは激しい武力衝突までに発展した。ここに来て、かつての同盟国だったソ連は中国にとって脅威の存在となった。

その一方で、1949年に革命を成功させて建国した中国は国民党政府を支持するアメリカと対立しており、その関係は1972年にニクソン大統領が中国を訪問するまで敵対する状況に置かれた。したがって、60年代以降の中国はアメリカとソ連という2大国と敵対関係にあって、国際社会では孤立していたのである。

1964年、アメリカがベトナムへの大規模な軍事介入することとなったが、戦争の泥沼に陥った。アメリカ国内では長引く戦争に対する反戦の声が高まり、政府への批判が強まった。アメリカ政府はこうしたベトナムへの軍事介入と国内の反戦ムードの間のジレンマを打開しようと模索している中で発表したのが、1967年ニクソン大統領の「ベトナム後のアジア」¹⁴⁾という

論文だった。彼はこの中で中国との付き合い方について、その考え方を見直す必要があると述べている。毛沢東はこの論文に最も大きな興味を示し、「ニクソンが大統領に当選したら米国の対中政策は調整されるかもしれない。このニクソンの論文から、米国のベトナム戦争で被ったダメージが透けて見えるようだ」¹⁵⁾と述べた。

ベトナム戦争の泥沼から必死に抜け出そうともがいていたアメリカは、北ベトナムの重要なパートナーとなっていた中国の協力が必要であるとし、中国に対してエールを送り始めた。ニクソンは「ソヴィエトが中国の国境を侵犯することは米国の利益に反するというメッセージ」¹⁶⁾をソ連に送った。続いて1971年3月15日にアメリカは対中旅行制限の撤廃を発表した。このことによってアメリカ卓球チームや一般市民による自由な中国旅行が可能となり、アメリカとの中国の関係に大きな変化をもたらした。

3. 米中接近の幕開き

アメリカと中国という2国間にこうした雪解けの兆しが見え始めた中で、アメリカはさらに関係改善を図ろうとして積極的な態度を見せ始めた。1970年10月「ニクソンはパキスタンのヤヒヤ・カーン大統領に、アメリカが高レベルの特使を北京に派遣する用意があると中国へ伝えてくれるよう頼んだ。12月初めに周恩来から特使を歓迎するとの返事が届いた」¹⁷⁾。こうして、「毛沢東がソ連に対し『アメリカ・カード』を（そしてニクソンにとっては『中国カード』を）切る機が熟した」¹⁸⁾のである。また、毛沢東と親交あったアメリカの記者エドガー・スノーが1970年10月1日に中国の国慶節に参加し、12月18日に毛沢東と中南海で再会している。この再会で、毛沢東はエドガー・スノーとの談話の中で文革について語り、その後、米中関係の話に変わり、さらにニクソンと会談する用意があることを伝えた¹⁹⁾。

わたしは民主党より共和党の方が良いと思っている。ニクソンが大統領になるのは大歓迎だ。彼には欺瞞的な点が見られなくはないが、他の者に比べるとずっとましだ。… (中略) …もし彼が北京に来たいというのなら、飛行機でこっそりやっ

て来られると良いと伝えて欲しい。交渉がうまくいくかどうかは問題ではない。それにこだわる必要もないだろうさ。

ただ、毛沢東とエドガー・スノーの会談の内容が『人民日報』を通じて公表された時にアメリカ側には大きな反応が見られなかった。それは、「おそらくニクソンのホワイトハウスがスノーを信用していなかったからだろう」²⁰⁾と思われるが、毛沢東はこの後もアメリカに対してエールを送り続けている。本論文で扱うピンポン外交もそのエールの1つである。

4. ピンポン外交に対する中国の動き

アメリカと中国の関係改善は日中関係の変化とも関連している。それはアメリカと中国の間のピンポン外交以前に、中国と日本の間では既にピンポン外交が展開されていたからも窺い知ることができる。

日中間のピンポン外交は、1956年の東京世界選手権大会に始まる。中国卓球チームは男子団体で3位の好成績を納め、これを機に国交のない日本を舞台にして国際社会への復帰を図ったといえよう。そしてその後、1961年に世界卓球選手権大会が北京で開催されることが決まった。「時の中国政府、特に周恩来総理は、卓球こそが中国の国際復帰を推し進める得策種目として着目したようである」²¹⁾。北京世界卓球選手権大会後の日本は、「選手団帰国後、日本卓球協会に報告され、協議の結果、北京世界の翌年1967月に日本選手団の訪中、10月には中国代表団が来日することが決定され、日中交歓卓球大会がスタートすることになっていくのである」²²⁾。以後国交のなかった国同士はさまざまな困難を克服して乗り越え、卓球を通じた交流を深めることになったが、この動きはバレーなど他のスポーツにも波及した。しかし、こうした盛り上がりを見せたスポーツや文化交流の気運も、中国で吹き荒れた文革という政治運動のため、一旦中止せざるを得なくなってしまった。1970年になってようやく中国が混乱期から少しずつ正常に戻ろうとする姿勢を見せ始め、同年10月7日に周恩来はカンボジアのシハヌーク国王と会見する際、毛沢東の「中間地帯」論を紹介した。これはアジア、アフリカ、ラテンアメリカを第1の中間地帯とし、フランス、イタリア、イギリ

ス、日本などアメリカ以外の先進国を第2の中間地帯に分類するというものであった²³⁾。この「中間地帯」論は、後に「3つの世界」理論に発展するが、その基礎的な考えとなるものであった。中国はこの「中間地帯」論にしたがって第2の中間地帯に属する国々との関係を改善し、強化する用意があることを表明した。そして周恩来は中国を訪れていた日中文化交流協会代表団の中島健蔵団長と会い、中日卓球親善試合に日本の選手を中国に招待すると告げた²⁴⁾。周恩来はまた同時に、中島に対して確実な実行を可能にさせるため、「日本卓球協会の後藤鉀二²⁵⁾会長を味方に引き入れる作業をしっかりと行なうよう、より明確に示唆した」²⁶⁾。（「ピンポン外交と日本の役割についての考察（後編）」へ続く）

脚注

- 1) デイビッド・ゴールドブラット：志村昌子・二木夢子訳 オリンピック全史。原書房、東京、205、2018。
- 2) 森武：ピンポン外交の軌跡—東京、北京、そして名古屋。ゆいぼおと、名古屋、2015。
- 3) 周斌：加藤千洋・鹿雪瑩訳 私は中国の指導者の通訳だった—中日外交最後の証言。岩波書店、東京、2015。
- 4) 江培柱：江培柱文存—対日外交台前幕後の思考。社会科学文献出版社、北京、2013。
- 5) 銭江：神崎勇夫訳 米中外交秘録—ピンポン外交始末記。東方書店、東京、1988。
- 6) 唐灝：乒乓外交高層内幕。当代中国出版社、北京、2012。
- 7) ニコラス・グリフィン：五十嵐加奈子訳 ピンポン外交の陰にいたスパイ。柏書房、東京、2015。
- 8) 鄭躍慶：ピンポン外交と後藤鉀二。愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告、愛知淑徳大学大学院現代社会研究科、2007年。
- 9) 黄長燁：萩原遼訳 黄長燁回顧録—金正日への宣戦布告。文藝春秋、東京、146、1999。
- 10) 沈志華：真水康樹・諸橋邦彦訳 中ソ同盟の決裂—原因と結果。法政理論、新潟大学法学会、第40巻第2号、240、2007。

- 11) 中共中央文献研究室：毛沢東年譜（1949-1976）
第2巻. 中央文献出版社, 北京, 549, 2014.
- 12) 中共中央文献研究室：前掲書. 550.
- 13) 牛軍：真水康樹訳 米中関係と東アジア冷戦. 法
政理論, 新潟大学法学会, 第51巻第3・4号,
91-92, 2019.
- 14) ニクソン：ベトナム後のアジア ニクソン論文.
防衛研修所, 東京, 1969.
- 15) 牛軍：前掲論文. 89.
- 16) 牛軍：前掲論文. 92.
- 17) ロデリック・マクファーカー・マイケル・シェー
ンハルス：朝倉和子訳 毛沢東最後の革命
（下）. 青灯社, 東京, 117, 2010.
- 18) ロデリック・マクファーカー・マイケル・シェー
ンハルス：前掲書. 117.
- 19) 中共中央文献研究室：毛沢東年譜（1949-1976）
第6巻. 中央文献出版社, 北京, 359, 2013.
- 20) ロデリック・マクファーカー・マイケル・
シェーンハルス：前掲書. 117.
- 21) 森武：前掲書. 10.
- 22) 森武：前掲書. 12.
- 23) 中共中央文献研究室：周恩来年譜（1949-1976）
下巻. 中央文献出版社, 北京, 399, 1997.
- 24) 同22)
- 25) 当時, 愛知工業大学学長で, 日本卓球協会会長で
あった.
- 26) 周斌：前掲書. 78.

ピンポン外交と日本の役割についての考察（後編）

A Study of Ping Pong Diplomacy and Japan's Role

日吉 秀松^a

Hidematsu Hiyoshi^a

5. ピンポン外交における日本の尽力

ネパール皇太子の結婚を祝うためにカトマンズの宮殿で開かれたエキシビジョンゲームに中国卓球チームを参加させたという報道に日本卓球連盟会長である後藤鉦二は注目したが¹⁾、彼には心配の種があった。つまり、「1つ目は文革によって、中国の卓球代表団は第29回と30回世界卓球選手権大会に不参加で、この2大会では日本が優勝した。もし第31回大会に中国チームが参加すれば、第26, 27, 28回大会と同様、また中国チームの独り勝ちとなる可能性が高い。彼は日本の世論と卓球界がこのことを受け入れられるかどうか心配していた。2つ目は、中国の冷遇を受けるかもしれないことであった。中国チームが来ないだけでなく、自分の立場もなくなってしまうのではないかと心配していた」²⁾。

しかし、こうした不安を抱いていた後藤も結局中国チームを招待する決意をしたことが、1970年12月31日の『毎日新聞』の紙上で³⁾明らかにされている。後藤のこの決意に対して中国側は一早く反応を見せ、後藤の訪中を要請した。中国側のこの要請を受け入れて後藤は1971年1月24日に羽田から北京入りしている。

周知の通り、中国の対外政策には、「1つの中国」という譲れない原則がある。後藤もそれを理解しており、彼が中国側に手渡した日本語の会談紀要草案には、台湾問題に関する「『日中関係政治三原則』⁴⁾を順守するという記述」⁵⁾があった。

後藤のこうした動向に対し、当然台湾側からの圧力があつた。台湾の圧力に対して、後藤は「どうか、中国卓球協会はなるべく早く大会参加の申し込みをして

ください。…（中略）…もし今度、日本と中国の卓球協会が会談紀要にサインすることになれば、私はすぐシンガポールで開かれるアジア卓球連盟総会へ出向かいて連盟の整頓（台湾追放と中国加盟）に関する動議を出します」⁶⁾と述べ、第31回世界卓球選手権大会（以下、名古屋大会）に参加するように中国側を促した。そして、この動議が通らない場合は直ちにアジア卓球連盟会長を辞任する決意を表明した⁷⁾。後藤の決意の背景には、日中両国の経済関係がますます密接な関係となり、国交回復の交渉も一段と加速していた状況があつたということが考えられる。

1971年2月13日から北京で、藤山愛一郎や岡崎嘉平太によって、中国政府との貿易や政治交渉が行われ、貿易政治コミュニケが発表された。日中間の貿易が増大していくにつれ、日本の中国に対する依存度も大きくなっていった。『毎日新聞』の報道によると1970年には日本の鉄鋼の中国向けの輸出は25%も伸び、反対に対米シェアが低下したという⁸⁾。これを見ても、当時の日本経済が中国市場への拡大を目指そうとしていたことが理解できる。

こうした両国関係の現状を背景にして、中国卓球チームの名古屋大会への参加が後藤の強い熱意によって促されたが、中国も卓球を通じて国際社会への復帰を図り、アメリカ卓球チームとの接触を図ろうとしていた。後藤と周恩来の協力に基づいた日中間のピンポン外交が、その後の中国とアメリカの人的交流を加速させた。

1971年3月、名古屋大会で中国卓球チームとアメリカ卓球チームの接触が見られたのは、決して偶然なものではなく計画通りに演出されたものだった。周恩来

^a 日本大学スポーツ科学部
College of Sports Sciences, Nihon University

の通訳をした周斌はこの時のことを回想し次のように語っている⁹⁾。

(中国卓球チームは：引用者注) 参加する過程において相次いで二つの政治性の強い問題に直面したことを覚えている。1つ目は、万が一、カンボジアのロン・ノル政権が派遣した選手と対戦することになったら、どう対処するかということ。2つ目は、アメリカチームが突然中国訪問を要求した場合、どう対応するべきか、であった。

1つ目のロン・ノル政権のカンボジア選手に対する対応問題は、試合への参加過程ではなく既に事前に決定された事項であったことが、1971年3月15日に周恩来が毛沢東に仰いだ指示内容で明らかにされている¹⁰⁾。

2つ目については、「アメリカのハリソン副団長の話によれば、中国の役員とも総会など接触する機会があり、通常の挨拶を交わすことはもちろん、カナダやイギリスのチームが訪中する話や、機会があれば是非どうぞという程度の社交辞令的な会話はあったようだ。しかし、かといって強い要望がお互いに出たわけでもなかったという。このような経緯の中で中国側はアメリカを招待しようという準備段階に入り、本国の政府担当との話し合いや交渉に入っていくことになったのである¹¹⁾」という。したがって、「アメリカチームが突然中国訪問を要求した場合」という想定には、少なくとも中国側としてもアメリカチームの訪中を受け入れようとしていたと考えられる。しかし、本論文が参考とする中国側の回顧録のほとんどでは、アメリカ卓球チームとの接触や訪中要請はあくまでもアメリカ側が積極的に求めたと主張しているが、それはあまりにも偏った見方であるといえよう。

6. 名古屋大会における中国の政治優先

中国卓球チームの名古屋大会参加の過程は政治とのかかわりが強く、まさに、スポーツと政治は不可分の関係であった。言い換えれば、名古屋大会の前後、中国卓球チームは終始政治を優先していたのである。

先ず、既に前述したが、「1つの中国」という原則論が中国卓球チームの名古屋大会参加に大きく影響し

ている。日本側は中国卓球チームを名古屋大会に招待するに当たって、大きな努力と妥協が強いられている。特に、「1つの中国」という原則は、日中両国の卓球関係者などの交渉にも大きな影響をもたらした。これは「日本卓球協会、日本中国文化交流協会、中華人民共和国卓球協会、中国人民対外友好協会の会談紀要」(以下、会談紀要)の内容をめぐっても、中国側は後藤に対して『台湾は中国の1つの省であり、台湾は中国の神聖な領土である』という字句と中日関係政治3原則を会談紀要の第1条に書き込んでもらわないと困ります¹²⁾と主張した。しかし、後藤はこれに対し「わが国の社会党との会談でもそういう話は持ち出さなかったのではありませんか。なぜ、双方の卓球協会の会談紀要にこいつを押し込まなければいけないんですか¹³⁾」と反論し、卓球交流以外のことを紀要に盛り込まないように主張した。この会談後、後藤は病氣と称して中国側の関係者と会わなかったため、会談は一時中断された。

こうした行き詰まり状態を解消したのはやはり周恩来であった。周恩来は1971年1月29日の午後、中国の外交部や卓球協会の関係者を招集して日中会談に関する報告を聞き、次のように意見を述べている¹⁴⁾。

実質を見るべきだ。形式的論争はやめたまえ。会談の相手は日本卓球協会の会長ではないか。この2月に来ることになっている藤山愛一郎元外相は、日中国交回復促進議員連盟の会長だから、当然、われわれは台湾問題を前面に押し出さなければならない。しかし、後藤先生にはその必要はない。彼に難題を吹っかけるな。中日関係政治3原則は日本側の原案通り第2条でよろしい。第1条にする必要はない。…(中略)…後藤鉀二先生は既に中日関係政治三原則を書き込んでおり、アジア卓連の整頓問題を提起し、台湾は全中国を代表するものではない、と言っている。それで十分ではないか。

周恩来はこのように意見を述べたあと、後藤などとの交渉に臨んだ中国卓球協会の責任者だった宋中と中国人民対外友好協会の呉曉達に「すぐ帰って後藤先生と話し合いなさい。話がまとまったら、今晚、私が会

おう」¹⁵⁾と指示した。宋と呉は、周恩来の指示を受けて再び後藤に会って交渉を再開し、「会談紀要」を纏めた、そして2月1日に調印がなされた。この「会談紀要の骨子」は以下の通りであった¹⁶⁾。

- ①日本卓球協会は、国際卓球連盟憲章を遵守して国際卓球活動の発展を図る。特にアジア卓球連盟は国際卓球連盟憲章にしたがって整頓する。
- ②日本卓球協会は、日中関係政治三原則にもとづいて、日中両国卓球界の友好交流を発展させる。中国卓球協会はこれに対して賞賛と支持の意を表明した。
- ③日本卓球協会は以上の原則にもとづいて、ことし3月28日から4月7日まで日本の名古屋において開催される第31回世界卓球選手権大会への中国卓球チームの参加を招請する。中国卓球協会はこの招きを受けて、卓球チームを派遣し大会に参加する。

この「会談紀要」の調印によって、中国卓球チームの名古屋大会への参加が決定されたが、派遣決定まで、「1つ中国」という原則に翻弄され続けたことも事実であった。

また、名古屋大会に参加した中国卓球チームは、完全に「友好第一、競技第二」¹⁷⁾とする日中両国の友好関係を推進の方針のもとで行動した¹⁸⁾。とりわけ、「友好第一、競技第二」の方針は、文革が終結するまで、スポーツイベントの際によく使われたスローガンともなったが、当時この方針の本質には、多分に政治優先の意味が込められていたともいえよう。

さらに、この名古屋大会では、事前に中国卓球チームは北朝鮮卓球チームに対して試合で譲歩すべきかどうかという議論があったが、周恩来が中国卓球代表団の責任者に対し「朝鮮同志に対して、競技成績を第一義と考えず、困難な状況に置かれている彼らを十分な配慮を払わなければいけない」¹⁹⁾と指示をした。

しかし、個人戦で、「荘則棟、林美群の対カンボジアとの対戦拒否、棄権をしたのである。…(中略)…やはり中国のスポーツは、当時は当然政治優先であったのである。これで荘則棟の復活チャンピオンは消えた」²⁰⁾が、こうした棄権も政治的な配慮がなされての

結果だったのである。名古屋大会における中国卓球チームの行動は、1971年3月15日に周恩来が毛沢東に指示を仰いだ内容そのものであり²¹⁾、また政治や国の外交のためには個人の競技を放棄させることすらしたというのが政治を絶対的に優先させる当時の中国の特徴であったといえよう。

その後中国とアメリカのピンポン交流が実現されるようになったのには、日本卓球協会の努力に無視できないものがあったが、この中国の政治を優先することも無関係ではなかった。中国卓球代表団とアメリカ卓球チームの「偶然」と思える接触²²⁾を機に、「中国側はアメリカを招待しようという準備段階に入り」、ついに1971年4月6日深夜、毛沢東がその招請を決意し、そのことを即刻身邊にいた看護師を通じて外交部に連絡させた。このことによって、敵対してから約30年後の北京で中国とアメリカの卓球選手の交流が始められた。この決定に至る毛沢東の逸話が関係者の回顧録に記されており²³⁾、そこにはまた日本との深い関係があったことも明らかにされている。

毛沢東がアメリカ卓球チームの訪中招請を決定した当日の深夜即時にこの決定が名古屋にいた中国卓球チームにも届いている。この決定は中国から暗号電話を通じ、指示が下された。中国卓球チームは名古屋へ出発する前から、1960年代に愛知大学が編集発刊した当時最新版であった『中日大辞典』を携帯し、これを臨時の暗号帳として使用することによって連絡をとるように指示されていた。「4月6日夜、国内から電話でこの臨時の暗号帳を通じて『中国とアメリカ両国のアスリートと国民の友好関係をより一層深めるため、アメリカ卓球チームを、第31回卓球世界選手権大会終了後、正式に中国へ招請せよ』と伝えられた。そこで、私は慣れ親しんだ「昔ながらの暗号」—すなわち『中日大辞典』を用いた指示にしたがって翻訳し、急ぎ代表団の団長へ、この決定指示の旨を報告した」²⁴⁾と当時の中国卓球選手団の通訳を務めた江培柱が述べている。

おわりに

1971年4月10日、アメリカ卓球代表団の一部選手が香港経由で北京入りした。世界を驚嘆させたこの出来事によって、それまで緊張関係にあった米中関係が

緩和の方向に向かったと考えられる。北京では、当然、「友好第一」を演じ続けていた。4月14日、周恩来はアメリカ卓球代表団に「中、米両国の人民の間は、前から盛んに往来していたが、その後大変長い間往来が途絶えています。あなた方の訪問は両国人民の大多数の賛成と支持を得るに違いないと信じます」²⁵⁾と語った。周恩来の話聞いたアメリカ卓球選手団団長は中国卓球選手団の訪米を要請した。それに対して、周恩来も即座に同意したという²⁶⁾。4月16日、ニクソン大統領が訪中の希望を表明した。また、周恩来とアメリカ卓球代表団の間の約束は、翌年の4月に、つまり、ニクソン大統領が訪中してから1カ月余りで中国卓球代表団の訪米も実現された。この結果卓球選手をはじめ、米中両国の民間交流がなされた。

ニクソン大統領の訪中によって、米中両国の政治関係も新たな局面を迎えるようになった。もちろん、ニクソン訪中が実現されることができたのは、米中両国政府の歩み寄りの姿勢があったことと、アメリカの知識人がニクソン政府に対して米中関係を改善するよう促したことも関係したと考えられる。アメリカの知識人では、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』の著者であるハーバード大学教授のエズラ・ヴォーゲルなどが、1971年4月27日に、ニクソンに米中国交正常化を提言した書簡を送っている。提言の内容は以下の通りであった²⁷⁾。

1) 合衆国は、北京によって統治される1つの中国の統一に向けた台湾と北京の間の合意を妨げないという立場を明確にすること、2) 「2つの中国」よりは「二重代表」という用語を使用すること、および、3) 北京に中国を代表する単独の議席を与えるアルバニア決議案に賛成する国連の採択を、たとえ我々が支持しないとしても、潔く受け入れる立場を表明すること。もしこれらの点を満たせなければ、ひとたび中国の軍力がさらなる発展を遂げたのち、合衆国と中国の間の敵対関係がより一層深まるという重大な危機が予想されます。

米中関係の改善は、各界の関係者による努力によりもたらされた結果であったと考えられるが、日本各界

関係者の努力による日中間のピンポン外交が存在していなければ、中国卓球チームの名古屋大会への参加もなかったであろうし、米中間のピンポン外交も行われなかったであろうと思われる。したがって、米中間のピンポン外交は日中間のピンポン外交によってもたらされたものであると言っても過言ではないであろう。

脚注

-
- 1) 周斌：前掲書。78.
 - 2) 周斌：前掲書。79.
 - 3) 毎日新聞記事の題目：台湾除き中国招く・名古屋で開く世界卓球後藤協会会長が決意
 - 4) いわゆる「日中関係政治三原則」(①中華人民共和国に敵対的な言動を直ちにやめること②二つの中国の陰謀に加わらないこと③日中間の国交正常化を妨げないこと)は1958年に周恩来によって提起されたものである。
 - 5) 銭江：前掲書。17.
 - 6) 銭江：前掲書。18.
 - 7) 銭江：前掲書。18-19.
 - 8) 1971年3月3日毎日新聞。朝刊・14版。
 - 9) 周斌：前掲書。82.
 - 10) 魯光：沈浮莊則棟。人民文学出版社、北京、53-56, 2014.
 - 11) 森武：前掲書。42.
 - 12) 銭江：前掲書。20.
 - 13) 銭江：前掲書。20.
 - 14) 銭江：前掲書。25-26.
 - 15) 銭江：前掲書。25.
 - 16) 森武：前掲書。66.
 - 17) 魯光：前掲書。53-56.
 - 18) 江培柱：前掲書。北京、4, 2013.
 - 19) 周斌：我為周恩来總理当翻譯。天地圖書、香港、84, 2018.
 - 20) 森武：前掲書。40.
 - 21) 魯光：前掲書。53-56.
 - 22) 宿泊先に帰るに遅れたアメリカ卓球選手コーワンがあわてて中国選手の専用バスに乗ったことで、米、中両国選手の交流がスタートしたといわれている。

- 23) 王泰平 編：乒乓外交的回忆. 中央文献出版社,
北京, 160-161, 2011.
- 24) 江培柱：前掲書. 4.
- 25) 森武：前掲書. 50.
- 26) 銭江：前掲書. 170-172.
- 27) エズラ・F・ヴォーゲル・李春利：エズラ・
ヴォーゲル 最後の授業. あるむ, 名古屋,
119, 2021.

2022年度 組織名簿一覧

スポーツ科学研究所員名簿

小山 裕三 教授・学部長・研究所長
 (スポーツ運動学)
 青山 亜紀 教授 (トレーニング学)
 上野 広治 教授 (コーチング学(水泳))
 大嶋 康弘 教授 (スポーツマネジメント)
 河合 一武 教授 (体育方法(サッカー))
 北田 典子 教授 (武道学)
 小松 泰喜 教授 (リハビリテーション医学)
 清水 享 教授
 (中国少数民族の文化・社会・歴史)
 鈴木 典 教授 (コーチング学(スキー))
 種ヶ嶋尚志 教授 (スポーツ心理学)
 西川 大輔 教授 (コーチング学(体操競技))
 日吉 秀松 教授 (政治学)
 布袋屋 浩 教授 (スポーツ医学)
 益子 俊志 教授 (コーチング学(ラグビー))
 森丘 保典 教授 (コーチング学)
 森長 正樹 教授 (コーチング学(陸上競技))
 山崎真紀子 教授 (日本近代文学)
 秋葉 倫史 准教授 (英語学(英語史))

近藤 克之 准教授
 (アダプテッド・スポーツ科学)
 辰田和佳子 准教授 (実践栄養学)
 田中 竹史 准教授 (言語学(英語学))
 谷口 郁生 准教授 (情報教育)
 本道 慎吾 准教授
 (スポーツバイオメカニクス)
 松尾絵梨子 准教授 (運動生理学)
 山本 大 准教授
 (コーチング学(サッカー))
 梅下 新介 専任講師 (英語)
 加藤 幸真 専任講師 (スポーツ社会学)
 小泉 夏子 専任講師 (日本近現代文学)
 澤野 大地 専任講師
 (コーチング学(陸上競技))
 田中 光輝 専任講師 (武道学)
 原 怜来 専任講師 (バイオメカニクス)
 宮内 育大 専任講師 (スポーツ運動学)
 上原 優香 助教 (コーチング学(柔道))
 桶田 由衣 助教 (イギリス文学)

研究倫理審査委員名簿

森丘 保典 委員長・教授
小松 泰喜 副委員長・教授
上野 幸彦 委員・教授
永沼 淳子 委員・教授
上野山晃弘 委員・専任講師
大嶋 康弘 委員・教授
布袋屋 浩 委員・教授
谷口 郁生 委員・准教授
宮内 育大 委員・専任講師
若鍋 昌史 委員・管理マネジメント課課長

日本大学スポーツサポートシステムスタッフ名簿

布袋屋 浩 教授 メディカルサポート メディカルチェック
小松 泰喜 教授 メディカルサポート メディカルケア
小山 裕三 教授・学部長 身体機能評価分析・画像、映像解析
本道 慎吾 准教授 身体機能評価分析・画像、映像解析
宮内 育大 専任講師 身体機能評価分析・画像、映像解析
鈴木 典 教授 トレーニング&コーチングサポート
種ヶ嶋尚志 教授 心理サポート メンタルトレーニング
上野 広治 教授 心理サポート アスリートコンサルテーション
北田 典子 教授 心理サポート アスリートコンサルテーション
西川 大輔 教授 心理サポート アスリートコンサルテーション
森長 正樹 教授 心理サポート アスリートコンサルテーション
澤野 大地 専任講師 心理サポート アスリートコンサルテーション
辰田和佳子 准教授 栄養サポート 栄養サポート
松尾絵梨子 准教授 栄養サポート コンディショニング

2022年度 研究活動実施報告

教育活動（三軒茶屋キャンパスを除く）

大嶋 康弘

- ・甲南大学・ゲスト講師・スポーツと経済（計3回）

小松 泰喜

- ・北海道科学大学・客員教授・中枢神経系理学療法学演習Ⅱ他
- ・工学院大学・先進工学部特別講師・「メディカルエンジニアリング（機械理工学科3年）」講義
- ・立命館大学・スポーツ健康科学部・ゲストスピーカー・「基礎スポーツ医学（神経科学から見た競技スポーツ）」講義（web含む）
- ・埼玉女子短期大学・資格審査委員（研究業績書講評）

清水 享

- ・日本大学大学院総合社会情報研究科・教授
（博士前期課程）：東アジア文化特講・特別研究
（博士後期課程）：東アジア文化特殊研究・特別研究指導
- ・明治大学商学部・兼任講師・初級中国語Ⅲ・Ⅳ，中級中国語Ⅲ・Ⅳ

種ヶ嶋 尚志

- ・日本大学大学院総合社会情報研究科・教授・博士前期課程（スポーツ心理学特論および特別研究）
- ・博士後期課程（健康科学特殊研究および特別研究指導）
- ・日本大学法学部兼任講師（精神分析学）

西川 大輔

- ・日本大学教授・評定競技論

森丘 保典

- ・神奈川衛生学園専門学校・非常勤講師・集中講義「スポーツ組織のマネジメント」「コーチング学」

山崎 眞紀子

- ・日本大学大学院総合社会情報研究科・教授・日本文化論特講Ⅱ・特別研究（ゼミ）

辰田 和佳子

- ・盛岡大学・非常勤講師・運動・スポーツと栄養

谷口 郁生

- ・早稲田大学・非常勤講師・基礎コンピュータ1および基礎コンピュータ5

松尾 絵梨子

- ・日本大学理工学部・兼任講師・スポーツⅠ

山本 大

- ・日本大学理工学部・兼任講師・スポーツⅠ・Ⅱ

加藤 幸真

- ・佐野日本大学短期大学・非常勤講師・キャンプ実習

小泉 夏子（徳永 夏子）

- ・慶應義塾大学・非常勤講師・「国文学演習Ⅸ」「国文学演習Ⅹ」

澤野 大地

- ・ 日本大学・歯学部・特別講義

臨床活動, 各種計測会・トレーニング指導など

布袋屋 浩

- ・ 早稲田大学本庄高等学院スポーツ障害相談会, 早稲田大学本庄高等学院, 第1回2022/06/12, 第2回2022/12/06

山本 大

- ・ 公益財団法人日本サッカー協会公認指導者養成C級・D級およびリフレッシュ講習会講師・埼玉県内各地・2022年4月～2023年3月
- ・ 公益社団法人埼玉県サッカー協会・U12トレーニングセンタースタッフ・SFAフットボールセンター KAZO ヴィレッジほか関東各地・2022年4月～2023年3月
- ・ JFA ガールズフェスティバル2022IN SFA フットボールセンター・メインコーチ・SFA フットボールセンター KAZO ヴィレッジ・2022年11月3日

澤野 大地

- ・ 実施名「競技力強化事業（陸上教室）」・福岡県三潴高等学校・令和4年11月12日

宮内 育大

- ・ 令和4年度 日本陸連U-19中四国ジュニア強化研修合宿コーチ・高知県・2022年12月25日（日）～28日（水）
- ・ 令和4年度 高知県高体連陸上競技専門部強化研修合宿コーチ・高知県・2023年1月4日（水）～6日（金）

公的研究費

小松 泰喜

- ・ 2021年度～2023年度, 科研費基盤研究B, 分担, 「交代制勤務耐性に関わる生理学的基盤とその耐性の増強可能性の解明」, (東京大学)

西川 大輔

- ・ 2021年度～2022年度, 日本大学学術研究助成金(総合研究), 分担, 「iVRTS (Innovative Virtual Reality Training System) を利用したメンタルトレーニング効果の検証」

山崎 眞紀子

- ・ 2019年度～2023年度, 科研費基盤研究B, 代表, 「日中戦時下の中国語雑誌『女声』研究—フェミニスト作家田村俊子編集長の視点から」
- ・ 2019年度～2023年度, 科研費基盤研究C, 分担, 「日本から発信して世界を結ぶ村上春樹—『惑星思考』文学の研究」(京都大学)
- ・ 2021年度～2024年度, 科研費基盤研究C, 分担, 「2021年～2024年 近代日中女性の「非体制の模索とジェンダー: 竹中繁・月曜クラブ・一土会を中心に」, (京都産業大学)

辰田 和佳子

- ・ 2020年度～2022年度, 科研費基盤研究C, 代表, 「視覚障がい者の身体活動促進がもたらす社会参加の向上とQOLへの効果研究課題名」

松尾 絵梨子

- ・2022年度～2024年度, 科研費基盤研究C, 分担, 「薬局における運動器障害の予防を目指した健康支援プログラムの開発と評価」, (日本大学)
- ・2022年度～2023年度, 2022年度「牛乳乳製品健康科学」学術研究(指定研究), 分担, 「長期に継続して乳和食または和食を摂取した女子バレーボール競技者の体幹, 下肢筋力, 骨格筋, 疲労感などに対する影響, 介入研究」, (東京聖栄大学)

小泉 夏子 (徳永 夏子)

- ・2020年度～2022年度, 科研費基盤研究C, 分担, 「日本のファンシーをめぐる1970年代の女性文化再編の研究—サンリオ出版を中心に」, (慶應義塾大学)
- ・2020年度～2023年度, 科研費若手研究, 代表, 「大正・昭和期における少女投稿雑誌の研究——『令女界』を中心として——

原 怜来

- ・2018年度～2022年度, 科研費若手研究, 代表, 「オープンウォータースイミングトップ選手の生理学的特性と競泳競技への影響について」

学会発表 (共同演者・座長含む)

小山 裕三

- ・東京体育学会第14回学会大会, 2023年3月26日(日), 都内大学 (発表予定)

上野 広治

- ・日本アプライドスポーツ科学会第2回大会, 2023年1月21日, オンライン (日本アプライドスポーツ学会)
- ・日本コーチング学会第34回大会, 2023年2月28日～3月1日, 日本体育大学 世田谷キャンパス<演題申込済み>

青山 亜紀

- ・日本コーチング学会 第34回学会大会, 2023年2月28日～3月1日, 日本体育大学 (世田谷キャンパス)

北田 典子

- ・第30回体力・栄養・免疫学会大会, 2022年8月27日～8月28日, 弘前大学
- ・日本薬学会第143年会, 2023年3月25日～2023年3月28日, 北海道大学

小松 泰喜

- ・第95回日本産業衛生学会2022年5月25日(水)～28日(土), 高知県立県民文化ホール等 (3軸加速度センサ(活動量計)を用いた作業計測とその解析に関する研究について)
- ・日本転倒予防学会第9回学術集会 会期: 2022年10月15日(土)～16日(日) 会場: パシフィコ横浜 会長: 鮫島直之(国家公務員共済組合連合会東京共済病院脳神経外科 部長)「スポーツと転倒予防」座長

種ヶ嶋 尚志

- ・第88回日本応用心理学会大会発表「競争心と心理的スキルとの関連に関する研究」2022年9月17日～9月18日 京都工芸繊維大学
- ・第88回日本応用心理学会大会発表「体育系大学生における認知的方略と心理的競技能力の関連性につ

いて」2022年9月17日～9月18日 京都工芸繊維大学

- ・第2回日本アプライドスポーツ科学学会大会発表「大学生アスリートにおけるハーディネスと主観的幸福感との関連」2023年1月21日（オンライン開催）日本大学工学部

西川 大輔

- ・iVRTS (Innovative Virtual Reality Training System) を利用したメンタルトレーニング効果の検証, 佐藤 佑介 (日本大学商学部)・深見将志 (日本大学商学部)・遠藤幸一 (日本大学商学部)・水島宏一 (日本大学文理学部)・西川大輔 (日本大学スポーツ科学部)・高寄正樹 (日本大学生産工学部)・越澤亮 (日本大学経済学部) 第2回日本アプライドスポーツ科学学会大会, 令和5年1月21日, オンライン開催

布袋屋 浩

- ・学会発表 (筆頭): 「大学生女子アスリートの月経に関する実態調査」, 第14回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 (14th JOSKAS) & 第48回日本整形外科スポーツ医学会学術集会 (48th JOSSM), 2022/06/17, 札幌コンベンションセンター
- ・学会発表・シンポジスト: 「競技アスリートに対するレーザーの有用性」, 第33回日本レーザー治療学会 総会・学術大会, 2022/06/19, J:COM浦安音楽ホール
- ・座長: 第39回埼玉膝・スポーツ医学研究会 一般演題 I 座長, 第39回 埼玉膝・スポーツ医学研究会, 2022/12/03, 埼玉県県民健康センター
- ・学会発表・シンポジスト: 「大学女子アスリートの月経にまつわる諸問題」 第33回日本小児整形外科学会学術集会, 2022/12/09-2022/12/10, パシフィコ横浜

山崎 眞紀子

- ・昭和文学会2022年度春季大会, 「特集 地平線を越えて—トランスジェンダーの日本文学」 2022年6月22日, zoom開催「田村俊子の二十五年 中国雑誌『女声』編集長左俊芝としての終焉」

辰田 和佳子

- ・22nd IUNS-International Congress of Nutrition, 2022年12月6日～2022年12月11日, 東京国際フォーラム

谷口 郁生

- ・2022年度私情協 教育イノベーション大会, 「初年次教育の情報環境整備に向けたシステム更新」, 2022年9月8日, 開催場所Zoom開催 (公益社団法人私立大学情報教育協会)

本道 慎吾

- ・日本アプライドスポーツ科学学会第2回大会, 2023年1月21日, 福島県 (日本大学工学部)

松尾 絵梨子

- ・第30回体力・栄養・免疫学会, 2022年8月27日～2022年8月28日, 弘前大学大学院医学研究科附属健康未来イノベーションセンター
- ・日本薬学会第143年会, 2023年3月25日～2023年3月28日, 北海道大学

加藤 幸真

- ・第30回体力・栄養・免疫学会, 2022年8月27日, 弘前大学
- ・日本レジャー・レクリエーション学会第52回学会大会, 2022年11月13日, 早稲田大学

原 怜来

- ・日本水泳・水中運動学会2022年次大会, 2022年10月8～9日, 東京女子体育大学

- ・日本アプライドスポーツ科学会第2回大会，2023年1月21日，オンライン（日本アプライドスポーツ学会）
- ・日本コーチング学会第34回大会，2023年2月28日～3月1日，日本体育大学 世田谷キャンパス<演題申込済み>

宮内 育大

- ・日本アプライドスポーツ科学会第2回大会，2023年1月23日（土），オンライン開催
- ・東京体育学会第14回学会大会，2023年3月26日（日），都内大学（発表予定）

上原 優香

- ・第30回体力・免疫・栄養学会大会，2022年8月27日～8月28日

桶田 由衣

- ・日本英語文化学会 第25回全国大会，2022年9月2日，明海大学 浦安キャンパス（日本英語文化学会）

学術誌（投稿論文，依頼原稿等）

小山 裕三

- ・消化器クリニカルアップデート，「外から見た日本医療への提言—今後の医療界に期待すること—スポーツ（医学）科学」，2022（4）No.1，83-87，2022，査読有

上野 広治

- ・スポーツデータサイエンス，「オープンウォータースイミングにおける戦略の性別差」，p.111-121，2022年4月5日，株式会社朝倉書店，査読無
- ・スポーツ科学研究，「オープンウォータースイミング選手の生理学的特性について」，第7集，掲載予定，査読有

河合 一武

- ・Frontiers in Human Neuroscience
「Activation of human spinal locomotor circuitry using transvertebral magnetic stimulation (Open access)」
Volume 16, 23 September 2022, 1016064 査読有
<https://www.frontiersin.org/articles/10.3389/fnhum.2022.1016064/full>

小松 泰喜

- ・Interdisciplinary Neurosurgery 「Interdisciplinary Neurosurgery: Advance Techniques and Case Management (Open access)」 Vol30, Dec, 2022,. 101605 査読有
- ・Journal of Affective Disorders Reports 「Interactive effects of job stressor and chronotype on depressive symptoms in day shift and rotating shift workers. (Open access)」 Vol 9, July 2022, 100352
- ・日本神経回路学会誌 巻頭言「姿勢歩行研究のフロンティア—臨床医学における姿勢と歩行のとらえ方—」 30巻，1号 p1-2 2023. 査読無
- ・ボクシング選手の外傷・障害に対する質問紙調査—男女選手間の検討—。泉 重樹，小松泰喜，他 日本臨床スポーツ医学会誌. 31 (1)， p153-161, 2023

清水 享

- ・スポーツ科学研究，「博多祇園山笠に関する著作(前編)」，第7集，5p，2023年3月，査読有
- ・スポーツ科学研究，「博多祇園山笠に関する著作(後編)」，第7集，5p，2023年3月，査読有

鈴木 典

- ・コーチング学研究, 「クロスカントリースキーのダイアゴナル走法に対する機能分析に基づく観察評価基準の妥当性と信頼性」, 36-2, 査読有
- ・スポーツ科学研究, 「オープンウォータースイミング選手の生理学的特性について」, 第7集, 査読有

布袋屋 浩

- ・日本レーザー治療学会誌, 「競技アスリートに対するレーザーの有用性」, JaLTA 20(1): 79,2022/06, 査読有
- ・日本小児整形外科学会雑誌, 「大学女子アスリートの月経にまつわる諸問題」, 31/ 3 : S17, 2022/11, 査読有

森丘 保典

- ・Journal of Human Kinetics, 「Squat and Countermovement Vertical Jump Dynamics Using Knee Dominant or Hip Dominant Strategies」 86巻, 63-71頁, 2023年1月, 査読有
- ・大学地域連携学研究, 「スポーツ指導者の養成および活用における大学地域連携のあり方:運動部活動の地域移行化動向を踏まえて」 2巻, 15-21頁, 2023年3月, 査読有

山崎 眞紀子

- ・「村上春樹作品における〈食〉と〈性〉—初期作品と阪神淡路大地震以後の作品との比較を通して」(『FLORIENTALIAEAST ASIAN STUDIES SERIES: Food issues 食事 Interdisciplinary Studies on Food in Modern and Contemporary East Asia』, (University of Florence, Italy, 2021年, *実際に刊行されたのは2022年5月) 全193頁のうち59頁~75頁所収: 査読有

秋葉 倫史

- ・Medieval English Syntax Studies in Honor of Michiko Ogura, Habban + Past Participle of an Intransitive Verb in Old English (共著), 61巻, 99-119頁, 2022年4月, 査読有

山本 大

- ・スポーツ科学紀要, 「サッカー指導者養成講習会受講生の意識調査に基づく現状と課題」, 第7集, 18ページ, 2023年3月, 査読有

原 怜来

- ・スポーツデータサイエンス, 「オープンウォータースイミングにおける戦略の性別差」, p.111-121, 2022年4月5日, 株式会社朝倉書店, 査読無
- ・月刊水泳, 「【OWS】世界選手権代表第一次合宿」, 第550号, P.17, 2022年5月15日, 公益財団法人日本水泳連盟機関誌月刊水泳, 査読無
- ・水泳教師教本, 「オープンウォータースイミング競技について」, p.184, 2022年6月10日, 株式会社大修館書店, 査読無
- ・SWIMMING MAGAZINE, 「Open water swimming オーシャンズカップ2022」, 第46巻第8号, P.73, 2022年7月11日, 株式会社ベースボール・マガジン社, 査読無
- ・月刊水泳, 「【OWS】オーシャンズカップ2022」, 第552号, P.17, 2022年7月15日, 公益財団法人日本水泳連盟機関誌月刊水泳, 査読無
- ・月刊水泳, 「【OWS】第98回日本選手権水泳競技大会」, 第556号, P.10-11, 2022年11月15日, 公益財団法人日本水泳連盟機関誌月刊水泳, 査読無

- ・月刊水泳, 「【OWS】 来年度開催される世界選手権ドーハ大会に向け低水温対策の海合宿を実施」, 第558号, P.33, 2023年1月15日, 公益財団法人日本水泳連盟機関誌月刊水泳, 査読無
- ・スポーツ科学研究, 「オープンウォータースイミング選手の生理学的特性について」, 第7集, 掲載予定, 査読有

上原 優香

- ・「スポーツデータサイエンス」, 196頁, 2022年4月, 査読無

桶田 由衣

- ・スポーツ科学研究, 「遊び, 非難, 残忍さ: John Miltonの作品における“sport”(前編)」, 第7集, 掲載予定, 査読有
- ・スポーツ科学研究, 「遊び, 非難, 残忍さ: John Miltonの作品における“sport”(後編)」, 第7集, 掲載予定, 査読有

行政その他の委員会委員

西川 大輔

- ・公益財団法人世田谷区スポーツ振興財団理事 令和3年4月1日～令和4年3月31日 (任期)

森丘 保典

- ・公益財団法人日本スポーツ協会: 国民体育大会委員会委員 (2019年7月17日～現在), 身体リテラシー (Physical Literacy) 評価尺度の開発研究班員 (2021年4月1日～現在), 幼児期からのアクティブ・チャイルド・プログラム普及ワーキング班員 (2017年6月1日～現在), 体育・スポーツにおける暴力・虐待・差別等の人権侵害防止に関する調査研究班員 (2022年4月1日～現在)
- ・独立行政法人日本スポーツ振興センター: 日本アンチ・ドーピング規律パネル委員 (2016年6月1日～現在)
- ・公益財団法人埼玉県体育協会: スポーツ科学委員会・科学専門部会員 (2008年4月～現在), 彩の国スポーツ推進パートナー (2022年5月2日～現在)

松尾 絵梨子

- ・警視庁世田谷警察署協議会委員・副会長・2021年6月1日～2023年5月31日

澤野 大地

- ・日本オリンピック委員会・理事・令和3年6月25日～令和4年6月23日 (任期)
- ・日本オリンピック委員会アスリート委員会・委員長・平成29年7月4日～令和4年6月23日 (任期)

学会の役職・活動状況

青山 亜紀

- ・日本コーチング学会 理事 2021年4月1日～2023年3月31日 (任期)
- ・日本陸上競技学会 理事 2020年4月1日～2023年3月31日 (任期)

北田 典子

- ・体力・栄養・免疫学会・理事・2019年4月1日～現在

小松 泰喜

- ・ISB/JSB 2023福岡大会 (国際バイオメカニクス学会) Scientific Committee運営委員

- ・一般社団法人日本理学療法学会・研究安全・学術倫理審査委員会委員長（2022年6月25日～2024年6月定時総会終了）
- ・日本スポーツ理学療法学会・評議員・2021年8月1日～2025年8月15日（任期）
- ・日本転倒予防学会・代議員・2022年4月1日～2023年3月31日（任期なし）
- ・公益財団法人身体教育医学研究所・客員研究部長・2022年4月1日～2023年3月31日（任期なし）
- ・日本転倒予防学会第10回学術集会・運営委員会委員・2022年4月1日～2023年10月9日（任期）

種ヶ嶋 尚志

- ・日本応用心理学会・理事・2021年4月1日～2023年3月31日（任期）
- ・日本応用心理学会・機関誌編集委員会委員・2021年4月1日～2023年3月31日（任期）

布袋屋 浩

- ・埼玉膝スポーツ医学研究会・幹事 2002年3月31日～
- ・埼玉県北部整形外科懇話会・世話人 2006年3月31日～
- ・日本レーザー治療学会・評議員 2008年3月31日～
- ・日本整形外科スポーツ医学会・代議員 2009年3月31日～

森丘 保典

- ・日本体育・スポーツ・健康学会：政策検討・諮問委員会委員（2017年7月1日～現在）
- ・日本コーチング学会：理事・社会への情報発信特別委員会副委員長（2015年4月1日～現在）
- ・日本陸上競技学会：理事・学会大会委員長（2002年10月1日～現在）
- ・日本スプリント学会：理事（2000年8月1日～現在）

山崎 眞紀子

- ・昭和文学会幹事，2017年4月1日～現在に至る
- ・日本近代文学会，2017年4月1日～現在に至る

辰田 和佳子

- ・日本栄養改善学会・評議員・2022年11月1日～2024年10月31日

田中 竹史

- ・日本大学英文学会運営委員・2021年4月1日～2023年3月31日（任期）

松尾 絵梨子

- ・日本体力医学会・評議員・2019年9月21日～現在

加藤 幸真

- ・富士学会・評議員・2021年4月1日～2024年3月31日

小泉 夏子（徳永 夏子）

- ・日本文学協会・委員・2020年11月～2023年11月（任期）

原 怜来

- ・日本水泳・水中運動学会，日本体育・スポーツ・健康学会，東京体育学会，日本コーチング学会，アブライドスポーツ学会，スポーツパフォーマンス研究学会 学会員

桶田 由衣

- ・日本ミルトン協会・会計監査・2020年4月1日～2023年3月31日（任期）

競技団体の役職・帯同等

小山 裕三

- ・関東学生陸上競技連盟・評議員・2022年4月1日～2023年3月31日（任期）

上野 広治

- ・公益財団法人日本水泳連盟 副会長
- ・公益財団法人日本水泳連盟 指導者養成委員
- ・公益財団法人日本水泳連盟 競技者資格審査委員
- ・公益財団法人日本水泳連盟 倫理委員
- ・公益財団法人日本水泳連盟 危機管理委員
- ・公益財団法人東京都水泳協会 副会長

青山 亜紀

- ・公益社団法人日本陸上競技連合 調査研究委員

大嶋 康弘

- ・公益財団法人 日本陸上競技連盟 イベントプレゼンテーションチーム 2022年11月～
- ・公益財団法人 東京陸上競技協会・理事・2021年6月1日～2023年5月31日（任期）

河合 一武

- ・競技団体名：全日本大学女子サッカー連盟
- ・役職：評議員
- ・2016年4月1日～現在

北田 典子

- ・全日本柔道連盟・常務理事・2013年6月1日～2023年6月1日（任期）

布袋屋 浩

- ・日本ゴルフツアー機構・指定医師 2000年2月～
- ・日本大学陸上競技部特別長距離部門部長 2019年1月～

森丘 保典

- ・公益財団法人日本オリンピック委員会：強化スタッフ（2011年4月～現在）
- ・公益財団法人日本陸上競技連盟：指導者養成委員会政策プランニングディレクター（2021年9月1日～現在）、科学委員会副委員長（2015年6月1日～現在）、陸上競技研究紀要編集委員（2012年7月1日～現在）

梅下 新介

- ・一般社団法人日本ボクシング連盟
総務委員会委員委員長・令和3年4月1日～令和4年8月8日（任期満了）
強化委員会委員・令和4年9月1日～令和6年8月31日（任期）
- ・公益財団法人 日本オリンピック委員会
ボクシング 強化スタッフ（コーチング, 情報・戦略）

田中 光輝

- ・日本コーチング学会 会員
- ・日本武道学会 会員

原 怜来

- ・公益財団法人日本水泳連盟 オープンウォータースイミング委員長
- ・公益財団法人日本水泳連盟 アンチドーピング委員
- ・公益財団法人日本水泳連盟 国際委員
- ・公益財団法人日本水泳連盟 評議員
- ・公益財団法人東京都水泳協会 理事
- ・公益財団法人東京都水泳協会 オープンウォータースイミング委員長
- ・公益財団法人日本オリンピック委員会 強化スタッフ（マネジメントスタッフ／情報・戦略スタッフ）

シンポジウム

日吉 秀松

- ・復旦大学第32回国際シンポジウム：留学生と中日関係—中日国交正常化50周年を記念して
開催日：2022年11月26日－27日
主催： 復旦大学日本研究センター
開催場所（機関名）： クラウンプラザホテル（復旦）
報告テーマ：白蓮事件と在日中国人留学生（オンライン参加）

講演, その他

小山 裕三

- ・部活動の地域移行等における体育系大学・学部への期待，2022年12月10日（土），全国体育系大学学
長・学部長会，日本大学スポーツ科学部

上野 広治

- ・国際競技力向上に向けた取り組み～東京オリンピック～，2022年10月9日，日本大学大学院総合社会
情報研究科，オンライン

青山 亜紀

- ・公益財団法人日本水泳連盟「公認水泳コーチ更新研修会」講師，2022年12月1日～2023年1月31日
（オンライン）

北田 典子

- ・「豊かな心と温かい人間関係を育み，自己指導能力の育成を目指す生徒指導」第18回 秋田県小・中学
校生徒指導研究大会 能代山本大会2022年11月25日，秋田県生徒指導研究会，能代市文化会館 能代市
中央公民館，秋田県教育委員会

小松 泰喜

- ・第21回脳神経科学東京セミナー講演名，ニューロリハビリテーションへのいざない（令和4年4月10
日），主催：運動神経科学研究会，日本大学三軒茶屋キャンパス
- ・第22回脳神経科学大阪セミナー講演名，ニューロリハビリテーションへのいざない（令和4年9月4
日），主催：運動神経科学研究会，ブリーゼプラザ

森丘 保典

- ・アクティブ・チャイルド・プログラム（JSPO-ACP）普及講習会，2022年11月26日，公益財団法人日

本スポーツ協会，三条市栄体育館

- ・世田谷区スポーツ・レクリエーション指導者制度（スポ・レクネット）「基礎講習会」，2023年1月21日，世田谷区スポーツ振興財団，世田谷区立総合運動場（陸上競技場多目的室）
- ・JAAF公認ジュニアコーチ養成講習会，2023年1月22日，公益財団法人日本陸上競技連盟，オンライン
- ・次世代を担う指導者育成研修会，2023年1月24～25日，大分県教育委員会，アートホテル大分

田中 竹史

- ・「母語を活かした外国語教育の試み」，2022年12月3日，中島研究会，オンライン

澤野 大地

- ・オリンピック派遣事業講演会，令和4年11月11日，主催：福岡県教育委員会，開催場所：福岡県立三潨高等学校

その他（上記以外の研究活動）

小山 裕三

- ・2022 オレゴン世界陸上 TBS系列 テレビ解説，2022年7月16日（土）～2022年7月25日（月）

青山 亜紀

- ・全国体育系大学学長・学部長会 講演会 総合司会 2022年12月10日
主催：全国体育系大学学長・学部長会
共催：日本大学スポーツ科学部スポーツ科学研究所
開催場所：日本大学スポーツ科学部（三軒茶屋キャンパス）

河合 一武

- ・日本大学女子サッカー部 監督代行
第31回全日本大学女子サッカー選手権大会<インカレ>第3位

種ヶ嶋 尚志

- ・日本応用心理学会優秀大会発表賞・2022年12月

山崎 眞紀子

- ・山崎眞紀子「青島—翻訳都市，須賀敦子の青島」（和田博文，王志松，高潔編『中国の都市の歴史的記憶』勉誠出版，2022年9月）全365頁のうち176～189頁所収
- ・山崎眞紀子「第9章『ノルウェイの森』誕生の地ローマ・トレコリレジデンス探訪記—村上春樹『遠い太鼓』から探るローマで誕生した意味」（小島基洋，山崎眞紀子，高橋龍夫，横道誠編『我々の星のハルキ・ムラカミ文学—惑星的思考と日本的思考』彩流社，2022年10月）全335頁のうち247～272頁所収

「スポーツ科学研究（スポーツ科学研究所紀要）」執筆要領

（第8集については原稿募集時期に周知致します）

1. 投稿資格

- ①投稿者は、研究紀要刊行年度に日本大学スポーツ科学部スポーツ科学研究所（以下「研究所」という）に在籍する所員、研究補助員及び研究員とする。
- ②過年度に研究所に在籍した所員や現所員から推薦を受けた者については、スポーツ科学部スポーツ科学研究所運営委員会（以下「委員会」という）の承認により、投稿者となることが可能である。
- ③他学部又は学外機関の研究者を代表執筆者とする原稿については、第1号に定める者を共同執筆者に含む場合に限り、委員会の承認により当該代表執筆者は投稿者となることができる。
- ④その他、投稿の申し出があり委員会が承認した者を投稿者となることができる。

2. 投稿原稿

- ①投稿原稿は、他誌等に未発表のものでなければならない。
- ②投稿原稿は、完全原稿でなければならない。
- ③投稿原稿の分量（図表・注記を含む）は、次のとおりとする。
「総説」, 「原著論文」 刷り上り12頁(9,600文字)以内
「研究資料」, 「実践報告」, 「事例報告」 刷り上り8頁(6,400文字)以内
- ④第3号の分量を大幅に超える場合や複数の号への分割掲載を希望する場合、また委員会が認めるその他の原稿については、委員会においてその取扱いを決定する。
- ⑤投稿者は、投稿原稿中に含まれる第三者の著作からの転載等について、その著作権上及びその他法令上の手続きが必要な場合には、投稿者があらかじめ当該手続きを行うものとする。それらについて問題が生じた場合には、投稿者がその責任を負うものとする。

3. 原稿の種類

①原稿の種類

投稿原稿の構成部門はスポーツ科学系論文（スポーツ科学部門）、一般教養系論文（一般教養部門）と2部門から構成する。

原稿の種類は、総説、原著論文、研究資料、実践報告、事例報告とし、総説、原著論文は刷り上り12頁以内、研究資料、実践報告、事例報告は8頁以内とする。

総説：特定の研究領域に関する主要な文献内容の総覧であり、その内容は特定の視点に基づく体系的なまとめを持つものとする【査読なし】。

原著論文：科学論文としての内容と体裁を整えており、新たな科学的な知見をもたらすものとする【査読あり】。

研究資料：調査や実験の結果を主体とした報告であり、スポーツ科学研究の発展または人文、社会科学および自然科学研究の発展に寄与する資料として価値が認められるものとする【査読あり】。

実践報告：現場からの貴重な情報を基にした研究で、指導法に関する実用的研究や、総合的に分析したものとする【査読なし】。

事例報告：特定の少数の事例を詳細に調査・研究し、その結果を報告することでスポーツ科学研究の発展または人文、社会科学および自然科学研究の発展に寄与できるものとする【査読なし】。

②抄録

「総説」と「原著論文」には抄録を付ける。本文が和文の場合は200 words程度の英文抄録を付ける。本文が英文の場合は300～400字程度の和文抄録と200 words程度の英文抄録を付ける。なお、本文が英文の場合は査読用に和訳を添える。この抄録には、原則として研究の目的、方法、結果、および結論などを簡潔に記述すること。

- 1) 英文抄録については、委員会の責任において一応の吟味をする。英文に明らかな誤りがある場合には、原意を損なわない範囲で修正することがある。
- 2) 英文抄録の作成にあたっては、特に次の点に留意すること
 - ・日本国内で知られている固有名詞でも、海外の読者に知られていないようなものについては、簡単な説明を加えること。
 - ・段落の初めは半角5文字分空け、句読点としてのコンマ (,) およびピリオド (.) の後は1文字あけること。
 - ・省略記号としてのピリオド (.) の後はあけないこと。

③本文

本文は日本語の場合は原則的にひらがな現代かな遣いとし、「である調」を用い、常用漢字を使用する。外国語の場合は原語表記またはカタカナを用いる。アルファベット等の略称に関しても原語表記または訳語を表記する。また、句点（終止符）はピリオド (.)、読点（語句の切れ目）はコンマ (,) を用いる。脚注は頁ごとに付記する。原稿の全体あるいは一部を日本語以外の外国語で執筆した場合には、当該言語を母語とする者によるネイティブチェック（校閲）をあらかじめ受けることとする。

なお、原稿は本要領2-②で示したように完全原稿で提出する。

④図表（写真を含む）

原稿は、本誌に直接印刷できるように、文字や数字を鮮明に書く。原則として白黒印刷とし、カラー印刷を必要とする場合は筆者が実費負担とする。図表原稿は図表1式を別原稿とし、1頁に図表1枚を掲載する。また図表には通し番号とキャプションを記載する。キャプションの引用文献の記述も本文に準拠して記入する。本文中への挿入箇所は、本文中にそれぞれの番号を明記する。

なお、図表の注記は、各図表の下に記入し、符号は、上付ダガー (†, ††, †††) を用いることとし、統計学上の有意水準を示す場合のみアスタリスク (*, **, ***) を用いる。

⑤本文中での文献引用の方法

本文中で引用文献に言及した場合、文章の右肩か著者名の右肩に、末尾の引用文献に照応する番号を付ける。また、著者氏名は3名まで著者名を記載し、4名を越える著者名については、日本語論文は「他」、外国語論文は「et al.」とする。題名、雑誌名、西暦年号、巻数、初め及び終わりの頁、の順に記載する。

例) 遠藤¹⁾らによれば

誌名の略記は、引用雑誌所載の略名を用いる。単行本の場合、著者名、書名（編著の場合は、論文名、書名、編者氏名）、版数、発行所、発行地、年次、引用頁の順に記す。

学会発表の抄録を引用するときは表題の最終に（会議録）、欧文発表の場合は（Abstract）とすること。その他、以下の例に従って誤りがないよう注意すること。文献規定が守られていない場合や引用の誤りがある場合は、採択されないことがある（例示参照）。

本文中に引用されていない文献は、文献表に記載しない。doiの記載を推奨する。

⑥文献リストの記載例

例)

雑誌から直接引用する場合、番号、著者名：論文表題、掲載雑誌、巻：頁（始頁－終頁）、西暦年数の順に記す。

- 1) 遠藤俊郎, 加戸隆司: バレーボール選手の心理的適性に関する研究－メタ分析の手法を用いた他種目競技者との比較－, バレーボール研究, 2004, 6 (1) : 7-14
 - 2) 仲村隆三, 斉藤雄介: 臨床運動学. 第3版, 医学書院, 東京, 1990, 18-35
 - 3) 小原謙一, 江口淳子, 石浦佑一, 他: 実験モデルによる安楽座位におけるずれ力推定値の妥当性の検証, 理学療法学, 2007, 34 (suppl) : 511
- 単行本から引用する場合、番号、著者または編者名、章名、書名（章名がある場合は書名をイタリック体にする）、版数（括弧に入れる）、編者名（章著者がある場合）、発行所、発行所の所在地、引用頁、西暦年数の順に記す。
- 4) 佐々木万丈: スポーツと子どものストレス, 最新スポーツ心理学－その軌跡と展望, 大修館書店, 東京, 56-67, 2004.

WEBから引用する場合

- 5) ABC 看護学会: ABC看護学会投稿マニュアル, <http://www.abc.org/journal/manual.html>, 2003.1.23. (閲覧日を記す)

欧文の雑誌と単行本から引用する場合

- 6) Feigley, D. A.: Psychological burnout in high level athletes. *Physician and Sports medicine*.1984; 109(19): 12-10
- 7) Murray PR, Rosenthal KS, Kobayashi GS.: *Medical Microbiology*, 4thed.: StLouis Mosby; 2002.
- 8) Meltzer PS, Kallioniemi A, Trent JM.: Chromosome Alterations in Human Solid Tumors.: Vogelstein B, Kinzler KW, editors. *The Genetic Basis of Human Cancer*. In New York: McGraw-Hill; 2002: 93-113
- 9) Brandes AA, Taphoorn MJB, Eskens FALM, et al.: Temozolomide chemotherapy in recurrent oligodendroglioma. *Neurology* 2000; 54 (suppl3): A12. (Abstract)
- 10) Garrow A, Weinhouse G.: Anoxic brain injury: assessment and prognosis. In: *UpToDate Cardiovascular Medicine* [online]. <http://www.UpToDateInc.com>. February 22.2000.

4. 原稿規定

①用紙の設定と文体

原稿は、ワードプロセッサで作成し、A4判縦置き横書き、全角40字20行（英文綴りおよび数値は半角）で、上下左右に2～3cmの余白をとる。頁番号を下中央に記入し、通しの行番号も入れる。フォントの大きさは10.5ポイントとする。使用する言語は、日本語、英語のどちらかとする。フォントは、日本語の場合にはMS明朝またはMSゴシック、英語の場合にはTimes New Romanとする。

②提出方法

原稿（図表、写真を含む）の提出は、電子ファイル（MS-WordやPowerPointファイルなど）にして、投稿申込書を添えて、電子メールにて編集委員会（rmss.spo-edit@nihon-u.ac.jp）宛に送付する。提出する際の電子ファイル名は著者名と投稿原稿の種類を簡潔に記すこと。

図表600dpi以上（拡張子はjpeg・png・gif等一般的なもの）程度

写真600dpi～1200dpi（拡張子はjpeg・png・gif等一般的なもの）程度

③表紙

原稿の表紙（1枚目）には下記の事項を記入する。（2）（3）（4）（5）については和文と英文の両方を記入する。

- (1) 原稿の種類
- (2) 題目
- (3) 著者名
- (4) 所属機関名
- (5) 3～5語のキーワード
- (6) 連絡先（住所、電話番号、電子メールアドレスなど）
- (7) 原稿審査を希望する分野（複数可）

④題目

題目は、和文と英文ともに研究の内容を的確に表現しうるものであること。副題をつける場合には、コロン（:）を用い、主題に続ける。主題、副題ともに、英文タイトルの最初の単語は、品詞の種類にかかわらず第1文字を大文字にし、その他は、固有名詞など、特に必要な場合以外はすべて小文字とする。

⑤著者名、所属機関名

筆頭著者と共著者ともに、和文と英文にて正式名称を記入する。大学の場合は学部名を、大学院の場合には研究科名、公官庁や民間団体の場合は部課名まで記入する。

⑥キーワード

キーワードは、論文の内容や特色を的確に示し、検索に役立ち得るものとする。題目はそのまま検索の対象になるので、題目に含まれていないものをキーワードとして記入すること。和文と英文とも3～5語を記載する。本文が和文の場合、和文キーワードは本文の前、英文キーワードは英文抄録の末に記載する。本文が英文の場合、英文キーワードは本文の前、和文キーワードは和文抄録の末に記載する。

⑦連絡先

連絡先は、査読過程での諸連絡に用いる。緊急の際に確実に連絡することができる連絡先（電話番号、電子メールアドレス）を記入する。

5. 倫理審査

投稿原稿の作成に際して、その記載内容が倫理審査を必要とするものである場合は、事前に倫理審査委員会等の承認を受けているものとする。

人体ならびにヒト組織を対象とした科学研究を取り扱う論文では、その実験は1964年のヘルシンキ宣言 (<https://www.wma.net/what-we-do/medical-ethics/declaration-of-helsinki/>) で承認された倫理基準、または文部科学省・厚生労働省および経済産業省により制定された「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」に従って実施されなければならない。当該研究がこれらのガイドラインに従って実施されたことを投稿論文内に明記し、さらに倫理委員会等が発行した承認書の承認番号を論文中に記載するものとする。

6. 利益相反

投稿原稿の作成に際して、本学の利益相反（COI）に関する指針に基づきその内容に影響を及ぼしうる資金提供、雇用関係、その他個人的な関係が明示されていなければならず、利益相反（COI: conflict of interest）の有

無にかかわらず明記するものとする。

7. 謝辞・付記

謝辞や付記は本文とは分け、それぞれ「謝辞」「付記」の見出し語を用いて記述する。

以 上

編集後記

日本大学の歴史は、その経緯から他大学を圧倒するほど日本の大学スポーツをリードし、日大スポーツの歴史が、日本のスポーツ競技の歴史と言っても言い過ぎではありません。これまで輩出してきたオリンピック選手は数多く、先般行われた「2020東京オリンピック・パラリンピック」に学生6名、卒業生5名、「2022北京オリンピック・パラリンピック」にも学生4名、卒業生1名を選手として派遣しています。世界水準を目指した選手の強化が進められた成果であるとともに、学業を大切に、学生アスリートとは言え、豊かな人間性を育てる教育を学部の理念として、学内の教育環境へも配慮をしてきた成果が伺えます。

さて、本号でも巻頭言を小山研究所長(学部長・教授)に執筆をしていただき、コーチング学による指導法の将来についてを語っていただきました。コーチングとして重要なことを、他者との関係性から、第一に受け入れる(受容性)気質を持ち、自己を知り、常に他者への配慮を忘れないこと。そして指導論として「褒めて育てる」よりも「褒めるより叱って育てる」の理念は今後も本学部の信念として根付いていくものと思われる。

本号には5名の教員から8編の投稿を頂き、学術誌としての価値が高まりつつあります。原著論文である原所員(専任講師)の「オープンウォータースイミング選手の生理学的特性について」では、競技特性からVO2peak, vLT, vOBLaを取り上げ、それぞれの結果から生理学的特性について考察を述べています。研究報告では山本所員(准教授)の「サッカー指導者養成講習会受講生の意識調査に基づく現状と課題」は、コーチングから部活動指導に至る過程で、養成講習会受講生へのインタビューを含めた多様な調査をおこない、受講者視点で有意義な講習会の運営の基礎資料となる論述となっています。

また、総合教育科目の教員である3名からも多彩・多様な内容の投稿がありました。清水所員(教授)から「博多祇園山笠に関する著作について(前・後編)」は博多祇園山笠を文化、宗教、歴史、社会、文学、芸術、スポーツなどからどのように綴られ、まとめられたのかを整理分析した総説となっています。そもそも1964年の東京オリンピックの開催を記念して制定された『体育の日』は、現在文部科学省などを中心に中央記念行事としてスポーツ祭りとなり、平成17年より毎年開催されています。祭りがスポーツの発展に如何に寄与してきたか、文献研究の手本として興味深い内容となっています。また、桶田所員(助教)の原著論文「遊び、非難、残忍さ“John Milton”の作品における“sport”(前・後編)」は“sport”の語意の成り立ちを知り、スポーツ科学を研究する源として理解すべき内容となっています。戦争や紛争の続く世界情勢の中、日吉所員(教授)から事例報告「ピンポン外交と日本の役割についての考察(前・後編)」の投稿がありました。競技スポーツは諸外国とその競技力を競うことは否定できず、一方でスポーツの外交性は、きわめて高く、6月28日に国立台湾師範大学スポーツとレクリエーション学院と本学が学術交流に関する協定を締結したことの根拠となりうる報告となっています。

スポーツ科学部のカリキュラムは、伸び代と可能性、そして将来性のある学生アスリートに対し、感性が重要とし、研ぎ澄まされた感覚という認識で特別視するのではなく、「情熱・愛情」、さらに「形をもって形にこだわらず」を教育理念をとっています。本号でも誰もが幸せを享受できるスポーツ科学研究が出揃い、学部の発展に必要な投稿が多く、執筆者の不断の努力を積み重ねが現れた内容となっています。

学部教育の成果である「大学IRの活動を通して多角的なデータ分析やAI予測モデルを活用する学生支援」から得た結果を踏まえ、今春には、スポーツ科学研究科(修士課程)が開設され、研究者養成課程が認知されることも重要です。そのためにも、スポーツ科学研究所所員の他、すべてのスポーツ科学に従事する研究者にぜひとも手を取っていただきたいきますよう。

第7集 スポーツ科学研究編集委員長
小松 泰喜

スポーツ科学研究 第7集

編集 『スポーツ科学研究』編集委員会

発行 日本大学スポーツ科学部スポーツ科学研究所

〒154-8513 東京都世田谷区下馬三丁目34番1号

TEL 03-6453-1600 (事務局代表)

FAX 03-6453-1630 (事務局代表)

2023年3月 発行

Journal of Sports Sciences

Vol.7

March 2023

Research Institute of Sports Sciences
College of sports sciences, Nihon University
